

力はチートだが精神は一般人。そんな男の物語
嫌なんで逃げました。）（旧 面倒事は

クリアグラタン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

f g o世界に転生した男が厄介事からトンスラする話。尚、彼はf g oを第1・5部までしか知らない模様

本編

「世界の危機？・人理を救う？・ちよつと何言ってるかわかりませんね。取り敢えず死にたくないで逃げます。

世界の危機はカルデアに任せればいいやろ。」

EX

「え、待って？・俺逃げた筈だよ？・何でカルデアにいんの？」

Restは小ネタです。

このルートの主人公は基本クソ野郎です。

(中には違うものもありますが。)

人によつてはぶん殴りたくなります。

それが嫌な方はブラウザバック推奨です。

※ルートによつて主人公の精神に差異があります。

※タイトル変更しました。(現在投稿してるルートの話がタイトルから逸れているため。)

目次

本編

チキンでクズな男	1
開き直ると碌なことがない	12
やられたらやり返す。倍g (r y) & amp ;設定	22
問題は以外な所から出てくる	33
人はそう簡単にならない	46
越えてはいけない一線	56
このクズヤロー!!	66
置き土産	75
EX スペースニート、地獄に招待される。	82
EX 2 現実はいつだって残酷	87
EX 3 夢は夢のままが良い	96
EX 4 知ってるだけでは対処出来ないこともある	104
EX 5 手綱はしっかり握っとくべき	120
EX 6 上げて落とす	130
EX 7 厄事は忘れた頃にやってくる	140
EX 8 忍耐力は大事	152
EX 9 口は災いの元	161
EX 10 一難去ってまた一難	172
EX 11 数の暴力	183
EX 12 力こそ全て	193
EX 13 コミュ力は意外と重要	202
EX 14 狂気の沙汰	212
EX 15 絶望の権化	223

EX16	禁じ手	231
EX17	終焉の一撃	240
EX18	悔恨	247
Revenge1	The first end	254
Revenge2	限界を迎えた心	263
Rest1	配慮は結構大事	273
Rest2	白にも黒にもなる。	287
Rest3	悪魔の誘惑	298
Rest4	平穏な暮らし	309
Rest5	俺は悪くねえ！	323
Rest6	怠惰	336
IF	面倒事からは逃げられない。	347
IF2	散桜	356
IF3	柄にもないことはするもんじゃない	368
IF4	変にプライドある奴っているよね	376
IF5	人は変わる。良くも悪くも。	389

本編

チキンでクズな男

神様転生。それは一度は考えたであろう夢。神様からチートを貰って異世界に転生して、思い思いの人生を謳歌する。スローライフを送る、世界を救う、世界を滅ぼすもその人次第。

これは面倒事が嫌な男の物語。

俺の名前は深川悟。唐突だが、型月世界に転生していた。何を言ってるかわからないと思うが事実だ。一応神様から特典貰ったけど型月世界で暴れでもしたら抑止力が来てDEAD END待ったなし。確かに転生したいとは思ったよ？でも、この世界は駄目だろ。何が悲しくてこんな死亡フラグが跋扈する世界で人生送らなければならいなんだよ。

これはもう一般人として生きるしか道はない。幸いこの世界での俺の住処は新宿で、冬木ではないから聖杯戦争に巻き込まれることはない。

あんな一般人を犠牲にするようなクソみたいな戦争をやるなんて本当神経疑うわ。

聖杯戦争は正直関わらなければなんの問題もない。

だが、もしこの世界がfgoの时空でもあるとしたらはっきり言って笑えない。俺はソシヤゲではやってた時は面白かったし、沖田さんを当てるためにガンガン石をつぎ込んだりしましたよ？ネロとかも可

愛いなーと思いつつやってたよ？でもそれはゲームだから楽しんでたんであつてそれが現実となるのはつきり言つて笑えない。

だつて人理焼却だよ？あれはアカン。このまま行けば死ぬ。かといつて、なまじ生き残りでもすればカルデアの奴らと世界を救う難易度ルナティックな旅に出ることになる。それはマジで勘弁。流石に人類悪とは戦いたくない。てか勝てる気がしない。獅子王様もそうだけど。

これは主人公である藤丸立香とマシユに任せるしかない。俺は知らん。いくら力を持つてもメンタルがあれだから肝心なところでヘタれる自信しかない。何より仮に人理焼却を防いでも、今度は亜種特異点が存在するという地獄。

本当クソだわこの世界。確かに人類は滅びた方がいいのはわからんでもないが、俺は死にたくない。もつと可愛い女の子とイチャコラしたいし、美味しいものも食べたい。でも、命には変えられない、

というかどうすればこの窮地を脱することが出来るんだ？

神様本当に何考えてんだよ。カービイとかポケモンとかの世界の方が良かったわ。

ていうかあれだよな？人理焼却の黒幕の目的つてこの星をいじくり回すことだよな？人類に永遠をもたらすとかなんとか。つまりこの星にいる限りどうあがいても絶望。

ん？待てよ…

この星にいる限りってことは地球から脱出すればよくね？

そうだよ！その手があるやん！地球から脱出すればあんなクソみたいな面倒なことに関わらずにすむじゃん！

聖杯戦争も、人理焼却も、特異点の連続ラッシュも全部この星で起きた出来事なんだから！

そうと決まれば宇宙船の確保だ。取り敢えず今の内に取りかかる。宇宙船を買うなんてバカな真似はしない。

第一、現代のテクノロジーじゃあ宇宙旅行なんて無理ゲーの極み。そこで俺がもらった特典が役に立つ。何を隠そう俺の特典は《昇華》。使用用途は架空の物を現実の物へとランクアップさせることだ。

例えば仮面ライダーの玩具があるとする。

DXジクウドライバーに昇華を使えば本物のジクウドライバーになる。

昇華の発動条件は対象に直接触れること。対象の知識を予め有していること。この2つだ。

デメリットはもちろんある。それは一度使えば、次の発動まで3時間のインターバルが必要となる。

因みに昇華前の物体と昇華後の物体を比較して、共通点が多ければ多いほどオリジナルに近くなる。

例えば立方体の箱があったとする。それを深緑色に塗りたくって昇華を使えばオリジナルに近いパンドラボックスもどきが完成する。

このパンドラボックスもどきを偽・パンドラボックスとする。

この偽・パンドラボックスは本物のパンドラボックスと比べて世界を滅ぼすほどの力はないにしても、エネルギー源としては十分に有効活用できる。

ん？早い話、エボルドライバーとエボルトリガーに昇華を使ってブラックホールかませば、全てが終わるじゃん！って思うだろ？

無理だよそれは。だってエボルドライバーを本物にしても変身出来ないからね。あれはハザードレベル5以上ないと変身不可能。

本物には出来ても仮面ライダーには変身出来ない。なぜなら変身条件を満たしてないから。

だから、ほとんどの仮面ライダーには変身出来ない。

アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、カブト、電王、キバ、デイクイド、ダブル、ウイザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルドシリーズのライダーは変身不可。それ以外ならワンチャンある。

ん？アマゾンズ？あれは論外。俺は歩く天然痘にはなりたくないし。

まあ俺は何があらうと仮面ライダーに変身するなんてやらない。

だって仮面ライダーに変身しようものなら高確率で世界の破壊者が来ると思う。あとヤンホモデイエンド。

あの2人はアカン。デイエンドはご存知の通りひとのもん勝手にパクるし、デイケイドは世界を破壊するから本当に駄目。まあジオウも駄目やけど。

あんな化物にどう対抗しろと？時間の巻き戻し、望む未来の実現とかどこのなろう主人公だよ。無理無理、あんなに勝てるのなんてデイケイド位だろ。

話を戻すけど取り敢えず宇宙船の確保だ。

取り敢えず理想としてはドラゴンボールに出てくる大型宇宙船を目指す。具体的にはパラガスが乗ってたあの宇宙船にする。決して一人用ポッドではない。中身までは知らん。

取り敢えず、作る。ハリボテでもいいから形になるものを作る。でも、俺一人じゃ無理だから建築会社に依頼する。

幸い金はたんまりあるからなんとかなる。俺のスローライフはこれからだ！

しばらくして……………

フハハハハハハハハハハハ！ついに完成したぞ！宇宙船が！スイッチ押せば全てが終わる。沖田さんやネロとかとイチャコラ出来ないのは悲しいけどそれを差し引いてもお釣りが来るレベルで地球脱出は大変魅力的だ。

宇宙船に侵入出来ないように特殊なバリアも作成したし、何があっても壊れないようにハイパームテキライドウオッチも組み込んだ。因みに組み込んだのは2つ目の特典であるDXハイパームテキライドウオッチ1つ。

それに昇華をかけたものを組み込んだ

一応自衛用にハイパームテキライドウオッチは量産しな。

ハイパームテキガシャットだとバグスターウィルスが必要になるから無理。だからライドウオッチになった。ウオッチを使うだけなら別にいいやろ。体に組み込む訳ではないからアナザー化も起きないしね。変身もしてないからセーフ。デイケイドが来ることもない。多分。まあ生きるためだからしょうがない。それにもう昇華の術はかけたから大丈夫。

え？宇宙船に組み込んだもの以外ハイパームテキライドウオッチはどこから出したのか？それは魔力で作ったんだよ。何か念じたら出来たわ

因みにこの世界では仮面ライダーは虚構の存在。

今は2015年だから仮面ライダーゴーストが日曜日の朝に放送されてる。

話がそれたけれどこれで地球脱出の準備は整った。あとは2017年になったら地球に帰るだけ。もし黒幕を倒して人理を救えば地球にはちゃんと人類がおるはず。

駄目やったらまた宇宙旅行すればええし。

それに食料と水は5年分あるし、何とかなる。地球を脱出して、俺は高みの見物決めますわ。

それでは……スイッチオン！

無事に地球脱出に成功した。本当に良かった。これで俺はスペースノートとなり自由気ままに生活出来る。取り敢えず目標は火星に

行く。幸いこの世界にテラフォーマーはいないことは確認したからね。だってテラフォーマーズはマンガとしてあつたから。ん？燃料はどうしたのかって？燃料は偽・パンドラボックスだよ。どこから出したか？材料集めてそれっぽいものを作ったものを改良した後、昇華を使ったんだよ。

本物のパンドラボックスは世界を滅ぼせるけどこれはせいぜいユーラシア大陸2つ分吹っ飛ばせるレベル。

まあ、パンドラボックスもどきだから本物には及ばないがその分自由もある。例えば本物は世界を破滅に導くものだけどパンドラボックスもどきはエネルギーとしても使える。

見た目は宇宙船だけど動力源は偽・パンドラボックスという訳のわからんことになってるのはスルーで。

そう、このなんちゃって宇宙船を使い、この星で起きる厄介事から逃げるのが俺の悲願なのだよ。

フフフ、どうせ失敗してなんやかんやで巻き込まれるんだろ？などどその気になっていたお前らの姿はお笑いだったぜ。

残念だったな！俺は厄介事なんて知らん！人類が滅ぶなら滅べ！世界の危機なんてどうでもいい！俺は逃げる！

フハハハハハハハハハハハ！愚民共、せいぜい苦難にまみれた地獄の日々を送るといい。俺はそれを肴にワインを飲んでるから。あばよ。カルデア、ビースト、そしてサーヴァントの諸君。俺はこれから呑気に宇宙旅行を満喫するぜ！

いやー、宇宙旅行は楽しかったですねー。火星で色々あつたけど
方ぶりの地球だ。

さーて、その地球はどうなってるかな？

……………なんか見る限り当たり一面まっさらなんだけど。

え？待って俺がスペースツアーしてるときに地球もしかして氷河
期来た？人類がどうのこうのとかじゃなくて只の自然現象？それと
もゲーティアがカルデアを滅ぼしたルート？

えー、マジかよ。せつかく帰ったのにこれとかマジふざけんなよ。
これ引き返した方がいいのか？いや、でももし氷河期なら人類は死滅

してるはずだから地球で好き勝手出来るチャンスでもあるわけ
……

まあ仮に氷河期の地球に降り立つにしろ、ゲーティアにしろもハイパームテキライドウォッチを使えば大丈夫だろ。

これはすでに昇華をかけてるからね。有事に備えて俺はハイパームテキライドウォッチを量産した。あと、宇宙船を脱出する前にクウガのアーケルとオーズドライバーとメダル一式、フォーゼドライバー、は購入しておいた。

因みにムテキに関して厳密に言えばハイパームテキライドウォッチもどきだけでも。

オリジナルではないため流石に制限時間は無制限とはいかない。俺が検証した結果、ハイパームテキライドウォッチもどきは一個につき1時間が限度。劣化品とは言え無敵だからどうとでもなる。

だって無敵だし。この無敵には無敵貫通も聞かないと思う。だって無敵だよ？あの神がライフを削りに削って作った最高傑作がベースだぞ？

たかだかサーヴァント風情のスキルなぞ一部を除いてムテキの前ではゴミみたいなもんだよ。仮にそのスキルが発動してもスペックでゴリ押しする。

まあ、実際使うならライドウォッチを体内に入れてアナザー化するのが現実だろうけど。

この世界は仮面ライダー自体が虚構だからいくらアナザー化しても問題ないね。

そうと決まればいざ地球へ！

俺はこの時知らなかった。氷河期なんかよりもっとヤバいことがこの地球で起こっていたことに。

開き直ると碌なことがない

俺の前には小さくなったダヴィンチちゃんと藤丸立香そしてマシユ・キリエライトがいる。更に俺を包囲するようにサーヴァントが待機している。ついでにホームズも

しかも待機してるのは我らがオカンのエミヤと呪腕のハサン。
ホント、どうしてこうなった？

宇宙船から降りた俺は異常が起きた地球を探索していた。いくら搜索しても人が全く見当たらない。人はおろな建物も何もない。その事実如若不安を覚えながらも歩みを進めていく。

俺はしばらくして一つの結論にたどり着いた。

これ、何かしらの原因で人類が減んだルートじゃね？
ゲーティアか他の原因かはわからんけども。

そうと決まればこんな星はさっさと立ち去るに限る。厄介事はごめんだ。その考えに纏まった俺は宇宙船へと戻るために踵を返した。

そして数十分歩くと宇宙船が見えてきた。また、宇宙旅行が出来る
と思い、浮かれてると遠目に見たことがある

人が見えた。赤い外套を纏い、褐色肌の白髪頭の男、
そして、なんかメカニツクな装備をしたシールドアの女の子と服装
こそ違うものの、何よりも見覚えがある顔。藤丸立香。

それを見て俺は安堵した。なんだ、カルデアか。

カルデア？

え？ちよつと待って？何でカルデアがここにいるんだよ！しかも俺の宇宙船の近くで！アイツらゲーティアを倒して仕事が終わったはずやろ！まさか、ここは亜種特異点？だとしたら一刻も早くにげなければ！

だが、宇宙船の前にスタンバっていると迂闊には近づけない。てかこれ遠目とはいえサーヴァントからしたらもうバレてんじゃない？

こんなことなら宇宙船から離れるんじゃないか。

自分の迂闊さに後悔しながらも俺はハイパームテキライドウオツチもどきを起動させようとした瞬間、俺は意識がブラックアウトした。

ていうのが冒頭に至るまでの経緯です。コイツら初対面の人間を問答無用で気絶させるとか鬼畜過ぎない？確かにハイパームテキライドウォッチもどきでぶっ飛ばそうとはしたよ。でも未遂じゃん。まだセーフの筈じゃん。

ないわー。コイツらホントクソだわー

多分俺が気絶したのはアサシンあたりの仕業だろう。

てか何気にホームズいるってヤバくね？これ下手したら俺のことバレルんじゃない……

「やあ、初めましてミスター深川。君のことは知っているよ。超大型宇宙船を動かしてこの星から遥か彼方に消えたとされている人物として。当時の世間では大騒ぎさ。何せ無機物とはいえ架空の存在が現実に現れたんだ。」

「君は2015年に突然何かに取りつかれたかのようにドラゴンボールの宇宙船の模型を作り始めた。それだけならただ金があるコアなドラゴンボールのファンで済む。

君はそこから食料や水も買い始めた。そこまでするかという疑問はあるがまだ理解はできる。

だが、君はあろうことかあの宇宙船を起動させた。

これは通常ならあり得ないことだ。何せあの宇宙船は現代のテクノロジーでは到底実現不可能なものだ。

ハリボテを作るとはまた訳が違う。何故君はあの宇宙船を起動出来たか？燃料はどうしたのか？多くの問題はあがるが、私は1つの結論にたどり着いた。

何かしらの力を以て動けるようにしたのではないか？

だが、そんな力など古今東西探してもどこにもない。

聖杯などあれば話は別だろうが、君はそんなものを持っていないかった。何故なら持っていたら聖杯反応がでるはずだからね。聖杯という願望器なしにそれを成し遂げる力など並大抵のものではない。

それこそ魔法かそれに準ずる力がない限り。あるいはそれらをも凌駕する力か。その結果、私は1つの結論にたどり着いた。最初私は自分の出した結論に疑問を覚えたよ。

そんなことはあり得ない。いや、あつていい筈がない。それを事実と認めてしまえば君は私が知る限り1番の脅威となり得る。」

「君は架空の物を現実にする力を持っている。違うかね？」

「……………」

絶句。正に今のカルデアのマスターやサーヴァントはその状態。理解が及ばない。架空の物を現実にする？

なんだそのデタラメな能力は。

啞然とする彼らをよそにホームズは言葉を続ける。

「そう、この力を使えば世界を思いのままに出来る。

滅ぼすも支配するも自由自在。正に神にも等しい力という訳だ。早い話、ドラゴンボールを現実にして願いを叶えるなんてことも不可能ではない。」

「……………」

「君にとってこの世界は武器の宝庫だった筈だ。何せ今の世の中アニメのグッズなど山のようにある。それらを使えば君は世界を思いのままに出来る。なのに君はそれをしなかった。どころかこの星から去った。それは何故か？考えられる理由としてはいくつかある。まず1つ目は良心の呵責に苛まれ、自分の力を恐れた結果、この星から去った。2つ目は面倒だったから。世界を支配するなど容易なことではないからだ。支配は滅亡と違い、その後の面倒も見なければならぬからだ。」

そして3つ目、既にそうしようとしてる輩がいたから。そしてソイツはとてつもなく強大な力を持っており、自分の能力を以てしても敗北するかもしれないと思う程に危険だと思っただのではないか？ではその人物とは誰か？」

「そう、その人物こそゲーティアだ。」

「君は2015年に突然この星を去り、2017年に帰還した。何故帰還したのか、単なる宇宙旅行と言えばそれまでだが、私はそう考えていない。なぎなら余りにもタイミングが良すぎるからだ。2016年それは人理焼却が行われた年。そして我らがカルデアは見事ゲーティアを倒して人理を救うことに成功した。その後今回の事態が起きたものの、君はまるで見計らったかのように2017年に帰還した。思うに君は何かしらの理由で人理焼却が行われることを知っていたのではないか？そう考えたんだがどうか？」

一通り自身の考察を述べ終えた彼は深川に問う。

「まあ、知ってましたね……だから俺はトンスラしたんですから。」
（うわー、流石名探偵。ほとんどバレてるよ。つーかそれよりも空気がヤバいです。何でかって？サーヴァントがマジギレ寸前なんすよ。ほら、ダヴィンチちゃんなんか青筋ピクピクさせてるよ。あのオカんでさえゴミをみるような目でみてるもん。）

するとここまで黙っていたマッシュが初めて口を開く

「…………じゃあ何ですか？貴方は……人理焼却されるのを……初めから知ってたんですか？それほどの力がありながら知ってて……知ってて貴方は逃げたんですか?!」

「うん、そうだよ。」

「貴方は……貴方は……貴方は最低です!!貴方が力を貸してくれていたら所長も……ドクターも……死なずに済んだかもしれないですよ!!全部知ってて、その上で逃げを選ぶなんて貴方は……貴方は卑怯者です!」

「今さらかもしれない話をしてもしようがないでしょ。それに逃げて何が悪いの？あんな化物相手に立ち向かうなんて無理無理。皆が皆君のマスターみたいに立ち向かえる人間じゃないのよ。まあ、俺は人類が滅びようがどうなるうが自分が大丈夫ならそれでいいタイプの人間だからね。まあキレるのもわかるっちゃわかるけども。」

「それほどの力を持っていたらどうして人類を救おうとしなかったんですか!!貴方に良心や罪悪感はないんですか!?!」

「申し訳ないなーとは少しだけ思ったよ？まあだからと言って何をするわけでもなかったけれども。それに俺を責めるのはわからなくも

ないけどさ、一番悪いのはあの事件を仕組んだアイツであって俺じゃないよね？ある意味俺も被害者なんだから。そこはちゃんと理解してもらわないと。」

「清々しいまでのクズだな貴様は。碌な死に方せんぞ。」

反省するどころか開き直る深川にゴミをみるような目で言うのはエミヤ、

「だから、逃げるんだよ。まあ、現にこうして君らに捕まってるわけだけど。早く帰りたいんだけどいいk」

ドゴッ

「痛ってーな。何すんだよお前。」

「お前は……………お前は……………っ！」

そう言い目に涙を浮かべながら藤丸は深川を何度も殴りつける。何度も何度も。いつの間にか藤丸の手は血がついていた。

深川の顔は腫れ、歯は折れるなど悲惨な状態になっている。

「お前が……………お前が……………いてくれればロマンも死なずに済んだのかもしれないのに……………返せよ……………ロマンを返せよ!!」

「……………」

「マスター、その辺にしておけ。気持ちはわかるがこの男にはまだ聞きたいことが山ほどある。まずは医務室に運んで治療するぞ」

このまま続ければ深川が死ぬので流石に止めに入るエミヤ。彼は

治療が終わった後、拷問にかけてでも情報を吐かせるつもりだった。

エミヤの言葉を契機に一旦この場は解散となったが、空気は重かった。

その原因は当然今医務室に運ばれた1人の男にあった。全部知っててその上で逃げただけならまだわかる。

誰だって自分の命が大切なのはよくわかるし、これまで彼らは死にたくないと言って命を落とした人を数多くみてきた。

だが、事態を打開しうるだけの力を持っていながら何もせずに逃げを選び、あまつさえそれを悪びれることもなく平然した態度が彼らの逆鱗に触れた。

そんな中ダヴィンチが口を開く。

「私もこれまで色んな人を見てきたけどあそこまでクズなのは中々見ないよ。彼についての情報を引き出すという目的がなければ思わず手が出てただろう。取り敢えず彼が回復するまでは各々待機してほしい。今すぐにも手を出したくなるのはわかるが、あの男が今回の事態に関わっているかどうか、能力はどういう経緯で手にいれたのか。それを聞き出す必要がある。今はどうか堪えてほしい。」

ダヴィンチの言葉を受け頭が冷えたのか先ほどと比べて冷静になる藤丸。だが、その目には隠しようもないほどの憤怒があった。

彼は人理修復を終えた後でも、所長やロマンのことをずっと悔やんでいた。あの時こうしていれば、もっと違う手段を取っていたらもしかしたら助かったのかもしれないとしばしば考え込むこともよくあった。自分に力があれば。そう思ったことは一度や二度ではない。それでも前に進まなければいけないと彼自身頭では理解をしているものの、深川のことを到底許せるものではなかった。

自分が求めてやまない力を持ち、その力を以てすれば彼らが助かったかもしれない。

なのに、彼は自己保身のために全てから逃げた。

助かるはずの人も何もかもを見捨てて。

藤丸がこれまで彼の発言を聞いた時も腸が煮えくり返るような思っていた。にも関わらず当の本人は一切悪びれることもなくいけしやあしやあとしているのが何よりも気に入らなかった。

確かにアイツの言うとおりで一番悪いのはゲーティアである。アイツが人理焼却なんてことをしなければオルガマリーもロマンも死ぬようなことはなかった。アイツもある意味被害者というのもそうなのかもしれない。頭ではわかっている。だが、それでも藤丸は深川のことを許せるものではなかった。

深川に対する尋問の後一旦解散となった後彼はマイルームへと戻ってもしばらく一人で考え込んだ。

あの後医務室に運ばれ治療を終えた深川は安静のためにベッドで療養していた。

「痛ってーあの野郎殴りすぎだろホント。アイツ絶対許さんわ。あの結末を俺のせいにするなよ。大体言う相手が違うだろ。そこはゲーティアに言うことだろ。」

ないわー本当ないわー。こんなクソみたいな所いられるか。俺は

帰る。」

あの出来事がフラッシュバックした彼は藤丸に対する悪態をつきつつ、ハイパームテキライドウォッチもどきを起動させた。

《ムテキゲーマー》

やられたらやり返す。倍g (r y) & a m p ; 設定

ハイパームテキ。

それは仮面ライダーエグゼイドに出てくる最終フォーム。そのスベックはほとんど平成ライダーの最終フォームをも上回る。パンチ、キック力共に128t、常時攻撃力2倍のバフ、ショートワープと様々な機能が備わっているが、何ととっても特筆すべき点は相手のあらゆる攻撃が一切効かない無敵フォームであるということだろう。そう、あらゆる攻撃がだ。

物理はおろか、時間停止さえも通用しない。

しかも制限時間が無制限。通常、このような無敵フォームは時間制限が存在する。

配管工のおじさんがスターを取った時しかり、癒されるような可愛らしい容姿のピンク玉がキャンディーを食べた時しかり。

だが、ハイパームテキにはそのようなものが一切存在しない。最も、変身者である宝生永夢の変身妨害、パラドの抹殺をすれば、ハイパームテキにならずに終わる。

ハイパームテキの対策としては以上があげられる。これは裏を返せば、変身したら最後勝てないようなものである。

なので、仮面ライダーエグゼイドにてラスボスである檀正宗はパラドの抹殺、バグスターウィルスによるリセットでハイパームテキをなかつたことにするなど、最早ハイパームテキとまともに戦うことは放棄している。

その強さは平行世界の敵でさえ恐れる程である。

まさにぼくの考えたさいきょうのライダーである。

話を戻すが、ハイパームテキはチートもチートである。

そんなチートがクズの手には渡ればどうなるか。

オツス！オラ深川。前回藤丸にボコボコにされたから腹いせ仕返ししたいけど後が怖いからやめる。今のところは。取り敢えずカルデアから脱出するけど出口どこ？

人に聞くと見つかるから自力で探すしかない。まさかこの世界でリアル脱出ゲームをするはめになるとは思わなかったけど。

因みに今の俺はハイパームテキになってる。バグスターウイルスもなしにどうやってなったか？それはハイパームテキライドウオツチもどきを体に組み込んだらなった。初めてウオツチを体に組み込んだ時はてっきりアナザー化するかと思ったけどよく考えたらアナザライドウオツチじゃないからアナザー化はせんわ。

アナザー化を期待してた皆さんには本当に申し訳ない。

オリジナルのハイパームテキとスペックは同じよ？ただ制限時間は1時間という縛りがある。

マジのオリジナルにしたらデイケイドが来そう。

来たら帰って貰おう。アレは駄目だ。そのためなら土下座も惜しまない。

つかしばらく移動してるけどどこもしかしてカルデアの施設

じゃないのか？明らかに建物の構造が違う気がする。じゃあここどこよ？

……仕方ない。職員の1人を人質にとって案内してもらおうか地図を貰おう。言うこと聞かないなら脅せばいいしね。

そうと決まれば探しますか。

あれから探した結果、1人の職員を人質に取ることに成功した。名前をムニエルと言うらしい。なんか美味しそうな名前してんなこの人。それでちよつと壁ドン（物理）すれば余裕ですよこんなの。と思ってた時期がありました。何かアラームめっちゃ鳴ってるんだけど。

ていうかよく見れば俺が壁ドンしたら穴があいてた。

やべえ、ハイパームテキのスペック嘗めてたわ。

取り敢えず怯えるムニエルに話を聞くが、何か説明で虚数空間がどうのこうのつてようわからんこと言うから半分聞き流した。

要約すると今おるのはシャドウボーダーという乗り物におるといふ話。虚数空間とかに移動出来るとのこと。

そうこうしてる内にサーヴァントが来た。

あ、オカンに加えてマシユに藤丸もおる。……………アイツボコボコにした恨みは忘れんからな

まあ、それはともかく時間も余りないので早くトンズラしよう。だが、やられっぱなしで終わるのも癪だからせめてもの仕返しとしてこの施設をぶつ壊す。別に命とるわけじゃないし十分セーフやろ。

……………ムテキの最初の活躍の場面が施設の破壊はどうなのって？

だ、大丈夫だ。作者が、その内書くよ。乞うご期待！

取り敢えずこのシャドウボーダー？なる乗り物を破壊する。俺が何しようとしたか感じ取ったのか何か向こうめっちゃ慌てる。あのサーヴァントを慌てさせるという中々出来ない体験をしたことにより、悦に入る俺。いやー、中々にいいもんですねー。

でもね？人はさ、駄目とか禁止されてることを目の前にしたら破つて見たくなるもの。どっかの誰かも言ってたけどルールは守るためにあるのではなく、破るためにあるのかなんとか。

それでは、深川！いつきまーす！！

あ？何か後ろから攻撃されたんだけど？いや、ムテキだからダメージはないけれども。

振り返るとそこには呪腕のハサンがいた。

取り敢えず締める。軽くボコった後、先ほどよりも強く壁ドン（物理）をする。

凄まじい轟音と共にシャドウボーダーに大きな穴があいた。

いやー、本当スツキリしたわ。何かこう破壊するって楽しいね。ブラッド族の気持ちもちよつとわかるわ。

お、向こう何かめっちゃプルプルしてる。相棒の右京さんがキレる時に見せるアレみたいな感じかな？

あ、ムニエルとか泣きそうになってる。この車壊しただけで泣かれるのは心外なんですけれども。別に壊れたら修理すればよくね？ダヴィンチちゃんもおるから何とかなるやろ。それに泣くなら女の子が良かったわ。だって女の子の泣き顔って何かそそのものがあるよね。

苛めたくなるっていうか。

でも、時間もアレだし早めに退散しよう。

さらばだ！諸君！

ここから設定

深川悟

この作品の主人公。神様に特典を貰って転生するも、死亡フラグが跋扈する型月時空に生を受ける。彼自身 fate は ZERO と stay night と fgo しか知らない。

fgo 第一部のあらましを知ってる彼は生きるためにこんなところいられるかと特典をフルに使って宇宙船を作った後、地球からトンズラする。

2017年に地球に帰るも余りの地球の変貌ぶりに戸惑い再びトンズラを企むも宇宙船の前でスタンバってたカルデアに捕まる。

カルデアに捕まった時に尋問されたので自身のことをほとんどゲロる。

その時に自分の能力と知識がバレて、俺は悪くないけど何か? という嘗めた態度と正論ムーブで藤丸をプツツンさせる。

プツツンした藤丸にボコボコにされた後はハイパームテキライドもどきを使つて脱出した。

一言で言えばクズ。自己保身のためなら平気で人を見捨てるし、面倒事は基本関わらないスタンス。おまけにチキンで小物。

藤丸にボコボコされた後、仕返しとしてシャドウボーダーを洒落に
ならないレベルの大穴を開けて逃走。

特典 《昇華》

架空のものを現実にするというぶつ壊れチート。

昇華の発動条件は作中でも述べた通り、対象に直接触れることと対象の知識を予め有していること。

だが、ドラゴンボールなどの世界に対して働きかけることができるようなレベルのものは無理。

同じ対象に重ね掛けすることは不可能。

また、この能力は昇華前の物体と昇華後の物体を比較して、共通点が多ければ多い程オリジナルに近くなる。

共通点が1個 一応本物

共通点が2個 まあまあ本物

共通点が3個 マジの本物

例1 ハイパームテキライドウォッチもどきの場合
共通点 見た目が似ている

例2 偽パンドラボックスの場合
共通点 パネルの色が一緒
共通点 立方体であること

例3 DXジクウドライバーの場合

共通点1 見た目が同じ
共通点2 音声さんが同じ
共通点3 構成している中身が同じ(ウオツチの対応音声。隠し音声も含む)

ハイパームテキ(時間制限あり。)

スペックは基本オリジナルのハイパームテキと同じ。
ただ、完全な本物ではないため、時間制限がある。

制限時間は1時間。

尚、共通点が多い多ければ制限時間は伸びる模様

エボルブラックホールフォーム(時間制限あり)

スペックはオリジナルのエボルブラックホールフォームと同じハイパームテキと同様完全なオリジナルではないため制限時間が存在する。

ワープやブラックホール攻撃(ブラックホールの持続に制限時間あり)、宇宙での活動が可能。

また、オリジナルならブースト機能は50倍まで適用出来るが、これはあくまで擬きなのでブースト機能は10倍までが可能

制限時間は30分

尚、共通点が多ければ上記と同じく制限時間は伸びる

特典2 DXエグゼイドムテキゲーマーライドウオツチ1つ

藤丸立香

f g oの本来の主人公。この作品では男で、通称ぐだ男。

人理修復を見事に達成するも、大切な人の犠牲により心を痛める。その後、自分にもつと力があれば変わったのかもしれないというifの未来に想いを馳せる。

その後今回の人理漂白により、自分は上手くやれるのか？また大切な人が犠牲になるような事態が起きるのではいかという不安に囚われる中、オリ主の背景と俺は悪くねえ！ブームに色々不安定だった彼はプツツンする。

結果、彼はオリ主をボコボコにしてしまう。

尚、それが原因でとんでもないことになる。

マシユ・キリエライト

藤丸立香のパートナー。第一部では目覚ましい成長を遂げるもラスボスのゲーティアの人理砲を食らって蒸発する。その後フォウ君の手により生き返る。

オリ主の俺は悪くねえ！態度に軽くプツツンした。

レオナルド・ダヴィンチ

f g o勢はご存知の万能の天才。第一部のロマン消滅に特に心を痛めてたメンバーの1人。その後エセ神父に貫手をかまされて消滅するも、不測の事態に備えて主人公を補助出来るようバックアップを取ってあった。主にシャドウボーダーのナビゲートと制御AIこなしている。因みにロリ化している。

オリ主に対してはなまじ悪くないのはわかってるが、ロマンのこと

に加えて、あそこまで開き直りの態度を取られたことにより嫌悪感を持っている。

エミヤ

料理スキルが何故か高いアーチャーのサーヴァント。

その正体は抑止力のパシリとなって色々殺しまくった正義の味方のなれの果て。

オリ主に対しての心情はあー、わかるわーとクズじゃね？コイツ。が半分半分

呪腕のハサン

オリ主を気絶させた張本人。ある意味今回の藤丸オリ主ボコボコ事件の元凶。

シャドウボーダーをぶっ壊そうとしたオリ主を止めようと挑むも、ハイパームテキ（時間制限あり）になったオリ主にボコられる。

シャーロックホームズ

ダヴィンチと共にシャドウボーダーを作り上げた。

ずば抜けた観察眼と推理力を持っており、まさに頭脳チート。

だが、本来の性格は真面目系クズに近い。なので、オリ主に対してはあまり悪感情を抱いてない。

能力がわかった時はコイツやばくね？とはなったものの、その後のオリ主の開き直る態度を見て、内心あ、コイツ私と同じクズだ。と思っただのは内緒。

宇宙船

オリ主が特典やらをフルに使って完成させたもので、動力源は偽パンドラボックスのエネルギーという意味のわからないなんちゃって宇宙船になっている。

スペックはDXハイパームテキライドウォッチに昇華をかけたものを組み込んでいるため、外敵のあらゆる攻撃を一切受け付けない。念のため、オリ主が魔力で山ほど量産した。

また、侵入出来ないように特殊なバリアを張っている。これはオリ主以外侵入出来ないようになっている。

オリ主の魔力に反応してバリアが展開する仕組みになっている。

劣化聖杯

魔力で作ったシャンパングラスに魔力で作った金色のペンキを突っ込んで、それをしばらく放置して乾かしたものに昇華をかけて出来たもの。

文字通りの聖杯。叶えられる願いは食料を増やすこと、燃料の補充など。

主人公が他に所持してるライドウォッチ（登場するかは未定）

クロノスライドウォッチ擬き

制限時間は30分

基本的なスペックはオリジナルと同じだが、ポーズで止められる時間に限りがある。1分が限界。回数制限はなし。

アギトシャイニングフォームライドウォッチ擬き

制限時間は30分

基本的なスペックはオリジナルと同じ

尚、無限に進化はするが進化までのスパンが長くなる。

例

アギト本編では1話で土のエルを両断するまで進化したが、これの擬きの場合だと10話かかる。

主人公がカルデアに力を貸すルートかクリプタールートかトンスラルートかを活動報告にてリクエストします。

カルデアの場合はA

クリプターの場合はB

トンスラの場合はCと表記してください。

問題は以外な所から出てくる

テンテテテンテテテテテテテン♪

テレレレレレレレレレレレーン♪

はあくテレビもねえ。ラジオもねえ。魔力もそれほど残ってねえ。女もねえ。食いもんねえ。同じ場所ずっと続いている

地球来て 降りたって いきなり顔面殴られる

ネットもねえ。味方もねえ。 だけど空は澄んでいる

俺らこんな星嫌だく 俺らこんな星嫌だく

火星へ帰るだく 火星に帰ったら

食料貯めて 宇宙旅行をするだく

……………ふざけたけどホント何も無い。どうも、人理を見捨ててトンスラした深川です。

シャドウボーダーなる所から脱出して数時間。ハイパームテキは時間切れにより解除、昇華のインターバルである3時間も過ぎたころ、俺はようやく、宇宙船がある場所にたどり着いた。さて、もう2度とこんな星は訪れないだろうから最終チェックしなきゃいけないからハッチを開けて中に入って確認しよう。

異常は……………ないな。うん。食料は後3年分あるから大丈夫か。

……………ん？

俺がこの星にもう来ないのは確定として食料が後3年分しかないのは結構マズイのでは？

……………ヤバい。どうしよう。

ヤバイよ、ヤバイよ。これ俺はてつきりゲートティア倒したら人類が滅ぶことなく生存するから食料なんていくらでも補給出来ると考えたけれども今はヤバイ。だって、探索した時辺り一面まっさらで何も無いとかホントあり得ないからね。何か起こったとしか考えられない。

というかまさか俺の初めてのホントの危機が敵からの攻撃により命が危ないとかではなく食料問題とは。

ヤバイでしょう。一刻も早くこんな星からはおさらばしたいし厄介事には首を突っ込みたくないけれど、このまま行けばいずれ食料は切れる。

え？宇宙旅行した時に他に食べそうな生命体いたらソイツを食べばワンチャンある？ないよそんなもん。何より宇宙の生物を口に入れるとか正気の沙汰ではない

俺は映画のエイリアンに登場する人物みたいになりたくない。だって、自分の体に卵を産み付けられるとかどんな悪夢だよ。しかもソイツ体を食べ破るんだぞ。

無理、無理。食い物は地球産じゃないと安心出来ない。

仮に見た目が食べえそうでも中にどんな病原菌やら寄生虫やらを飼ってるかわからんものを口にするとかそれは流石にね……………

つか、これからどうするよ？やっぱリカルデアんとこ戻って食料を対価に力を貸す？……………ないな。

だって、脱出する際に彼らの本拠地に大穴開けてトンズラしたんだよ？しかもアサシンとはいえサーヴァントをボコるといっておまけ付き

今さらどの面下げて帰れと？無理無理。後アイツちよつとムカつくし。誠心誠意謝つたら一応考えてやらんこともないけど。

とはいえそれ以外で他に方法はないかな？まだ他に打開策があればええんやけど。ああー、聖杯でもあればなー。

俺に食料くれーって祈るのに。……………そうだ！

金の杯、またはシャンパングラスをなんやかんやで手に入れる

←
シャンパングラスや金の杯の場合それに昇華をかけて聖杯もどきを量産する

←
食料問題を解決!!

ヤバい俺天才だわ!!

流石すぎるんです。流石すぎるんですよこの俺は。この伝説のスーパーとてつもなくすごい天才イケメン一般人でかつこの世のものとは思えないほど凄まじい力を持った俺に不可能なことなどそれほどないのだ!!

よし。この方針で行こう。

え？世界に働きかけるレベルの奴は無理なんじゃないのかって？
あれはね厳密に言う这世界を改変するような奴は無理ってこと。
例えば貞操観念を逆転してくれとか、英霊という存在そのものをなくしてくれとか。

だから、食料くれーとか俺の肉体をサイヤ人にしてくれなどの個人に対する奴とかならオーケー

なんかわかりづらくてすみません。
話を戻すけどシャンパングラスの場合だと金色の塗料があった方がいいんだよね。

ペンキとかでもいいけどスプレー式がベスト
だってスプレーのほうが早く終わるし。

後シャンパングラスを50個は欲しいわ。勿論聖杯と見た目が似てる奴。

それに今回みたいに不測の事態が起きるといけないから出来れば音声認識機能付きの電子ノートが欲しいな。

タブレット状のあれ。後専用のタッチペン。

何をするのか？仮面ライダージオウの白ウオズと同じことするんだよ。

あれがあればもう怖いものは殆どない。気を付けるとしたらパラルルの自分だな。あのノートに自分の望む未来を書いてそれに誘導する。

く

そうすれば俺はこんな悩まなくてすむからね。

ん？それも世界に働きかけてるって？時空関連物はなんかセーフらしい。

だけど、未来を見通して改変する、過去の改竄、過去、または未来へ飛ぶなどは無理。

なんか未来誘導位ならセーフって特典の際の質問の時に神様が答えてくれた。念のために質問しといて良かったわー

初めからそれ使えば良かったらろって？そんなことしたらゲーティアだけでなく抑止とか時計塔の連中から目をつけられて碌な目にあわないから却下。

今は多分地球で異変が起きてるだろうから出来ることだ。

魔力で作らないのかって？出来たらとつくにやっってるわ！

取り敢えずノートを手にいれたらまずウオズる。

え？ウオズるって何かって？あれだよマジ卍と同じ感じだから特に意味はないよ。

まあ仕返しするとしたらあのノートを使おう。

そこまで酷いことは書かないよ？

書くとしても藤丸立香、30%の確率で女性鯖との魔力供給時に不能になるとかそんなぐらいだよ。

命を取らないなんて俺優しいわー

つー訳でカルデアは取り敢えず放置。多分また地球で異変起きてからそれを解決してもらわないと。

まあ、あんなんやけどゲーティアを何とか倒せたんだし

今回もなんやかんやで大丈夫だろ。

面倒事は他人に任せて俺はのんびりポテチでも食ってるわ。

ハッチを閉じて取り敢えず外に誰もいないか確認していると後ろから声をかけられた。

「貴方が深川悟ね？少し付き合ってもらえますか？」

俺は後ろを振り返るとそこにいたのは露出の高い服を着こなし、頭に狐耳を生やした桃色の髪の女だった。そして、何より見覚えがある顔だった。

コイツ玉藻の前やん。

え？待って？なんで玉藻の前がおるん？ヤバイヤバイ！

つーか何でこの宇宙船に侵入出来るんだよ！バリアはどうした!?

………：そーいや、節電のために電源切ってたわ。

間抜けすぎるだろ俺！

ヤバい、ヤバいぞ！この宇宙船のこともそうだがもしコイツ敵ならアカンやろ！晴明さん呼ばなきや詰む！つかコイツが敵とかもう無理ゲーじゃね？

前世では玉藻の前は良妻賢母としてなんかいい感じに描かれてたし何回か夜のおともにしたけれども実際は絶対対面したくない。それに俺は妖怪とか信用してないんだよね。なんか裏でヤバいことやつてそうつていうか。

まあ、それは人間も同じだけどさ。

妖怪の場合はやることのエグさが半端ないと思う。おまけに人間に取ってはホントにアカンことが妖怪ではデフォルトとかありそうやし怖い。

それに人間が他の生物をおぎなりに扱ってるようにコイツら妖怪も人間を相応の扱いでええやろと思ってると思うんだよ。

全員とは言わないよ？ただ俺はちよつと妖怪自体が受け付けられないだけであつて。

あ、インフェルノさんは別ね。あの人一応人間だから。それにおっぱいデカいし人妻だしもろタイプだわ。

話が逸れたけど俺は帰る！接触してきた理由はわからんけども絶対碌なことじゃないのはわかる。

取り敢えず無難にスルーしておこう。

「すみません。俺知らない人についていって駄目だと今は亡き両親に教えられてるのでお断りします。」

「そう。私としては断らずについて来てくれた方が色々面倒が省け

て楽なんですけどね。どうしてもというなら力づくd「時間ならあるので話を聞きましょう。」

え？逃げるんじゃないかったのかって？もちろん逃げるよ？でもコイツあの玉藻の前だよ？仮に玉藻の前ではないにしても分身なのは確定だろうから絶対コイツヤバイ。それに逃げるにもハイパームテキライドウオツチもどきを起動させて、体に組み込むまで数秒かかる。

その数秒の間に呪術かわからんけど殺されて終わりよ。

ここは大人しく従うのが得策だ。死にたくないし

移動中……

「……………」

「……………」

ヤバイ無言とかちよつと耐えられない。なんか喋ろうよ。

「あのー、すみません。これどこに向かってるんですか？」

「そのうちわかります。」

「はあ……」

会話がこれで終わりとかふざげんなよ。もつと話を弾ませろよ！

……………なんか大きい部屋に着いたな。てか今時こんな大きい円卓テーブルあったんだな。

あ、なんか映った。

《初めまして。君が深川悟だな？取り敢えずこちらに素直に来てくれたことに感謝しよう。》

「……なんで俺の名前知ってるの？とかツッコみたいけどお前誰よ？」

《私の名前はキリシユタリア。この組織のメンバーのリーダーをつとめさせてもらってる。》

それと君は知らないかもしれないが君がああの超大型宇宙船を動かしたことで世界的なニュースにもなったんだ。君を知ったのはそれがきっかけだ。》

え？それってやばくね？多くの人にバレてるってことやろ？

……まあよくよく考えたら確かにそうだな。

《君についてはあらかじめ調べさせてもらった。その能力のこともね。》

「……………え？マジ？カルデア以外にもバレるとかうわー」

てか俺にプライバシーはないんすかね。

《あれだけの能力を使っておいてバレないとも思ったのか？》

ですよー。

《さて、ここからが本題だが単刀直入に言おう。君は私らに敵対するか協力かの確認だ。》

「……………敵対も何も俺君らが何しようとしてるのか知らんのやけ

ど。」

《では、少し長くなるが聞いてくれ。実は……………》

おけ、把握。大体わかったわ。

え？説明の部分？んなもんキンクリだよキンクリ。

因みにキンクリってのはキングクリムゾンな。

つーかさ……………おもいつきり面倒事じゃねえか！

誰がこんなん関わるか！そううのは当事者だけでやってくれよ。
俺を巻き込むなや。

俺は直ぐさま断りの回答をしようと口を開きかけたが、その前に脳
に一つの考えがよぎった。

あれ？でもこれカルデアが勝利したら地球が元に戻るんだろうか
らそしたら人類俺のことを血眼になって探すよね？

一応宇宙に旅立つけれども見つかる可能性はゼロではない。

……………これコイツらに味方した方がいいんじゃない？

コイツら世界を滅ぼしたんだろ？てことはそれだけの力があるつ
てことだから逆らうのは得策ではないな。

……………いや、俺は面倒事には関与しないと決めたんだ

高みの見物がせいぜいいいところだ。

でも俺の特典が何らかの理由で封印及び無効化または奪取される
のも考えとかないと。というかこれもしかしてターニングポイント
じゃね？

なんか答え次第で今後の身の振り方が決まる気がするのは気のせ
いだと思いたい。

《直ぐには答えが出ないのはこちらもわかってる。だから明日までに答えを出してくれ。君の答えが我々に取って利になることを願う。》

それ遠回しに協力しろって言ってるよね？

《コヤンスカヤ。彼を客室に案内してやれ。わかっていると思うがこちらがいいと言うまで彼に手を出すなよ。》

おい。今聞き捨てならん言葉が聞こえたんだけど。

戸惑いをよそに俺は客室へと案内された。

彼が客室に案内された後、クリプターのメンバーらであるキシユタリア、ベリル、デイビッド、ペペロンチーノは深川のことについて会議をしていた。

《で？感触はどうなの？キシユタリアちゃん。》

《悪くはない。彼の人柄までは正確にはわからないが、あの能力があれば人理焼却に巻き込まれても途中まではそれなりに上手く生き残れるだろう。まあゲーティアに目をつけられるのは間違いないが。だが、彼は立ち向かうどころか逃げた。別にそれは悪いことではない。普通は自分の命は惜しいものだからな。》

《それに話してみても改めてわかったが彼は小物だ。力は強くて精神

は普通の人間だ。

そういう輩は大抵は自己保身を第一に考えるかより強い力を持つものにすり寄る。彼の場合だとおそらく前者だろうな。それに彼は気付いてるか意図してるかはわからないが、何故か彼はコヤンスカヤを警戒してる。彼は私と話してる時も時々隣に視線を向けていたからな。》

《彼は確か一般人よね？なんでキリシユタリアちゃんではなくコヤンスカヤを警戒するの？》

《彼の家系を調べたところ何の変哲もないただのありふれた一般家庭だ。両親こそ亡くしているものの、

どこにでもいる一人暮らしの青年だ。警戒した理由としては本能的にコヤンスカヤを危険と判断したのかもな。》

《つーか何で奴があんな大層な能力を持っているんだ？可笑しくねえか？》

《それは残念ながら私にも確かなことはわからないよベリル。考えられるとすれば何らかの外的要因によって得たものであるということだ。もしくは偶発的に能力に目覚めたとか。》

《何の変哲もない一般人が突然覚醒して能力に目覚めるとかどこの創作物の設定だよ。そんなあり得るか？》

《考えられなくもないが俺は外的要因の線が濃厚だと思ってる。》

《ほう。詳しく意見を述べてくれ。デイビッド。》

《あんな馬鹿げた力を突然使えるようになるのはあり得ない。それこそ神にでも力を与えられない限りな。異星の神によつて俺らは生き返った。普通完全な蘇生などを実行しようものなら生半可な力じゃ無理だ。だがその神の力によつて俺らはこうして生き返った。アイツが神によつて力を得たと考える方が突然覚醒するなどという話よりも有り得ると思うが。》

《なるほど。言われてみればそうね。取り敢えずわかったことは以上のようだし私はこれから異間帯のことがあるからこれで失礼するわ。》

ペペロンチーノの言葉を契機に会議は終了した。

ヤバいな。どうする？彼らに協力した方がいいのか？俺としては使い潰される未来が見えるから避けたいんだけどな。でも、対価として食料やらを要求してもええけどそしたらカルデアと事を構えることになるんよね……

負けるつもりはないけど、第一部のソロモン戦みたいに英霊大集結みたいな展開がまたあるとしたらかなりヤバい。

ここは無難にトンズラするのが最善かな……
でもトンズラするとしても食料がね………

カルデアにカチコミしに行くか？食料寄越せ！って。なくてもエミヤが向こうにいるから投影してくれば何とかなるしね。

つーか食料がもしそんなになかったらシャンパングラスと金のペ

ンキを投影してもらおう。

言うこと聞かなかつたら藤丸の命を盾にすればいいし。

うん。そうしよう。カチコミするといつてもカルデアを本気で潰すわけじゃないからセーフの筈だ。

ちよつとマスターを脅してエミヤの能力を活用させてもらうだけだから。

あれ？でも投影能力ってエミヤの意思一つで消せるんだよね？

……………早くも頓挫したよこの計画。

どうしよう一応超絶劣化聖杯なら宇宙船にあるマグカップで出来るけど劣化品だからなあ……………

……………魔力でシャンパングラス作るか。

で、それで取り敢えず金色のペンキも魔力で作ろう。

取り敢えずクリプターの奴らの提案は断って俺は宇宙船に帰る。その後目的を達成したらトンスラする。

……………悪いね。俺はチキンだからトンスラさせてもらうわ。

人はそう簡単には変わらない

「じゃあ答え出すわ。俺はアンタらに敵対しない。だけど協力もしない。中立と考えてくれ。」

《ほう、何故だ？》

「正直アンタらが何しようがどうでもいい。カルデアを倒したいなら倒せばいいし、異聞帯の王とかになりたいならなれば？それより俺は早く帰りたい。」

だから俺はアンタらの邪魔するつもりはないよ。

ただ、そっちがこっちに危害を加えたまたはその意志があると判断した場合は別だけど。」

《……なるほど、調査通りの人物だな。自己保身を第一に考えそれ以外のことは二の次か。》

………わかってるなら最初から聞くなや。

無事に地球を脱出する準備が整った。いやーホントに時間かかったわ。シャンパングラスと金のペンキを魔力で作って量産したはいものの、そこから地味な作業をずっとやらなければいけなかったからね。

え？クリプターの奴らはどうしたか？

エボルブラックホールライドウオッチを体に組み込んで

エボルブラックホールフォーム擬きになった後、断りの回答して、トンスラしたよ。いつの間になったのか？

回答する前にトイレ行くと行って便座に座った後ブラックホールライドウオッチを体に組み込んだよ。

まあ、いざアイツらの前に出ても思ったよりリアクションされない。何それ？みたいな質問はあつたよ？

で、俺は自衛装備と答えといた。

ん？そんな質問なかったらろって？

だってその質問あつてもなくても別によくな？

まあ、その後コヤンスカヤ？とかいう奴が邪魔してきたからブラックホールフィニッシュかましといた。

多分死んだんじゃない？逆にあれで生きてたらすごいわ。

流石ブラックホールフォーム。ブラックホール生成や、ワープ出来るとかホント便利だわ。

因みにブラックホールには3種類のパターンが存在する

1つ目は空中で前方宙返りをして飛び蹴りを叩き込んだ後、吹っ飛ばした先に発生させたブラックホールに放り込んで爆発させる。

2つ目はブラックホールを発生させない高威力のパンチ

3つ目は上空にブラックホールを出現させ、対象を吸い込んで消滅させる。

で、ブラックホールフォームのスペックだけでもこれも初めて使った時に検証した結果

3のブラックホールフィニッシュのブラックホール持続出来るのが3分が限界なんだよね。

ん？どうやって検証したか？宇宙旅行した時にそこらへんの適当な星にブラックホールかましただけよ？

おかげで魔力がたんまり入ったわ。

で、一度使ったら15分のインターバルが必要になる。

しかもブースト機能はオリジナルなら50倍まで戦闘能力を上昇できるけど、今俺がなってるのばせいぜい10倍が限度。

しかも制限時間は30分

だからブラックホールフィニッシュ（上空にブラックホールを出現させる奴）は2回しか使えない。

劣化もいいところだろ？でもそれでも基本スペックは同じだからね。ワープも出来るし、宇宙での活動も可能。しかもそこらへんの敵なら余裕でボコれる。

で、宇宙船に戻った俺は食料問題を解決するために作業に取りかかった。

その後俺は金のペンキにシャンパングラスを突っ込んでペンキまみれにしたのをしばらく放置したら完全に乾くのでそれに昇華をか

ける。それをエボルの姿で。

これの工程を何回したと思う？20回だぜ？

途中で俺は元の姿に戻ったけれどもずっとそこから作業だよ。

しかも昇華は一度使うと3時間のインターバルが必要だから全部やろうと思っただらめっちゃ時間かかる。

取り敢えず最後までやったのは1つだけ。

他は昇華をかける一歩手前の段階。

というかカルデアが命かけてこの世界を救おうと奮闘してるなか俺は地味に面倒な工程を繰り返して来た訳だけどさ。

途中から、俺何やってんだろう？ってなったよ。

もちろん逃げるためだよ？でもこれ地味に辛いわ。

だってとにかく時間かかるんだもん。

それが終わったらマグカップのどつてを取り除いたあとは金のペンキに突っ込んで昇華をかければ超劣化聖杯を誕生させなければならぬ。願望器は多ければ多いほどいいからね。

おかけでもう手はペンキまみれだよ。

因みに今は昇華のインターバル期間だから他にも今後必要なものとか偽・パンドラボックスのエネルギー残量を確認してる。

うん、後3年分のエネルギーしかないね。

まあ、聖杯擬きが出来ればそれも解決することだから。

今は辛抱の時。取り敢えず手を洗おう

一方その頃……………

カルデアは現在頭を悩ませていた。深川がトンスラしたというのもあるが、シャドウボーダーが深刻なダメージを負ったということだ。

破損箇所は2箇所あり、両方とも司令室内である。

深川がトンスラしたと発覚したのはシャドウボーダー

に大穴を開けられた直後、念のため、深川の所在を確認したところ、その姿はなかったため脱走したと判断した。

それよりもここまで大きく損傷しては今後の異聞帯攻略に支障が出る。時間はかかるが、修理すると取り敢えず当面の方針が決まった所で、議題は深川のことへと移る。

重い空気の中、ホームズがあることを切り出す。

「ミスター深川に協力してもらってはどうかだろう。彼の類い稀なる力を以てすればシャドウボーダーのことも何とかなるかもしれない。それに協力を得られなくてもクリプター側に走るのだけは何として

でも避けるべきだ。彼が敵に回れることがあれば絶望的だ。」

「しかし、アイツは聞くところによるとおおよそただの人間が持つとは考えづらい力を持つているのだろうか？そんな奴に説得など効くのかね？その力を以てすれば我々など簡単に殺されるのではないか？」

「その点はおそらく心配ないだろう。ミスタームジーク

もしそうなら彼が最初カルデアに捕まった時点で最初からその力で我々を殲滅出来た筈だ。

でなければ我々は今ここで呑気に会議など出来なかっただろう。

それに彼は良くも悪くも自分本位だ。彼は力を持つとうも根は臆病で、自己保身に余念がない。

だから彼は我らと共に人理修復するのを恐れたのだろう。彼は自分が安全を確保するためならば手段は選ばないし、それこそ余程のことではない限り居場所など問わないだろうね。だから地球脱出という思いきった方法を選択できわけだが。

要は彼がこちら側にいた方が安心出来ると思うようにすればいい。まあ、それにはミスター藤丸の謝罪が不可欠だが。

だが、彼の類いまれなる力は今回の事態が解決した後、確実に時計塔の連中に目をつけられる。よくて封印指定か抹殺、最悪の場合実験材料となるだろう。

だから今回の事態が解決するまでは彼の力を借りて無事に解決したら後は彼のご自慢の宇宙船でどこへなりとも行ってもらえばいい。仮に力を貸してくれずとも彼が逃げを選択するならそのまま逃がしてやればいい。

一番最悪なのは先程も言ったが、彼がクリプターと手を組む場合

だ。」

「そうだね。確かにそれがベストだ。藤丸君もそれでいいかい？」

ホームズの考えに肯定を示すのはダヴィンチ。彼女は彼に対して嫌悪感はあるものの、事態の解決のためなら彼を受け入れるだけの柔軟さはあった。

「……わかりました。」

藤丸からすれば先ほどキレて殴りまくった男に協力してもらわなければならなかったため、微妙な表情をしている。

「思うところはあつたろうが、彼は今我々に取って必要な人材だ。冗談抜きでね。それに所見を述べさせてもらおうと彼は力を持つとうが精神は一般人だ。英雄のように振る舞うことも考えることも出来ない。だから彼を追い詰めるような言動は控えるようするべきだ。」

ああいう手合いは追い詰められたら何をするかわからないからね。力を持った小心者ほど厄介なものはない。

そこをよく留意してくれたまえ。では、これから彼の説得に向かう。それとミスター藤丸は少し話があるから残ってくれ。」

しばらくして二人きりになったホームズは藤丸に

ある話題を切り出す。

「率直に言うとな彼は確かに卑怯者と誇られても仕方がないが、彼はどこまでいこうが一般人だ。」

英霊のように超然としてはいない。無論君の考えることもわからなくもない。君にとつて人理修復の時の人類最後のマスターという肩書きはとつともないプレッシャーだった筈だ。今すぐにでも出来るなら逃げ出したいと考えたのも何度かあるだろう。

君は彼と違い善良な一般人だ。自分の命も含めて生きるためにやるしかなかった。

だが、君はミスター深川に手を出すという愚行を犯した。思うに君は彼に嫉妬を覚えていたのではないかね？」

「君は彼の話を聞く内にこう思ったのではないか？ 憤りを覚える中こ
うも考えた筈だ。狡い、と。」

「自分だって逃げれるものなら逃げ出したかった。でも喚いても何も始まらない。だから君はそんな自分の気持ちに蓋をして人理修復に取り組んだ。だが、君は彼の話を聞く内にその気持ちに再燃した。結果、あんなつた訳だが。無論責任は我々にもある。君に仕方ない状況とはいえ一般人が本来なら背負うべきではない重圧を背負わせときながら、その後の君の鬱屈とした負の感情を取り除いてやれなかった。それに関しては本当にすまないと思っっている。」

「……………」

「君も思うところもあるだろう。だが、自分が今何をすべきかをよく考えたまえ」

しばらくしてカルデアは深川のいる宇宙船前にたどり着いた。道中、小規模の聖杯反応が確認され、発生源を辿ると宇宙船からであるということがわかった。

改めて宇宙船の大きさを再確認すると共に彼の脅威を再認識しつ

つも説得のために宇宙船に赴いた藤丸とマシユ。

一応万が一のことも考えエミヤと呪腕のハサン、そして新しく召還した武蔵が護衛としてついている。

藤丸は前回の自分の愚行を反省し、謝るつもりでいた。

自分の八つ当たりとも言える行動のせいで負傷した彼に誠心誠意謝る。説得云々とは別に人として謝らなければならないと彼は感じていた。それで許されるかどうかは別としても。

そして、彼の宇宙船の前に到着した藤丸は彼に呼び掛ける。

あ、何かアラーム鳴ってる。近くに誰か来たねこれは。

この宇宙船は近くに誰か来るとアラームが鳴る仕組みになっている。
る。

で、モニター確認したらカルデアがおるんだけど。

えー、お前らかよ。

あー、面倒だからシカトシカト。どうせ向こうが何してもこの宇宙船は壊れないし。ハイパームテキライドウオッチを組み込んでるか
ら相手のあらゆる攻撃が効かない。つーか今忙しいし。

俺正直コイツらの相手面倒いんだよ。ん？なんか見たことある女がおるな。紺色の着物に2本の刀か。ああーハイハイ宮本武蔵ね。うどん大好きおっぱいデカイセイバーの。というか何でおるん？

……確かコイツ無敵貫通持ちだったよね？

いや、大丈夫だ。ライドウオッチとはいえガチのハイパームテキだぞ？宇宙船に組み込んでるのは。

これは魔力で作ったライドウオッチに昇華をしたのと訳が違う。何せ、同じライドウオッチだけど共通点が3つあるから昇華をかけて組み込んだからマジのハイパームテキになる。

セイバーごときの攻撃が効くわけがない。

たかだかサーヴァントの攻撃なぞ。……効かないよね？

ヤバい。不安になってきた。どうしよう。もし無敵貫通が通るよ
うなことになったらヤバい。

うん。消そう。武蔵には恨みはないけど俺の安全のためだ。俺の
保身のために死んでくれや。

俺はエボルブラックホールフォームライドウオッチ擬きを起動さ
せた後体内に組み込んだ。

《エボルブラックホール》

越えてはいけない一線

現在クリプターらは頭を抱えていた。

理由はもちろん深川のことである。

深川が妙な装備でコヤンスカヤを葬り去ったという情報にどう対処するか悩んでいた。

妙なだけならまだいい。だが、問題はコヤンスカヤの葬り方だ。彼はあることかブラックホールを発生させたのである。刀や槍、弓、銃などの武器でもなければ魔術でもましてや魔法でもない。

もしそうなら、武器を使う相手にはそれなりの対処の仕方があるし、魔術もそうなのでまだやりようがあった。

だが、宇宙の現象の一つを攻撃として用いるなど誰が想像できようか。

当初はその余りの能力の脅威さと万が一カルデアに手を貸す事態を防ぐために断りの返事をした場合には始末する予定だったが、ブラックホールを出せるとなれば慎重にならざるを得なかった。

ブラックホールを普通に出す奴などどうやって対処しろというのか。今彼らの胸中にはそんな思いでいっぱいだった。

異星の神から彼の能力について聞かされた時は何の冗談だと思っただが、あれは自分らが想像していたものより何倍いや、何十倍もヤバいものだと認識を改めざるを得なかった。

《で、どうすんだよ。アレはいくらなんでもヤバすぎるぞ。ブラックホールを自在に出せるとしたらこの世界どころか最悪、この星そのものが終わるぜ。》

《ベリル、それは既にここにいる皆が承知してることよ？それを打開する方法を見つげるためにこうして話し合ってるんじゃない。》

《取り敢えずわかることを整理すると、奴には架空のものを現実にする能力がある。そして奴が今まで使用した装備らしきものは2つ。1つは全身黄金のボディに、ドレッドヘアーが特徴のもの。2つ目がコヤンスカヤを葬り去ったあれだ。》

《黄金の方の能力は何かわかってるの？》

《残念だが、それはわかっていない。だが、黄金のボディの方も相応の能力があると見ていいだろう。取り敢えずデイヴィッドの考察を元にして方法を考える。それに、こういう事態になった以上なりふり構ってられない。わかってると思うがカルデアなどより断然脅威は上だ。優先して対処すべきは彼だ。》

《それは場合によってはカルデアと手を組むってことか？》

《その場合もあり得る。事態はもはやこの世界の出来事だけでは収まらない。この星の危機だ。ブラックホールを操るなど彼がその気になればこの星ごと消すことも容易であるということだ。無論、あれだけの能力だ。制限もあるだろうが、いずれにしろ脅威なことには変わりはない。だから今回は私が出る。》

その言葉を最後に会議は終了した。

待つこと数分後、宇宙船のハッチが開き中から出てきたのは白い
アーマーを身に纏い、腰のローブが特徴的な何者かだった。

突然現れた未知の存在に警戒心を引き上げるサーヴァントを他所
にエボルブラックホールフォーム擬きは目にも止まらぬ速さで藤丸
を人質に取った。

おっしやー、人質ゲットだぜ！

これであればコイツらを撤退させるだけだな。

え？お前誰って？俺だよ俺。マスター君に顔面ボコボコにされた
深川だよ。

え？マスターを離せ？君らが撤退してくれるなら離すよ。

え？撤退はしない？へー、ふーん。君らは俺に申し訳ないと思わないのかなあ？

俺は君らの助力こそしなかったが、事態を引つ掻き回す真似もしなかつただろう？

痛かつたなあ……………あれは。

少しでも罪悪感を感じてるならこっちの要求を飲んでくれない？
そうすればあとはトンスラするから。

……………へえ。マスター君って案外物分かりがいいんだね。

……………いいよ別に。君も色々あるんだろうし

そりや、殴られたことには腹立ったよ？コイツぶっ飛ばしてやろう
とか思ったよ？でも君今ちゃんと謝ったじゃん。

それにさ、俺この後トンスラするからわからんけども良く考えたら
君これから俺の比じゃないくらいの過酷さを体験すると思う。

そう考えると俺の悩みなんかちっぽけなもんだよ。

な訳ねーだろバーカ！くたばりやがれ！

彼の言葉と共に藤丸にこの地球には存在しない毒を流し込む。

毒耐性を持つ藤丸でも流石にこれには効いたようにで

苦しみの余り地面に倒れ付し、もがき始める。

その様子をみた宮本武蔵が飛びかかるも

カウンターの要領でブラックホールフィニッシュをかます。

その一撃をどうにか回避した武蔵は首めがけて刀を横風ぎにする。しかしエボルブラックホールフォーム擬きのワープによりそれは失敗に終わった。

彼は武蔵めがけてもう一度ブラックホールフィニッシュを繰り出す。

因みにブラックホールフィニッシュには3種類のパターンが存在する

1つ目は空中で前方宙返りをして飛び蹴りを叩き込んだ後、吹っ飛ばした先に発生させたブラックホールに放り込んで爆発させる。

2つ目はブラックホールを発生させない高威力のパンチ

3つ目は上空にブラックホールを出現させ、対象を吸い込んで消滅させる。

コヤンスカヤにかましたのは1つ目である。

最初にカウンターで出したのは2つ目、
そして今武蔵に繰り出そうとしているのは3つ目である。

武蔵の上空に巨大なブラックホールが出現し、あらゆる物を吸い込み始める。

突然のブラックホールに驚愕しつつも、吸い込まれまいと2つの刀を地面に突き刺すことで堪えるが、その隙を見逃す深川ではない。

彼は武蔵に引導を渡すべくブラックホールフィニッシュを繰り出そうとする。

だが、そうはさせまいとエミヤが弓で援護する。

その攻撃をワープで回避したエボルブラックホールフォーム擬きはエミヤに接近し、彼にも毒を流し込む。

そして、数瞬の間、ふらついた彼にエネルギーを十全に貯めた蹴りをお見舞いする

(イメージ的にはエボルフェーズ1がログに繰り出したエボルテックフィニッシュみたいなもの)

結果、消滅した。

この間およそ1分である。

彼は武蔵に確実に引導を渡すため、速攻で決着をつけるつもりであり、彼女はいまだ、ブラックホールの吸いこみから逃れるため踏ん張っている。そこで彼は毒を流し込むことで弱らせた後、アッパーカットを喰らわせる。

それを喰らった武蔵は上空へと体を飛ばされた後ブラックホールの中へと吸い込まれていった。

私は目の前の現状に理解が追い付かなかった。

宇宙船から出て来た白のアーマーを装備した謎の人物が深川さん
とわかったものの、彼は先輩をいつの間にか人質に取った。

その後先輩が先日の非礼を詫びて彼もしょうがないと言ったその
時から嫌な予感はしてた。

彼は自分のされたことを謝ったからと言って快く許すようなタイ
プの人間ではないことは薄々だが感じ取っていた。どちらかと言え
ば根にもつタイプだ。

その直後だった。先輩が苦しみながら倒れ付したのは。

私は直ぐ様先輩に駆け寄って容態を確認する。

その苦しみかたは尋常ではなく、首回りを見ると無数の紫の筋が
はつきりと浮かんでいた。恐らく毒かと思われる。

仮に毒だとしても毒耐性がある筈の先輩に何故毒が効いているの
かがわからなかった。先輩には静謐さんの毒も第4特異点の時の毒
素も効かなかった。

私は彼は架空の物を現実にする能力を持つてるとホームズさんから聞いたことを思い出した私は絶望的な事実に行き着いた。架空の物を現実にする。

つまり先輩が今かかっている毒はこの世界には存在しない毒という事。そしてそれは解毒剤も存在しないということ。

仮にこの毒を治せるとしたらこの毒を盛った彼しかいない。聖杯などあれば別だろうが生憎そんなものはない。

このままでは先輩が死んでしまう。

その考えに行き着いた私は目が涙が溢れそうになるもグツと堪える。

だが、そんな思いとは裏腹に《嫌だ。先輩ともっと一緒にいたい。一緒に色んな景色を見て、一緒にありふれた日常を過ごしたい。》という思いが溢れる。

私が悲しみと絶望に苛まられているとそれは武蔵さんとの戦闘の時に起こりました。

彼はあろうことか上空にブラックホールを出現させた。

私たちははこれまで数多くの強敵を相手にしてきました。獅子王やティアマト、ゲートティアなどの並々ならぬ強さを持ってました。これらをなんとか倒すことには成功しましたが、それは数多の英霊の協力があってこそです。

今彼と相対しているのは武蔵さんとエミヤさん。

そして、その二人もやられてしまった。

戦況は絶望的。ハサンさんが先輩を連れて離脱を試みるも相手はブラックホールを出し、サーヴァント2人を瞬殺し、おまけにワープもするような敵。

逃亡を許すとは考えにくい。

毒は時間が経てば経つほどまずいので先輩の容態をこれ以上悪化させないためにも一度シャドウボーダーに帰還するのは必須と言える。

そんな私は焦燥感ばかりが募っていた。

やっべえ。まるでサーヴァントがゴミのようだわ。

ブラックホールフォーム強すぎ。

ん？マスターに毒を盛ったのは何でって？

だってサーヴァント相手にするならマスターから先に手をかけるのは当たり前やろ？

因みにあの毒は桐生戦兎がエボルトから盛られた毒を劣化させたもの。

戦兎が救急車で苦しんでたアレだよ。

解毒する方法？ないけど？聖杯使えば治るんじゃない？

まあ、エボルトが難波会長にくらわせたもんに比べればまだ温情やろ。あれはもはや消滅だからね。

詳しいことは仮面ライダービルド 難波会長 最期でググってくれ。

話を戻すけどまあ武蔵もボコったしトンスラしよう。ホームズはどうしよう。アイツ味方全体に無敵貫通付与だからなー

消しとくか？でもブラックホールフィニッシュ(3つ目)は後一回しか出せないし。

制限時間もあるし。

うーん。もういつそのことこの星ごと消す？

いやいや、それはダメだわ。やったら千里眼トリオがめっちゃ高い確率で現れる。

まあ、こんな所に長居は無用だ。いくらエボルブラックホールフォーム擬きでも千里眼トリオはまずい。

まあ、そんな俺の目の前には毒状態の藤丸とマシユとハサンがいる。これで俺の前に迂闊に現れるようなことはせんやろ。

まあ取り敢えずトンスラしよう。

その時、俺を1つの影が襲った。

このクズヤロー!!

……何でお前がいるん？

お前確かクリプターとかいう奴らのリーダーだろ？異聞帯とやらないの？

………へえ。俺を消すことの方が優先ね。

……俺は別にお前と戦う気はないんだけど？

俺はさお前らが勝とうがカルデアが勝とうが正直どうでもいいんだわ。

自分の身が安全ならね。揉め事は他所でやってよ。それに俺を巻き込むなって話でさ

つー訳で俺は帰る。せつかくここまで来てもらって悪いけど自分の異聞帯に帰んな。

………俺を逃がさない？バカ。逃げるに決まってるだろ。

………？？何で俺のワープが発動出来ないんだよ。おい。ふざけんな。

……あ？俺のブラックホールフォームの機能を封印した？は？何言ってるの？

ブラックホールフォームだぞ？たかが人間ごときに何でこんなこと出来るんだよ。

まあええわ。ならブラックホールでお前に引導を渡すだけだし。

……………何で発動しない。

おい、おい、ふざけんな！何でだ！何で発動しない！

まだ制限時間はあるはずだ！

あ？封印したのはブラックホールフォームの機能？てことは何か？ブラックホールもワープも使えないただの高スペックアーマーに成り下がったということか？

……………ふざけんな。ふざけんなよ！このクズヤロー！

何でお前ごときがブラックホールフォームを封印できんだよ！

神霊ならともかくお前はサーヴァントですらないただの人間だろうが！

あ？神霊を叩きのめした私なら容易いだと？

でもな、いくら特殊能力を封印した所でこのアーマーでお前を殴り殺すぐらい容易いことだ。

だから、さっさと死ね！

エミヤさんと武蔵さんを瞬殺した彼の前に現れたのはクリプター

のリーダーのキリシユタリアさんでした。

思わぬ人物の登場に私たちは驚愕すると同時に警戒しました。

今、彼までもが敵に回ったら絶対に勝てない。

ですが、彼の言葉から出て来たのはそんな私たちの思いを裏切る言葉でした。

「そう警戒しないでもいい。今この時に限っては君らの味方だ。」

急な展開に理解が追いつけない私は思わず彼にどういうことか訪ねました。

「実は君らが彼と接触した後に私達が彼と接触したんだ。コヤンスカヤを利用してね。我々に協力するか否かの返答の後、彼は断りの返事をした後コヤンスカヤをブラックホールで葬り去ったのさ。今日の前にいる姿でね。ブラックホールを出す奴を野放しにはしてはいけないという理由で私が赴いたということだ。

どうやらカルデアのマスターは毒に犯されてるようだね。

私が治してあげよう。」

キリシユタリアさんが手をかざすと先輩に浮かんでいた紫の筋がみるみると消えていきました。

先輩の容態が回復したのを見て思わず破顔する私を見てキリシユタリアさんが声をかけた。

「嬉しいのはわかるがそれは後にしてくれ。カルデアのマスターにはサーヴァントを召還してもらおう。魔力なら心配ない。私が君の状態を万全にすると共に少しばかり分けておいた。2人までなら召還出来るはずだ。」

「ありがとう、キリシユタリア。お前のおかげで助かったよ。」

「礼なら後にしてくれ。それより彼の対処だ。彼の能力は余りにも危険すぎる。彼を排除するために私は君を助けたのだから。私が時間を稼ぐ。その間に君は召還してくれ。」

「……どうしてもアイツを倒さないと駄目なのか？」

「当たり前だ。彼は危険過ぎる。それは君とてわかっているはずだ。先程のことを忘れたか？」

「……でもアイツは今回の事態とは無関係の人間だ。だからせめて彼をこの場から逃がしてやりたい。」

「……それは彼を殴った負い目から来るものか？」

確かに彼は今回の異変とは無関係だ。それは私が保証する。だが、彼はそれを差し引いても危険過ぎる。彼の性格が善良ならまだ一考の余地はあったかもしれない。だが、彼の性格は善良とは真逆だ。そんな奴がブラックホールを操る力を持つてるんだ。彼を野放しにしたら何をするかわかったものじゃない。」

ブラックホールフォームの大半の機能を封印された深川は直接殴り殺すためキリシユタリアに飛びかかった。

ここでキリシユタリアが何をしたのか解説しよう。
彼の能力は限定的な事象の改変

自分の死の運命や世界レベルの事象、上位世界の神の恩恵の帳消し及び無効又は奪取、破壊は出来ないものの、
事象を書き換えることが出来る。

今回はエボルブラックホールフォームの機能を書き換えたのだ。
ブラックホールフォームはブラックホールは出せず、毒やワープも使えないただのアーマーという事実の上書きしたのだ。

そして、先程藤丸が回復したのもこれが理由だ。

正確には彼は毒を治したのではなく、彼の体内にあるこの星には存在しない毒を藤丸にとつて無害なものに上書きしたのだ。

無論、デメリットも存在する。それは大量に魔力を消費するため、使えて1日に3回が限度だ。

そして完全なものではないこと。存在自体を虚構にするのは不可能である

例 ブラックホールフォーム自体をなかったことにするのは不可能

なので、使えて残り1回である。

いくら、ブラックホールフォーム擬きと言えども特殊能力の要を封印されてる状態で神霊を叩き伏せたキリシユタリア相手では分が悪

い。
キリシユタリアはエボルブラックホールフォーム擬きの連撃をを
軽くいなした後アーマーに魔力を纏った蹴りをくらわせる。

数瞬の間ふらついた彼に魔力の光線を浴びせる。

いくらブラックホールフォーム擬きとはいえ、ここまで弱体化され
た状態では苦戦は必須。

今の状況を整理すると改変能力を使ってブラックホールフォーム
擬きの主要な機能を使用不能にしたキリシユタリアとチートの権化
であるエボルブラックホールフォームをたかが人間に無効化されて
ことにより動揺と恐怖を感じている深川。

戦いにおいてどちらが劣勢であるかは火を見るより明らかだった。
案の定、深川は苦戦していた。

彼はその胸の内に憤怒の感情を抱えながらマシユへと向かった。

マシユは驚愕の表情を浮かべるながら抵抗するも虚しく盾ごと
吹っ飛ばされた。

マシユは攻撃が当たる瞬間に後ろへ跳躍したことにより幾分か衝
撃が和らいでいた。

キリシユタリアはブラックホールフォーム擬きの背後から魔力の
光線を放つ。(ドラゴンボールの気功波みたいなもの)

吹っ飛ばされたマシユの盾をかつぱらうとそれを盾に光線を防ぐ。
光線が止んだ後、キリシユタリアに目掛けて盾を手裏剣の要領で投
げつける。

屈むことでギリシユタリアは盾の攻撃を回避したが彼が深川に目をやると彼はマシユを人質に取っていた。

その有り様を見たギリシユタリアは2人もろとも消し飛ばさんとその両手に膨大な魔力をチャージし始める。

それを見た藤丸はギリシユタリアにまったをかける。

これを好機と見た深川はマシユを人質にしながら饒舌に語り出す。彼女の命をいつでも断てるように首に手を添えながら何かを流し込む。

「確かにギリシユタリア、あんたは強い。まさかブラックホールフォームを完封するなんて思ってもなかった。

だが、この戦いに俺はまだ負けてない。お前一人なら俺は勝ち目の薄い戦いに身を投じることになる。だが、お前は俺を消すためにカルデアと手を組んだ。

それがお前のミスだ。カルデアのマスターであるソイツにとってコイツはかけがえのない大切な存在だ。

一度はゲーティアによってその身体が蒸発して死亡した。どうか二度目の生を受けたが俺にかかればその命を絶つことなど赤子の手を捻るようなもんだ。

藤丸立香。お前は耐えられるかな？愛する人を2度も喪う悲しみと絶望に。そうでなくともお前はドクターと所長を喪ってるんだ。もう目の前で大切な人が死ぬのはお前に取っても辛いんじゃないか？」

ゆつくりと、このままいけばこれから彼が味わうことに

なるであろう出来事を具体的に説明する。

その仮面の下に下衆な笑みが浮かべながら。

「俺だつてこんなことしたくない。でもお前らが邪魔するなら俺も手段を選ばない。なに、この場を見逃してくれるだけでいいんだ。考えてみる。」

お前の本当の敵は誰だ？今の地球をこんな風にしたのは誰だ？お前が、一般人が背負うべきではない重圧を再び背負うようなことになった元凶は誰だ？お前の隣にいるその金髪野郎だろ。」

この場を切り抜けるために彼はカルデアの本来の目的を指摘することでの窮地を脱しようと試みる。

「……………」

「確かに俺の力は脅威かもしれない。でも今お前がすべきことはこの地球を、人類を救うことのはずだ。この星に生きてた人々の明日を、笑顔を取り戻す。そのために元凶たるキリシユタリアを倒す。」

それが今お前が為すべきことじゃないのか？

もしお前がその刃を俺ではなくキリシユタリアに向けるのならマシユは解放するしお前からカルデアに喜んで協力しよう。」

その言葉を最後に彼は語り終えた。

「先……輩、私のことは……いいで……カハッ」

「試験管ベビー風情が口を挟むんじゃないよ。今俺はコイツと話してんだ。」

その仮面の下に侮蔑の表情を浮かべながら彼女の言葉を遮るかの
ように片手で首を軽く締める深川

「お前っ……！」

それを見て藤丸は彼に対してこれまでにないほどの怒りを露にし
た。それは彼のことを殴った時以上に。

「俺の言うことが信用出来ないのも無理はない。

憤るのもわかる。俺は一度お前に毒を流し込んだからね。

でも、自分が今本当にやらなければいけないことは何かそれをよく
考えてくれ。期限は3日だ。それまでに返事をくれ。じゃないと彼
女の命はないよ。

まあ余りにも返答が遅ければ腕が足ぐらい折るけど。

もしかしたらそのままヤっちゃうかもね。パツと見スタイルはい
みみたいだし

じゃあ俺は宇宙船におるから。」

そうやって彼はマシユを抱えて宇宙船へと戻って行った。

置き土産

いやー、何とか宇宙船に乗り込めたわ。

これ以後はトングラするだけだな。

でもその前に目の前にいるこの人間擬きどうしようかな……

殺るのは簡単だけどそしたらアイツ本気で俺のこと殺しに来るだろうしな……

面倒いけど適当に流すか。

準備が終わればそこらへんにポイすればええし。

「……貴方は一体何がしたいんですか？」

「逃げたいだけだよ？この星で起きる厄介事から。この星はホントに厄介事がゴキブリのように湧いてくるからさ。聖杯戦争然り、人理焼却然り、今回の事態然り。俺はさそんな事に巻き込まれたくないのよ。やるなら勝手にどうぞ。但し俺を巻き込まないでねって話で。」

「それだけの力があってもですか？」

「うん。だって世の中に不測の事態は付き物だろ？先程のキラシユタリアの能力で俺のブラックホールフォームが弱体化されるなんて思いもしなかったし。俺はどこまで行こうがチキンなんだわ。だから君とこうして話すのも自分に取って絶対的に有利な状況だから話すのよ。」

その証拠に君、身体を動かすこと全く出来ないでしょ？」

「……………」

「まあ、それも当然だけどね。君には人質に取った時にこの星には存在しない毒を流し込んだから。神経毒の類いだけど。いくらデミ鯖とは言っても身体が動かさせな状態なんて怖くないし。

当然解毒剤もないよ？まあ、口は動かせるようにしといたからそれで勘弁ね。」

「取り敢えず大人しくしててね。じゃないと君は酷い目に遭うよ？二重の意味で。女性が捕虜になるということはどういう意味か君ならわかるよね？」

「……………先輩の返答は待たないんですか？」

「え？捕虜の下りはスルー？……………待たないよ？アイツの答えなんてどうでもいいし。俺はそんな興味ないもん。だから君が大人しくしてれば俺がこの星を脱出する前に外に放置しとくから。あんまり暴れるならちよつと身体に色々教えないといけないけど。」

暗に逆らうとお前の未来はないと脅しにかかる深川。

彼はマッシュが逆らう意志を取れば即座に対応出来るようにハイパームテキライドウォッチ擬きを手に行っている。

それから一言も発することなく互いに無言の時間が続いた。

暫くしてマシユが目を覚ましたのはシャドウボーダーの治療室だった。

その様子を見た藤丸は安堵の表情を浮かべて彼女に駆け寄る。

「マシユ、大丈夫？アイツに何かされてない？」

「宇宙船内での星にはない神経毒を流されました。」

「……………え？」

そこを聞いた藤丸は思わず硬直する。大切な人が毒を盛られたのを聞いて思わず固まるのも無理はない。

「ですが、今は何ともありません。身体は至って正常です。」

「……………そうなの？」

「はい、心配をかけてすみませんでした。私のことは大丈夫です。それよりここは？」

「シャドウボーダー内の治療室だよ。マシユが宇宙船の近くで倒れたのをキリシユタリアが発見したんだ。」

「……………キリシユタリアさんは？」

「自分の異聞帯に帰ったよ。なんでも今回はこのまま手打ちにするが、次会うときは君らと雌雄を決する時だつて。」

「……そうですか。」

「失礼するよ。マシユ、具合はどうだい？」

ノックの後に治療室に入って来たのはダヴィンチとホームズ。マシユが宇宙船の付近で倒れてるとの報を最初なヤキリシユタリアから聞いたのがこの二人だった。

「何ともありません。身体は正常です。」

そこから暫しの談笑をした後、ホームズが本題を切り出す。

「さて、単刀直入に言おう。君は彼に何をされた？」

「……………この星には存在しない神経毒を盛られました。」

その言葉を聞いた彼らは絶句する。

「……………他には？」

「それだけです。後はただ彼と話しただけです。」

「ふむ、その内容は？」

「どうして逃げるのか？と質問したところ彼はチキンだから逃げるといってました。ホームズさんの言う通り彼は自己保身さえ確保でき

れば他はどうでもいいという考えでした。そう言えばその本人は？」

「……おそらく逃げたのだろう。宇宙船が跡形もなくなってることからこの星から脱出したと思われる。」

「……そう言えば聖杯反応がああ宇宙船からあったはずなのですがそれは……」

「どうしようもない。何せ彼が逃げた先は宇宙だ。広い宇宙の中から彼を手がかりなしに探すなど途方もないことだ。それによしんば居場所がわかったとしても我々には移動手段がない。おまけにあの宇宙船は現代のテクノロジーを凌駕している。今頃我々の手の届かないところにいるだろうね。」

話が一段落したのを見てダヴィンチが別の話題を切り出す。

「少し私と二人きりにして欲しい。聞きたいことがあるからね。」

ダヴィンチの意図の大方を察したホームズは藤丸を連れて治療室から退室した。

退室した二人を見計らってダヴィンチが本題に入る。

「本当に他には何もされてないのかい？君は女性だ。捕虜となった女性が辿る末路は大体想像がつくよね？」

「そのような行為は彼から受けた？」

「いいえ、彼からは毒を盛られただけです。彼を庇っているというのではなく本当にそれだけです。」

「……そうか。病み上がりで悪いけれどこの後バイタルチェックをするからね。この星には存在しない毒を盛られたということが本当な

ら検査しなければならぬ。後遺症が発生するようなことを防ぐためにもね。」

「わかりました。心配をかけて申し訳ありません。ですが、少し休んでからでよろしいでしょうか？」

「ああ、構わない。藤丸君、少し彼女を一人きりにしてあげよう。」

治療室に残されたマシユは懐から1つの手紙とライドウォッチ擬きを取り出す。

それは眠っているマシユを外に放置する際に深川が彼女の懐に入れたものだった。

—それはすぐ危険な力だけど使いこなせば君の助けになるかもね。どうしても危ない時やマスターをなんとかしてでも守りたいときに使うといい。使い方はスイッチを押した後身体に組み込むだけ。

手紙の内容と一緒に添えられていたのは左右対称に赤と青の複眼

があること以外黒の顔が特徴の漆黒のライドウォッチ擬きだった。

EX スペースニート、地獄に招待される。

ウホホホホーイ！宇宙旅行最高や！

食っては寝る。起きては寝る。たまに星を見る。

え？ニートみたい？

バーロー！この世界どこを探しても普通のニートはおれど、スペースニートなんておらんやろ。

スペースニートは普通のニートとは格が違うのだよ。

例えるなら、超サイヤ人3とラディッツ位の差があるんだよ。

ウハハハハハハ！勝ち組人生最高や！

カルデアは今頃人理修復に取り組んでるだろうな。

大変やろうなー。

何せ7つの特異点をクリアした後はゲーティアを倒さないけんとはね。

しかも第4特異点でラスボスが出てきて呪いをかけられて、監獄塔をクリアせんといけん上にそれが終われば

狂ニキ倒してき、その後は獅子王とか倒す。

で、次はティアマトを倒さないため。しかもティアマトはこの世界に生まれた者では殺せないとか。ホントなんやアレ。チート過ぎん？

よしんば倒せたとしてもゲーティアが頭おかしいレベルの威力の宝具をポンポン撃ってくる。

喰らえば蒸発とか笑えないわ。しかも無敵貫通。

ホントこのシナリオ考えた奴まじでクソだろ。

で、修復中フオウ君が覚醒しないように気を付けなければならない

とか。

ホントクソゲーだわ。ゲーティアはよしんば倒せたとしてもフオウ君は無理だろ。

あれは無理。ハイパームテキになつても多分無理

というか相手より強くなる特性とかホント頭おかしい。

対峙したら勝てる気がしない。

ゴッドマキシマムならワンチャンあるか？あれはスペック自由に設定できるし。もしくはマイティノベルX

というかアレは知らないものに対しては比較のしようがないからなんとかいけんじゃね？

………やめよう。こういうことを考えたら碌なことが起こらないのはなんとなくわかる。

まあ、カルデアが、必死こいて死に物狂いで世界を救おうと奮闘してる中、その様を肴にワインを飲むのはやっぱり最高。

いやー、ホント最高だわ。

さあ、もう眠いから寝よ寝よ。

俺はこの時知らなかった。睡魔に負けてウトウトし、寝そべってる地面に魔法陣が展開していたことなんて。

「マシユ、どんな英霊が来てくれるか楽しみだね。」

「先輩、あまりはしやぎすぎるのは良くないですよ?。」
《アハハ、立香ちゃんは今ホントにこの時になるとテンションが上がるね。》

苦笑いしながら召還室内の立香を見守るのはDr. ロマン。
彼は現在のカルデアのトップである。

そして仲睦まじく話すのは藤丸立香(女)とマシユ。彼らは第6特異点キヤメロットを攻略し、いよいよ最後の特異点メソポタミアを攻略するために英霊を召還していた。

現在、彼女に力を貸している英霊はアルトリア・ペンドラゴン(剣)、ネロ(剣)エミヤ(弓)、アタランテ、ギルガメツシユ、クーフリーン、

静謐のハサン、呪腕のハサン、メディア、玉藻の前、メドゥーサ、ブルーデিকা、ジャンヌダルク、謎のヒロインX、ヘラクレス、源頼光、清姫である。

この召還室には万が一のことに備えてアルトリア・ペンドラゴンとメドゥーサが待機している

「全くマスターには困ったものです。あれだけの英霊を召還しているのにも関わらずまだ召還するのですから」

やや呆れた様子で言うのはアルトリアペンドラゴン。彼女は特異点Fで立香に最初に召還されたサーヴァントであり、数いるサーヴァントの中でも最古参である。

「ですが、次の特異点を乗り越えることを考えればそれでしょうかないかと。」

アルトリアに相槌を打つのはメドゥーサ。彼女はオルレアンにて召還されて、立香をサポートして来た。

「サーヴァント、ランサー。また会ったな。知ってると思うが真名をカルナと言う。これからよろしく頼む。」

サークルから出て来たのは第5特異点にて共に戦ったカルナ。

「カルナ！召還に答えてくれてありがとう！」

カルナが来たことによりテンションが上がりまくる立香。それは表情を見れば一目瞭然であった。

「カルナさんがいてくれれば百人力です！先輩！やりましたね！でもまだ、サークルが回ってるので喜ぶのはおれが終わってからにしましょう。」

そして最後にサークルから出て来たのは寝巻姿の男だった。

「……………えっ？」

おそらく召還室にいたものが同じ思いをしたであろう。

何せサークルから突然寝巻姿の男が現れたのである。しかもよく見るともぞもぞ動いている。

「えっと……………どうしよう。ドクター。」

《取り敢えず起こそう。もしかしたら名のある英霊かもしれない。》

寝巻姿で召還に応じるなんてどんな英霊だよ。

というツツコミをどうにか抑えた一同は取り敢えず目の前の人？を起こす。

「あの、起きて下さい。あの……」

立香に何かあるといけないのでマシユが目の前の人？を起こす。

「んんん……何だよ……俺は……高貴なるスペース……ニートだぞ。」

目の前の男が発した寝言に心の中で《何言ってるのコイツ》と思う
一同。

やがて、眠りから覚めたのか目の前の光景に目を見開く男。

それは当時召還室にいた一同曰く、この世の終わりに直面したかのような表情だったという。

そしてようやく目を覚ました男から出たのは一つの言葉だった。

「何でお前らがおるんねん。」

EX 2 現実はいつだって残酷

ああ、神様どうして俺がこんな目に遭わなければならぬのでしよう。

俺は他人に迷惑をかけたりにしていないのにこの仕打ちは余りにも惨いじゃありませんか。

俺はこの死亡フラグが跋扈する世界が嫌だから宇宙船を使って地球脱出をしたというのに。

運命からは逃げられないという奴？ホント勘弁してくださいよ。

何で………何で………何でカルデアなんかに移したんだよ！

ふざけんなよ！マジでふざけんな！カルデアはまだいい。いや、ホントはよくないけど！

一番最悪なのはゲーティアに目をつけられる可能性が大ということだよ！

アイツに目をつけられたらはっきりって終わる。

アイツと戦うならまず、呪い耐性を十分に備えつつ、不死身を無効にする方法を備え、かつ地球を吹っ飛ばせるレベルの力で相手にしなきゃならない。

だってアイツ人理砲撃ってくるし。くらえば蒸発待ったなし。

それが、どれだけ大変かわかるか?!

この無敵貫通が存在する世界ではハイパームテキも心許ない。

対抗策としては幾つかあるけどあくまで対抗出来るだけで勝てるかはわからないんだよ！

マイティノベルX？あれは無理。だってバグスターウイルスないし。

ライドウオッチも無理。俺が元いた世界ではマイティノベルXはライドウオッチ化されてないしどういもんか構造もわからん。だから昇華は発動不可。

俺が生き残るために必要なことはロマンがゲートティア戦で自爆特攻してくれること。これが必須だ。

あの人が死んでくれないと俺はほぼほぼ終わる。

これもしかなくても一番のピンチじゃね？

いや、まだゲートティア戦まで時間はある。もし俺が後方支援なら幾ばくかの思考出来る時間はある。

俺にレイシフト適性が存在してたらそれも終わるけれども。仮にあつても絶対行かない。何せあそこは神様がめっちゃおるところ？しかもそれとは別に千里眼持ちが1人いる。

で、ティアマトも倒さなければならぬ。

ないわー、ホントないわー。

あんな難易度ルナティックな所誰が行くかつーの。

逝くなら藤丸らが逝ってどうぞ。

と、そろそろ現実逃避は終わりにしよう。

「どうか、この世界を救うために僕たちに力を貸してほしい。この通りだ。」

今俺の目の前には頭を下げてるロマンがいる。

……ホントどうしてこうなった。

「何でお前らがおるんねん」

目の前の男から発せられた言葉に疑問を覚えるカルデアの一行。

それもそのはず知らない人がいきなりこつちのことを知ってるのだから。

「え？俺宇宙船にいたよね？何でこんなところにいるん？てか俺の宇宙船は？」

「あの、取り敢えず聞きたいことが色々あるのでこちらに来てもらえませんか？」

そうして深川はマシユらに案内されるがまま管制室に連れてこられた。

「ドクター、連れて来ました。」

「ああ、ありがとう」

そのロマンを見た深川は一気に絶望した顔になり、思わず次の言葉が出た。

「ここカルデアかよ……………」

その言葉を聞いた彼らは一気に警戒心を上げる。自分らのことはまだ教えていないはずなのに何故知ってるのかもしれない。敵のスパイなのか？様々な憶測が彼らの頭の中で飛び交う中深川はあることをドクターに訪ねる。

「今つてもしかして人理修復中？」

「……………そうだよ。」

「うわ、マジやん。ホントふざげんなよ。てことはアイツがおるってことじゃん。うわー、ないわーホントクソだわー。俺の人生マジで詰んだわ。」

数瞬の間躊躇ったロマンは肯定の返答をした後、深川は魚が死んだような目をしながら分かりやすくへこむ。

その様子を見たロマンは疑問に感じていたことを深川に訪ねる。

「君は一体何者なんだ？こちらのことを知ってるみたいだけれど。」

すると深川はバツの悪そうな表情をしながら答えた。

「……………俺はさ過去にこの異変を経験したことがあるのよ」

とんでもない爆弾発言に固まる一同。そんな彼らの様子などお構い無しに発言を続ける。

「俺が元いた世界はさ……………このこと同じで7つの特異点をクリアして黒幕ぶつ飛ばして終わったのよ。で、俺はそこで異変が解決した後、力を使い果たして死んだ訳。もう一度やれって言われたら絶対お断りするね。」

死んだ俺が目を覚ましたらそこは違う地球だったよ。俺はもうあんな思いするのは嫌だから逃げたよ。宇宙船を使ってね。」

「まあ、その逃亡中にこんなことになった訳だが。ホント人生やってらんないよ。つー訳で俺を元いた世界に戻してくんない?」

「……………俄には信じがたいけれども君がこちらのことを知っている事情は把握した。」

それと本当に申し訳ないが今すぐ君を元の世界に戻すことは厳しいと思う。何せサークルからサーヴァントや概念礼装でもない普通の人間が召還されるなんてこちらとしても予想してなかったからね。もちろん君を元の世界に戻すための方法は模索してみるがいかなせん状況が状況だ。今すぐという訳にはいかない。本当に申し訳ない。」

「……………ああ……………ハイ……………」

「取り敢えず立香ちゃん。彼を空いてる部屋へと連れて行ってくれな

いか？彼も訳もわからず召還されて混乱していると思うから。」

茫然自失となっている深川を立香は空き部屋へと連れて行った。

暫くして自室へ案内された深川はこれからのことについて考え始めた。

彼は召還された時点でこの世界は自分がいた世界とは別の世界、いわゆるパラレルワールドだと考えていた。

そして今後の身の振り方について彼は酷く悩んでいた。
今の彼は寝巻き姿で、ライドウオッチ擬きを持っていない。

一応魔力で新しく作れることは出来るが、そんなことをすれば部屋につけられた監視カメラにバッチリ撮られて色々と面倒なことになるため中々実行に移せないでいた。

そして、カルデアが現在人理修復中ということは黒幕のゲートイアはまだ生きてるということ。

彼に取ってゲートイアに目をつけられるということは詰みを意味する。

仮に相對するにしろ色々と準備をしなければ話にならない。

この星から逃げるか。カルデアに力を貸すか。

彼は2つの選択で悩んでいた。

彼の性格なら逃げの一択で直ぐ様実行に移すが、今回ばかりはそうもいかなかった。

何せ、相手はゲーティア。彼の目的は人類を抹殺することが大前提。カルデアは唯一ゲーティアが観測出来ない場所にある。つまりここを脱出して逃げるということは自らの居場所を教えるようなものなので採用するのは論外であった。

よしんば逃げられたとしてもどうやって宇宙船もなしに地球脱出するのだろうか。

一応エボルブラックホールフォームライドウオッチ擬きを使用すれば宇宙の活動は可能になるが、それも30分という制限時間が存在する。

しかも、彼は人間だから食べなければ死んでしまうため、食料も確保しなければならぬ。

聖杯をカルデアからかっぱらって逃げるという方法もなくはないが、そうすれば、カルデアもゲーティアも敵に回す可能性がある。それだけは避けねばならないと考えていた。

問題は山積みである。

ならカルデアに力を貸す場合はどうか。

考えられるとすれば高確率で前線に立たされる。

無論それはレイシフト適性があればの話だがその場合自分はカルデアと共に獅子王やティアマト、ゲーティアなどの奴らと戦わなければならぬ。

そうなった場合どうなるか？へまをすれば高確率で死ぬであろうことは簡単に予想がつく。

獅子王はまだいい。ティアマトも百歩譲って良しとする。

だが、ゲーティアお前はダメだ。

彼の胸中はそのような思いがある。

舐めプがあつてあの結末なのだから本気にさせたらそれこそ終わりだということは彼にも理解出来た。

仮にレイシフト適性がなかったとしても、後方支援に回されることは確実。働かないという選択肢は最初からない。

彼が1つの結論にたどり着くのとロマンから再び管制室に来るよ
うに言われたのは同時だった。

そして冒頭に至る。

「……………条件がある。1つ、こちらに危害を加えないこと。1つ、俺の存在は極力記録には残さないこと。

1つ、この異変が解決したら俺を元の世界に戻す方法を模索すること。仮になくてもその旨を俺に報告すること。1つ、こちらが要求したものは極力用意すること。

最後に俺のプライベートな部分に関して極力干渉しないこと。これが条件だ。」

「……………わかった。その条件を飲もう。」

「じゃあ、早速だけどき用意して欲しいものがあるんだわ。」

しばらくの考慮の末、肯定の意を示したロマンに深川は早速1つの要求をする。

どんなことを要求するのか、内心身構えたロマンだが、彼の口から

出たのは意外なものだった。

「金色と赤と青のスプレーくんない？」

EX 3 夢は夢のままが良い

あれから俺はカルデアに条件付きで力を貸すことを認めさせた後、召還室にいた奴らに軽く挨拶と自己紹介を済ませたスプレーを貰ってライドウオッチ作りに励んでいた。

まず、作るのはエボルのライドウオッチとハイパームテキのライドウオッチだ。

魔力で作ればいいだろって？それじゃあこの先困るんだよね。

魔力で作ったライドウオッチは共通点が少ないからオリジナルよりどうしても数段劣るんだよ。

なら、ライドウオッチを一から作った方が昇華をかけた時共通点が多いから今制作中な訳。

因みに俺は転生する前の世界で何回かライドウオッチをばらしたことがあるから構造とかは大体把握出来てるから問題ない。

とにかく必要な部品が多いんだわ。

それらはスプレーとは別にロマンに要求したけど一番の問題は音声さんだよ。

で、この世界で音声さんと同じ声してるのは切嗣なんだよね。

だから俺はあの人の協力が必須なんだわ。

あの人を召還してアテレコをしてもらわないと。

でも、そんなピンポイントで来てくれるかね？

だって仮に来てくれたとしても協力してくれかどうか分からないし。

まあそれらのことは絶対にやらなければならぬことだから何と少しでも切嗣を召還する。

ついでにそれとは別に金色のガントレットを作ってる。

こればかりは魔力で作るしかない。

俺は鍛冶職人じゃないからガントレットの作り方まではわからない。

後、色が異なる小さな石を6つ作成する予定だ。

……………誰か来たな。

藤丸さんか。何か用？皆に紹介したいから食堂に来て欲しい？

(……………行きたくねえ……………今は一分一秒が惜しいんだけどな)

わかった。でも俺食堂の場所わからないから案内してくれない？

食堂では多くのサーヴァントがいる。主な目的は食事することだ。食堂なのだから当然といえば当然だが本来ならサーヴァントは食事する必要はない。英気を養うためにも彼らにも取って食事は必要なものであった。

「皆、紹介するね。召還サークルから寝巻き姿で現れたことで話題の深川さんだよ！」

食事が一段落したのを見計らって立香が話題を切り出す

「おい、何だその悪意ある紹介の仕方。」

うわ、サーヴァント達がこっちをみてる。つかめつちやおるな。こ
んだけいるなんてこれも藤丸の人徳の成せる業か。そこは素直に敬
服するよ。

俺やったら絶対無理やわ。

で、そのサーヴァントらはアルトリア、エミヤ、玉藻の前、ギルガ
メツシュ、カルナ、メドゥーサ等々

ふむふむ……………ん？

ギルガメツシュ？

アウト—————！ホントにこれはアウト！お前、何でおるんね
ん！

嘘だろオイ！よりもよって一番厄介な人じゃねえか！

やべえ。カルデアに協力なんてするんじゃないや。なかつた。

この人多分俺のこと全部わかってると思う。
俺の正体も力もバレてること間違いないわ。

これならマーリンの方がまだ良かったわ！あの人はクズだけどギルガメツシユ程厄介ではないからさ！

うわ、これカルデアに協力してゲートティアを倒した後、人理を修復させずに終局特異点をなんかんやで俺の支配下に置いて人理修復中を維持するという俺の最終目標がパーじゃねえか！

ああ、俺の最終目標が1日も持たずに水泡に帰ることになるうとは

……

「どうしたの？何かすごい汗だけど。目も泳いでるし。」

うるせえ！どうしたの？じゃないわ！こちらら人生の岐路に立たされた後に今回のギルガメツシユだぞ！

必死に悩んで選んだ選択肢が実は間違いでした的な感じなんだよ

！

でも、余り固まってるって怪しまれるから無難に終わらせよう。

「ア、アハハちよつと緊張してるんだよ……」

「そう？でも大丈夫！皆話せば良い人ばかりだから大丈夫だよ！」

大丈夫じゃないからこんなことになってんだらうが！

お前みたいにコミュ力化物レベルがデフォルトだと思っなよ！

こちらら下手な回答したらdeadする可能性があるから緊張し

てるんだらうが！

「えー、召還サークルから寝巻き姿で現れた男本人の深川悟です。微力ながらこの世界を救うために力添えをさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いします。」

軽く頭を下げてる間にも視線が突き刺さる。

うわー！視線の暴力ヤバイ。これ絶対値踏みしてるよ。

コイツどんな奴？的な感じでサーヴァント見てるよ。

このまま穏便に終われないかな……

まあでもロマンにカルデアに協力する条件として余計な詮索はするなど言っておいたから大丈夫だろ。

一応ここは腐っても組織なんだから情報の伝達ぐらいきちんとやってる筈。

じゃあ俺はこの辺で失礼して………？一緒にご飯を食べよう？すみません。また今度の機会ということ……

うわ、溶岩水泳部がめっちゃ見てる。何かマスターの誘いを断るんじゃないよ的なオーラがヤバイ。

とうかせつかくの二次キャラを前にこんな有り様の俺だけどきどきそりゃあさ転生する前は二次元キャラに一度は会ってみたいなどは思ってたよ？

例えばああ、ドラゴンボールの悟空と握手したりサイン欲しいとかかめはめ波を教えるとか貫いたとかバンドリの可愛い女の子とイチヤコラしたいなあとか

fateファンだったらアルトリア可愛いとかジャンヌハスハスとか言ってる人もいるだろう。かくいう俺も転生する前は可愛いな

と思つてたよ？

f a t eの女キャラも見てくれは可愛い。見た目はね。f a t eに出てくる女性なんて殆ど地雷だよ。地雷。

嘘つき絶対許さないヤンデレストーカー蛇女、歩く毒人間、養つたらエンゲル係数爆上がり間違いなしの王様、

見つめたら最後石化する蛇女2号等々、f a t eに出てくる女性は
大抵ろくでもないよ？

特にあの歩く毒人間とかさマジで何で生きてんの？って感じだよ。
誰とは言わんけど。

あれさ仮面ライダーで言うところへん彷徨してるような
もんだよ？

病原菌じゃないだけまだマシだけどさ……

マジで何で生きてんだよ。ホント頼むから死んでどうぞ。毒素振
り撒くようなことがあつたら藤丸に頼み込んで自害させよう。

それにアイツに触れるなんて毒耐性あるとは言え藤丸やべえ。

そこは素直に尊敬するわ。

俺なら触ることが出来たら1000万円あげるとか言われても絶
対触らない。

つーか関わりたくない。

話戻すけどそんなf a t eの女性が現実になればいいなーなんて
思つてる諸君、やめとけ、その先は地獄だ。夢は夢で終わらせた方が
賢明だ。

取り敢えず現実逃避はそこそこにして藤丸と食事しよう。

もしかしたら案外鯖もいい人なのかもしれない。

「深川様、お隣よろしいですか?」

帰って下さい。なんて言えれば良かったけどそんなことしたら燃やされること間違いないからね。

「ああ……ハイ。」

ホントさー何が悲しくてコイツと一緒に食事しなきゃいけないのか。

まあ、適当に相槌打ってればええか。

「失礼……します。」

おい、毒人間。何お前まで来てんだよ。お前はアウトだ。帰れ。今すぐ帰れ。お前と食事すると毒素が移るんだよ。誕生罪で死刑になつてろ。

こんな地獄の時間に付き合うつもりはないためさっさと食事を済ませる。準備も色々あるから適当に話を切り上げて部屋に戻る。

そんな俺をダヴィンチちゃんが引き留めた。なんでも、適性検査をするから来いとのこと。

「多分レイシフト適性とかマスター適性のことだろ。」

まあ、俺にはないことを願うが。

暫くして検査結果が出た。何でも両方の適性が存在してたらしい。ホントクソだわ。これで俺が前線に行くの確定じゃん

で、何か鯖を召還しろとのこと。

結構です。サーヴァントとか別にいららないです。

魔力喰うし。俺は一応魔力は宇宙旅行した際にそこらへんの星にブラックホールフィニッシュかましたからたんまりあるけれどもこの魔力は特異点でその状況に応じたライドウオッチを作成するのに使いたい。

サーヴァントを使役して使うよりハイパームテキかエボルブラックホールフォーム、クロノスとかいうチートライダーのライドウオッチ擬きを体に組み込んで戦う方がいい。

でも、一人だとやれることに限界があるのも事実。

ここは味方を増やす方向でいくか。逆らうなら自害させればいいし。

ん？召還できるのは5回だけ？……まあいいけど。

まあ来るなら全体宝具持ちが望ましいな。それか切嗣だな。

お？なんかでて来た。……………緑の黒隼かよ。

次は……麻婆豆腐。

……………その次は愛の霊薬か。で、魔導書と。

こりや駄目だな。お？何か光ってる。

「アルターエゴ、殺生院キアラ。救いを求める声を聞いて参上しました。私のような女を呼ぶだなんて、何というお方でしょう。」

なんかヤバい奴が来た。

EX4 知ってるだけでは対処出来ないこともある

俺は夢を見てるのかな？

サーヴァントを召還する筈がビーストを召還したとか冗談でも笑えない。

え？俺もしかしくてもヤバい奴呼んだんじゃね？

これバビロニア行く前に詰んだ？

今ここで殺す？ブラックホールフィニッシュくらわせとくか？
……無理だな。コイツの前では多分どんなライドウォッチ擬きを
使っても勝てない。

「ふふ、どうされましたか？マスター？」

……コイツ自分の快樂のためならどんなことでもする野郎だぞ？
でもここで敵対してゲーティアと手を組まれてもしたら絶対勝ち目
はないしな。

つーかまずこの女には勝てない。

……仕方ない。背に腹は変えられない。

まあコイツと敵対することがあればカルデアに丸投げしよう。

それとインフィニティストーン擬きも作らないとな。

そうと決まればさっさと自己紹介を済ませよう。

時間は有限なんだ。俺の昇華は一度発動したら3時間のインターバルを必要とする。今回みたいに時間が限られてる中であついつ特異点に行くことになるかわからん状況では一分一秒が惜しい。死にたくないし。

「俺がマスターの深川だ。よろしく頼むよ。キアラさん。」

「…………ふふ、本当に面白い人。」

やめてくんない？その意味深な返し。

ストレスで俺禿げそうだからさ。

部屋に戻って俺は長い時間かけてライドウォッチを作った。時刻を見ると深夜の2時だった。俺が召還を終えてマイルームに戻ったのが確か昨日の昼の11時だから20時間マイルームに籠ってたとになる。

因みに俺がライドウォッチ擬きを魔力で作るのにかかる時間は10分。

で、昇華のインターバルが3時間だから1つの作業を終了させるのに3時間10分かかる。

それを五回繰り返した。

その間に出来たライドウォッチは4つ。

そしてインフィニティストーン擬きも並行して作成してる。

今回の成果はハイパームテキライドウォッチ擬き、エボルブラックホールフォームライドウォッチ擬き、ジオウライドウォッチII擬き、ゲイツリバイブライドウォッチ擬き。

最初は一から部品を組み立てたりしたけど切嗣が来なかったから

それも無駄となった。だから結局いつも通り魔力で作った。

そしてストーンは赤が完成した。
ストーン自体は魔力で作ってそれに昇華をかけるだけ。

結構な時間もマイルームに籠ってたせいも疲労が半端ない。少し寝よう。確か明後日は特異点に行くとかロマンが言ってたしな。

そう決めた俺は完成したライドウオッチ擬きを懐にしまい、ベッドへ倒れこんだ。

翌日、俺はライドウオッチ擬き等を作成していた。

因みに起きたのは朝の6時

そこから食事も取らずインフィニティストーン擬きを作成していた。

一応部屋には誰も来ないようにロマンに言っただけ。

それと人理焼却される前までの漫画やアニメなどの娯楽ものの調査だ。

取り敢えず昇華のインターバル中にカルデア職員に聞き込みをした結果わかったのはこの世界では仮面ライダーは虚構の存在。

アベンジャーズは映画としても存在してない。

これがわかっただけでも収穫だ。

部家に戻って作業を再開するのでしょうか。

「先ほどから何をしてるのですか？マスター？」

……なんでアンタがいるん？

「私は初めからここにいましたよ？マスターが気付かないだけで。」

……いつからいた？

「マスターが何やら妙な石などを作り始めたりした時からです。」

……最初からじゃねえか。それで何の用？

「マスターと少しお話したくて部屋にお邪魔させて頂きました。」

……絶対違うだろお前。早く自室に帰れ。

「ふふ、つれない人。サーヴァントがマスターと交流を深めるのは自然なことですよ？」

ハイハイソウデスネー

「私はマスターが何を考えてるかわかりますよ？」

……はい？

「マスターの性格も。私に対する感情も」

……

「誰も信用せず、信じているのは自分のみ。召還に応じた私に対してさえ常に猜疑心を向けている。ああ、召還室では殺意もほんの少しありましたね。これまで私は多くの人間を見て来ましたがマスターがどういふタイプの人間かもわかりません。」

………わかっているなら早く帰ってくんない？結構忙しいからさ

「別にそれは悪いことではございません。誰だって自分の身が大事です。マスタ―の場合はそれが顕著というだけです。おそらくマスタ―は何かを救うことと自分の保身を天秤にかけたら迷わず後者を選ぶのでしよう。」

いや、人の話聞けよ……

「……私が貴方の召還に応えた理由、わかりますか？」

んなもん知るか。とつとと帰れって。こっちは忙しいんだ。

アンタが俺の召還に応えた理由なんてどうでもいい。

アンタが使えるか否か。それがわかればいい。

それにアンタの事情なんて俺の関知する所じゃないし。

俺に危害を加えない。

俺の指示は基本従う

裏切らない。

好き勝手やるなら俺に迷惑がかからない範囲でやってくれ

これらの指示を聞いてくれれば何も言わんよ。

人理修復が終わればこの星で何しようが好きにすればいい。但し俺に迷惑かけんなよ？

こつちから言うことは以上だ。悪いけど俺にも色々準備つてもんがあるんでね。自室に帰ってきてくれる？

あの後キアラを何とか帰らせた後、インファイニティストーン擬き等を作成するのに部屋に籠りきった。そして特異点攻略する日を迎えた。因みに完成した石は緑と紫と青、黄色、橙色。これで全てのインファイニティストーン擬きが完成した。ガントレットにも嵌めたし後はスナツプすれば発動可能。……多分

両手分作る予定だったけど時間がなかった。から片方だけになった

因みに俺の服装はカルデアマスターの服で、その黒バージョン。白は目立つから黒にしてもらった。

それで鯖の編成だが、俺はサーヴァントの数が少ないとかで立香が何人かこちらに付けてくれるらしい。

これ多分監視の意味も込めてるんだろうな……

さしずめロマンかダヴィンチあたりの差し金だろう。

まあ、想定範囲内だ。

結果俺の鯖の編成、キアラ、槍アニキ、ヘラクレス、ジャンヌダルク

立香の編成は マシユ、カルナ、玉藻の前、アルトリア、ギルガメツ
シユ

やっぱりギルガメツシユさん来るんですね。うわこっち見てる。
《妙なことをしたら命はないと思え。》

なんか眼でそう言われてる気がする。ほら、眼は口ほどに物を語る
るって言うじゃん？

大丈夫です。今のところ人理修復の邪魔する気はないんで。つー
か、マイルームに帰っていい？

何せ俺は知ってるだけで実際に経験した訳ではないんだからさ。
しかも今回が初めて特異点だからね。

ホント、行きたくない。マイルームでゴロゴロしたい。

「彼は行ったかい？」

「ああ、今頃レイシフトしてるだろうね。」

二人が行ったのを見計らってロマンとダヴィンチが何やら準備を始める。

「彼は信用出来るのかしら？ 貴方の話を聞いた時は何の冗談かと思っただけ。」

メドゥーサなど立香の召還に伝えてくれた英霊はメデイアの言葉に頷く者が多かった。彼らはロマンから深川に関する事の顛末をあらかじめ聞いており、取り敢えず深くは詮索しないことなどを伝達していた。だが、妙な真似をすれば即座に対処出来るようにしてほしいという旨を伝えた。

このことは深川はもちろんマスターの立香とそのパートナーのマシユも知らない。

彼女らに余計な負担をかけないためにロマンらはあえて黙っていた。

「彼の制服には超小型の監視カメラをつけている。これで彼の様子はこちらでモニタリング出来る。今はとても大切な時期だ。この特異点を攻略すれば次は黒幕との戦いだ。万が一にもここで負ける訳にはいかない。彼が敵だとわかった場合は直ぐ様対処するよう彼らにも伝達済みだ。」

ダヴィンチはあらかじめ深川の制服に監視カメラを仕込んでいた。

「……今回の異変で彼が敵ではなかったとわかった場合はきちんと今回の旨を伝えて謝罪しよう。許されるかどうかは別としてもそれが僕らが彼にしなければならぬことだ。」

さて、問題です。俺は今どこにいるでしょうか？正解は密林です！

お前ふざけんよ！こんなクソ暑い所にレイシフトさせるとかカ
ルデアは何考えてんだ！

これいきなりケツアルコアトルとかジャガーマンと事を構える可
能性大じゃねえか！あんな脳筋女神とか相手にするとかマジ勘弁。
あんななんまともにやりあえるのはサイヤ人位だろ。

そのことに頭を悩ませてると横から声がかかった。

「おい、坊主。お前これからどうすんだ？一応マスターから言われて
お前さんのサーヴァントとして戦うが生憎俺らはお前のことをほと
んど何も知らないんでな。一応何が出来るかとこれからの方針みた
いなの教えてくれや。」

取り敢えずこの場所から離れて立香と合流することを伝える。当
然、能力のことは伏せて。相手によるが、自衛程度なら可能なことも
伝える。

万が一の時は俺だけでも逃げるけど。だって死にたくないし。

その時に互いに自己紹介を済ませます。つーかジャンヌつてスタイル
めっちゃいいな。

そしていざ移動せんと動き始めようとした時辺りにドスの聞いた
声が響いた。

「去れ。ここは獣ごときが立ち入っていい場所じゃない。」

そこにいたのはジャガーマンだった。黒のスーツに身を包み、胸元
がはだけている。肩には白のファーがかかっている。その姿は女ヤ
クザを彷彿とさせる。

いきなりの強敵相手、しかも本気モードに俺は頭を抱えなくなる
も、槍ニキたちに指示を出す。

取り敢えず逃げる。地の利は向こうにあることは明白なのでま
とに戦う必要はない。しかも何故か殺意全開だし。

一応俺のライドウオッチ擬きを使えば何とかなるかもしれないがそ
れはどうしようもないときに使う。

自分の手札をいきなり晒すつもりはない。使わなくてもなんとか
なる時は使わない。今回の敵は強敵であることは間違いないが、俺の
ライドウオッチ擬きを使うレベルではない。ケツアルコアトルも来
たら使うかもしれんけど

取り敢えず槍アニキとヘラクレスに彼女の相手を適度にした後撤
退するよう指示しつつ、ジャンヌとキアラには俺の護衛をしてもらい
ながら逃げる。

そうこうして逃げるまでは良かったがジャングルの複雑さに中々
抜け出せないでいた。

一瞬この辺り一帯を燃やすことも視野に入れるも直ぐ様却下して
出口を探す。ただでさえ暑いのにこれに炎が加わるのは流石マズい。
熱中症で死ぬる自信しかない。

しばらくするとアニキ達が戻ってきた。

何とか隙について撤退することに成功したみたい。流石英雄たち。

《やっとな繋がった！大丈夫かい？》

ダヴィンチか。まあこの際出るのはどっちでもいいや。

「……ジャングルにレイシフトしていきなり敵と遭遇した。特徴は黒のスーツを来てる女。後このジャングルは尋常じゃないレベルで暑いし蠍もうじやうじやいるからもしここに来るならある程度対策した方がいい。」

それと藤丸さんはどこ？」

《情報提供ありがとう。彼女達は今ウルクに向かつてるよ。》

ウルクか……結構距離あるな。

《取り敢えず立香ちゃんとは別にそのジャングルを調べて欲しい。》

これもしかして来た道を引き返さなければいけないのか？

前途多難な旅になることを確信しつつ、来た道を再び引き返す。

一方その頃立香らはマーリンと合流してエルキドウを巻いた後ウルクに向かっていた。

「取り敢えずギルガメッシュ王に会って君らの目的を伝えることが今やるべきことだ。私に出来るのはせいぜい道案内だから交渉などは

君ら次第だ。」

道案内をするのはマーリン。千里眼を保有し、冠位の資格を持つ1人だが、性格はクズで有名である。

「わかりました。それと深川さんは今どこにいるんでしょう。レイシフトした際にはぐれてしまったみたいですので、心配です。」

「大丈夫かな……深川さん昨日食事も取らずにマイルームに籠ってたらしいし。それにレイシフトする前に会ったけど目の隈が凄かったから私心配だな……」

それに同伴するマシユと藤丸は深川のことを心配していた。何か特殊な事情があるとは言え、今回の事態に半ば巻き込むような形になってしまったことに罪悪感を感じおり、この7つ目の特異点がこの世界での初陣である深川のことを案じていた。

《彼だが今ジャングルにいるらしい。それと彼からの伝言だ。このジャングルは尋常ではないレベルで暑い上に蠍がたくさんいるからある程度対策した方がいい。それと敵に遭遇したとも言った。敵の特徴は黒のスーツを来てる女性とのこと。》

「なるほど……情報提供ありがとうございます。深川さんも気をつけて下さいと伝えておいて下さい。」

《了解。彼はおいおい君らと合流させるから立香ちゃん達はそのままウルクへと向かってくれ。》

「アナ、彼女らを連れて先に行つてくれないかい？僕は少しやることがある。」

アナが藤丸らを連れて行き、ある程度距離が離れたところでマーリンが話を切り出す。

「Dr. ロマン。やはりこの特異点に彼は来てるのかい？」

《深川君のことかい？そうだよ。》

「なら、出来る限り早く彼をなんとかした方がいい。このままいくと結構マズい事態になる。彼はこの特異点で状況次第では頼もしい味方にも破滅をもたらす悪魔にもなりうるからね。それと彼のサーヴァントであるあの女性には気を付けることだ。ある意味彼よりも厄介だからね。」

「ヤバい、どうしよう。完全に迷った。」

深川は来た道を引き返すもジャングルの複雑さが原因で迷っていた。

彼らは現地調査のために来た道を引き返すも気がつけば迷い混んでいた。そして深川は最終手段に出る

「ジャンヌさん。この辺り一帯燃やすこと出来る？」

「出来なくはないでしょうが……どうするつもりですか？」

「この辺りを焼いて、見はらしをよくする。

こうも視界も悪く、複雑じゃ戦いにも不利になる。それに見晴らしがよくなれば、もしかしたら道の指標が見えるかもしれない。」

まあ、ここが灼熱地獄になることは間違いないけれど。

それはしゃーない。一応発煙筒的なものを撃って救援を待つことも考えたけどそれだといらない奴まで呼びそうだからやめた。

ん？ そうしたらこの付近に住んでる奴らが魔獣に襲われる？ 別に良くね？

それは俺の知ったことじゃないし。あー、でもそうするとケツアルコアトルとかがキレルかな？

「燃やす必要はありません、マスター。集落らしきものが見えて来ましたよ。」

え？ マジで？ おー、ホントだ。遠目に村人がちらほらいるわ。

ナイスキアラさん。

取り敢えず聞き込みをしますか。

……やはりそう簡単にはいかないか。

「……………性懲りもなく戻ってきたか。」

「キアラさん後はよろしく。」

キアラさんから高密度の魔力の弾がジャガーマンに目掛けて放た

れる。それを薙刀で防ぐも地面から極大の紫光が噴き出す。

通常なら喰らえばひとたまりもない攻撃だが、相手は腐つても神
霊。

ダメージこそ負ったものの、致命傷までは至らなかった
。

つーか何でコイツそんな殺意全開なんだ？もしかしてあれか？キ
アラさんがビーストだから？

ビーストがこの神聖な地に入ってるんじゃないか？
まあそれならわからなくもないけど。

あ、ヘラクレスさん今の内にそこらへんの樹木をぶっ壊しといて。
邪魔だからさ

つーか改めてみるとキアラヤバイ。今は力を貸してくれてるけど
絶対この人ヤバイこと考えてるよ。

俺を見たとき本当に面白い人とか言ってたし。

キアラの言う面白いは絶対まともじゃない。だってコイツビース
トだし。

でも敵対したらヘヴンズホールに吸い込まれること間違いなし。
でもスタイルはめっちゃいいから夜のオカズにはしたよ。

お、なんか決着つきそう。流石キアラ。ビーストの名は伊達じゃな
いわ。キアラさんそいつ殺さないでね。

ん？どうしたのヘラクレスさん。明後日の方角を向いて。樹木の
除去は？

え？何か来る？

そこへ現れたのは三女神同盟の一柱であるケツアルコアトルだつた。

EX5 手綱はしっかり握つとくべき

……ケツアルコアトルじゃん。

え？これどうすんの？相手マジの神様よ？ジャガーマンに加えてコイツ？

キアラさんがいればなんとかなると思つた

けど流石にこの二人相手はキツイ。ジャガーマンは満身創痍とはいえこれは結構厳しいな

つーわけでヘラクレスさん、槍ニキさん頼むわ。

キアラさんには引き続き戦ってもらおう。

え？ケツアルコアトルなんかこつち見てない？

もしかしてロックオンされた？

……ジャンヌさん護衛頼むわ。

うわー、戦い方が野蛮だわ。

金棒みたいなものを持って敵を叩きのめしてる。なんかパワーに極振りしたキャラみたいだな。

でもコイツまだ宝具使ってないんだよな。あの不死鳥のやつ。

ヘラクレスさんらも中々やるね。つーかケツアルコアトルこつちをチラチラ見てるんだけど。

あ、二人とも吹っ飛ばされた。

げ！こつち来た！ちよ、ジャンヌさんヘルプ！

危なかった……ジャンヌさんが俺を横抱きにして回避しなければ今頃ミンチになってたな。

つーかどんな怪力してんだよこの女神。金棒を振り下ろされた場所にクレーター出来るとか。多分当たったら普通に死ぬる。あ、ジャンヌさんそろそろ下ろして下さい

このままじゃ死ぬかもしれないからライドウオツチ擬きを使おう。……待てよ？今ここでライドウオツチ擬きを使えばどうなる？カルデアはゲーティアが観測出来ない唯一の場所。つまりそれ以外は観測の範疇ということ。

そんなところでいきなり常時無敵やブラックホールを出す奴が現れたらどうなる？

何者だコイツ？つてなる。

今はアイツにとつて塵芥程度に過ぎないであろう俺はここで調子に乗ってハイパームテキ擬きなどを使えば目をつけられることは明白。

アイツに目をつけられるということはほぼ詰みを意味する。

仮に対峙するとしても万全の準備をしてからではないとその土俵にすら立てない。

俺としてはいてもいなくてもそこまで変わらないみたいなのポジションに落ち着くのが理想的だな。

……チートライダーのライドウオツチ擬きを使うのは極力やめよう。いや、もつと言うとこの能力を使うこと自体を自重した方がいい。

仮にハイパームテキ擬き等を使うとしたらティアマト戦だ。……

まあ今もそこそこヤバイ時なんだけど

このまま何もしなければあの女神のキチガイパワーでミンチにされるのも時間の問題。

といは言え、何で対処する？

今現在俺が所持しているライドウォッチ擬きは以下の通り

ハイパームテキ

エボルブラックホールフォーム

ジオウII

ゲイツリバイブ

クロノス

ビルドジーニアス

???

は今後の展開の関係で敢えて伏せてる。

メタくてすみません。

アギトシャイニングフォーム？

それは本編での俺だから。この番外編での俺は作ってません。なんかすみません。

話を戻すけどこれらはスイッチを押して身体に組み込むだけなので能力はバレずにすむ。昇華は既にかけてる。

ハイパームテキやエボルブラックホールフォームもクロノもだめ。ジオウIIなんて論外。

使うならこの中でも比較的マシなビルドジーニアスのライド

ウォッチ擬きかゲイツリバイブライドウォッチ擬き。

え？お前クロノスとビルドジーニアスと???のライドウォッチはいつ作ったのか？

ああ、それはインフィニティストーンが完成した後に作ったよ。

昨日俺が起きたのが朝の6時でそこから青のインフィニティストーンが完成したのが9時10分キアラと話し終わったのが9時30分

そこから12時間40分かけてインフィニティストーン擬きが完成した。

で、22時20分から翌日の朝7時50分までライドウォッチを作った訳。

話を戻すとゲイツリバイブになるけどそれはそれで問題があるんだよな……………

だってオリジナルでさえ使ったら目とか耳から血が出るんだよ？

その擬きだから副作用絶対ヤバイよ。

でも、強いから一応作ったけどさ……

つーか俺らだけでケツアルコアトルとジャガーマンのダブルコンビに勝つのは厳しい

これは撤退一択だな。この状況でまともに戦うなんて馬鹿な真似はしない。

よし、取り敢えず逃げる。

つーわけでジャンヌさんたち逃げる準備しといて。そう指示すると俺に1つの念話が入ってきた。

《宝具を使います。後で魔力供給お願いしますね？マスター》

おい、待て。お前こんなところでアレ使うつもりなの？待て、それは待て。コイツらここで殺ったら駄目だろ。

対ティアマト戦での貴重な手駒が減るだろ！

せめて、洗脳とかにしないさいよ！あんた魅了チートあるんだからそれぐらい出来るだろ！

つーか俺が巻き込まれるかもしれないことも考えろ！

うわ、やりやがった。コイツホントにやりやがった。

ケツアルコアトルは逃げる事が出来たけど、ジャガーマンが吸い込まれたよ。

コイツ貴重な手駒1名をホールインしやがった。

ホラ、アニキもジャンヌもドン引きしてるじゃん！

しよっぱなから原作乖離したよ。どうすんのこれ？

エレシユキガルにザオリクさせてもらう？

冥界の主なんだから蘇生位出来る筈。……………出来るよね？

仮にも神様なんだし。神様は蘇生が出来ると相場が決まってんだから。

蘇生出来ない神様なんてルーのないカレーみたいなもんだぞ。出来なかったらどうしよう。

いや、でもあれ本当に死んだのか？殺した訳じゃなくて吸い込んだ訳だから……

どちらにせよ無事では済んでないはず。

「マスター、やりましたよ？邪魔者は消えました。」

やりましたよ？じゃねえぞアバズレビースト！はっ倒すぞ！

確かに後はよろしくつてアバウトな指示出した俺も悪いけどさ……そこは臨機応変に対応しろよ！

ほら、見ろよ！ケツアルコアトル青筋立ててるじゃん！
もう今にも俺らを殺しそうな顔してるじゃん！

「貴方達はここで殺すわ。」

ほらー！やっぱりこうなるじゃん！

キアラお前ホント何してくれてんだよ！

お前マジでハイパームテキ擬きでその顔面タコ殴りにするぞ!?

「あ、あのーこれは不慮の事故という奴でして……こちらとしても意図してないことなのでお互いここは落ち着きませんか？お詫びにこの女好きにボコボコにしたいので。」

ルー
何かジャンヌさんらからコイツマジか感出してるけどそこはス

「関係ないわ。どの道その女は殺すもの。それにそのマスターたる貴方には聞きたいことがあるもの」

いや、何で俺マーキングされてるん？

「貴方、何者？」

……………え？

「貴方を一目見たときおかしいと思ったのよ。私はこれでも神だから。神が与える加護には色々あるけど貴方のそれは異質。少なくともこの世界で手に入れたものではないわね。だったらすぐわかるもの。」

……………え？これバレてる？もしかしなくても神様から特典もらったこと言ってるよね？もしそうだとしたらちよつとヤバいな。

この時代の神様全員にバレてると思えないといけない。

おまけに千里眼持ちのギルガメツシュ（術）がいるからこの人には絶対バレてる。

てことはこの特異点ではエレシユキガル、イシユタル、ゴルゴーン、ギルガメツシュ、マーリンにはバレてると思った方が無難だな。

冗談キツいなー何人か殺つとくか？

でもそうしたらティアマト戦で絶対詰む。あの戦いにはイシユタル、エレシユキガル、ケツアルコアトル、マーリン、ギルガメツシュの協力が不可欠だ。

取り敢えずここは無難に誤魔化すか。

まだ協力するような段階ではないし。

「ちよつと何言ってるのかわからないですね。」

「そう、あくまでも白を切るのね。なら力づくで聞くまでよ。」

……これだから脳筋は嫌なんだよ。ゴリラ女が」

あ、やっべ。声出てたわ。うわ、なんかキレすぎて真顔になってる。

これは使わないと死ぬわ。

《ゲイツリバイブ！剛烈！》

起動音の後に身体に組み込むと深川の姿はオレンジの鎧を纏ったものへと変化した。

ケツアルコアトルは自分の愛用武器であるマクアウイトルを深川目掛けて振り下ろし、それを深川はまともに受けるも、数歩後ろへとふらつくだけに留まる。その様子に驚愕の表情を浮かべるケツアルコアトルの顔面を深川が殴る。

さらに追撃として横腹に蹴りを繰り返すが、ケツアルコアトルはそれをバックステップにより難なく回避する

その背後をヘラクレスの豪腕が襲う。が、そこは腐っても女神。それをマクアウイトルで防ぐ。だが、クーフリーンの槍が空きになつた胴体を狙う。

それを槍の刃先に蹴りをお見舞いすることによって軌道をずらし、ヘラクレスの腹にエルボーをくらわせる。

ヘラクレスとクーフリーンがケツアルコアトルから距離を取ったのを見て、彼女はマスターたる深川を探すも既にその姿はなかった。おそらく逃げたのであろう。

そう当たりをつけた彼女はここにはもう用がないと言わんばかりにその場を後にした

どうにか逃げれたな……………

やっぱり疾風ってチートだな。ジオウⅡの予知を上回るスピードを持つてるから素早く逃亡するために使えるか心配だったけど杞憂だったみたい。

あれから時間経過したのは15分つてところ

因みに今俺らは近くの物陰で休んでる。何でかって？それはねゲイツリバイブ擬きの副作用が想像以上にキツイからだよ。

《深川君、大丈夫かい!?君のバイタルが異常に低下してる!》

ああ、ロマンか……

わかってたつもりだけどコイツはちよつと……
ゲイツリバイブの副作用オリジナルよりヤバいわ……

取り敢えず大丈夫なことを伝える。

《嫌、その吐血量で大丈夫は無理があるよ!》

念のため少し休んでから藤丸と合流することとこれまでの事を報告する。報道相は大事だから。

《わかった。けど無理はしないこと!いいね!》

言われなくてもそうするって……

あ、ヘラクレスさん達戻って来た。

ケツアルコアトルは?……撤退した?

………まあいいか。

え?あれは何か?ゲイツリバイブのこと?

俺の装備みたいなもんだよ。リスク半端ないけど

え?アレはもう使うな?まあ俺も極力使いたくないけど
どうしてもヤバい時は使うよ。

あ、ヘラクレスさんとアニキは少し休んでて。

変わりにジャンヌさんとキアラさんは見張りを頼むわ。

俺は少し寝るわ。

そして俺は意識を手放した

EX6 上げて落とす

その頃藤丸らはギルガメツシユ(術)との面会の後、ウルクにて様々な仕事をしていた。

その際にギルガメツシユ(弓)とギルガメツシユ(術)が鉢合わせ、少しばかりの騒ぎとなったのは別の話。

「マシユ、疲れたよー」

「先輩、後少して書類業務は終了します。それまでの辛抱です。」

藤丸とマシユらは今日はサーヴァントらと共に魔獣退治を行った後、書類仕事に取りかかっていた。

「玉藻さくん。今度から書類仕事が早く終わる術式出してよ」

「ドラえもん、何かいい道具出してよくみたいな感じで言われても困ります。因みにそんな術式はありません。地道にこなしていくしかないかと。」

「そういえば深川さんは今頃何してるのでしょうか？やはりまだジャングル付近を調査してるのでしょうか？」

《彼は今訳あって休んでる。因みに今はジャングルを抜けて北上している最中だ。それと彼から伝言だ。新たに敵と遭遇したが、黒のスーツが特徴の敵を排除したとのこと。》

マシユの疑問に対してロマンが返答する。その間にも書類を捌き続けている。

「新たな敵？誰でしょうか？」

《金棒みたいなものを持った大柄の女性らしい因みに彼女は女神らしい。》

「……………女神？それってもしかして三女神同盟の1柱なんじゃない……………」

《おそらくそうだろう。残念ながら名前まではわからなかったらしい。詳細は彼が合流した時に聞いていくよ。とにかく君らはそこで業務をこなしてくれ。》

「失礼するよ藤丸嬢。どうだい？仕事は進んでるかな？」

「マ〜リ〜ン。もう書類仕事は嫌だよ。書類が早く終わる便利な術式出して〜」

「アハハ、大分参ってるようだね。そんな君に朗報だ。今度は身体を動かすお仕事だ。書類が終われば後はその仕事をしてもらう。」

「どんな仕事なのですか？」

「ある人物をここに連れて来て貰いたい。因みにその人物は君らがよく知る人さ。」

「まさか、深川さんですか？」

「その通りだ。マシユ嬢。彼は今危機に瀕している。」

千里眼で見た所、このままいけばエルキドゥと鉢合わせになる。」

「先輩、こうしてはいられません！急いで彼の元に向かいますよ。」
「うん、少しの間しか話してないけどあの人も仲間だから。マーリンさん、彼の元に案内して！」

「いいとも。でもその前に書類仕事を終わらせないとね。」

目が覚めたらキアラの顔が目の前にあった。

「あら、マスターお目覚めですか？」

「……俺はどれぐらい気絶してた？」

「2時間程です。ジャンヌさんらが心配してましたよ？」

ライドウオッチ擬き一式やガントレットがちゃんとあるか確認した所ちやんとあった。そして俺はキアラに1つのことを問いかける。

「……何でジャガーマンを殺った？アイツは貴重な手駒の1人だ。」

「あら、妙なことを仰いますねマスターは。彼女は敵ですよ？敵を葬って何が悪いのでしょうか。」

彼女はティアマト戦に必要なメンバーの1人だと反論しかけるも、そのことを言えば何故知ってるのかといらぬ詮索を受けるため黙っ

た。

「……………まあいい。ジャンヌさんらは？」

「彼女は只今見張りです。」

俺は改めてこれからどうするかを考える。

この特異点には俺にとって面倒な奴らが多すぎる。ケツアルコアトルなどの神霊、ダブル英雄王、マーリンなど。

神様。それは大抵ろくでもない奴らの集まり。

息子を拷問したり、他人の奥さん寝取ったり、男が嫌いだから疫病卷い蒔たりと、結構エグいことやってるからコイツら悪魔と同レベルのクソクズじゃね？とか思ったよ。

中には誰でも股を開く尻軽女神もいるし、それら酷さは人間とは比べ物にならない。

よくさ、人間クソだから滅ぼすわ。とか神様が言って滅ぼそうとする漫画見るけどさ。それで俺がまず思うのはお前が言うの？って。

だって人間は神様によって作られて生まれたんだろ？

これは俺の持論だけどさ人間は神様をスケールダウンさせた存在だと思う。

神様だって結構色んなヤバいことやらかしてるんだからその劣化バージョンでたる人間がやらかさない訳ないよねって話。

人間が欲望に身を任せて色んなことやらかすのも正直しようがないと思うよ。

だって神様だって他人、いやこの場合は他神の奥さんと夜のプロレスしたり、自分の娯楽のために戦争起こしたりするんだよ？

神様だって欲望はあるんだから人間が欲望に従順なのもしょうが

ない。

現実逃避したところで事態が解決する訳ではないので、
思考を再び働かせる。

正直ウルクには死ぬほど行きたくない。
何せあそこは千里眼持ちが二人もいる。

現在を見通す千里眼を持つマーリン、未来を見通す千里眼を保有するギルガメツシュ《術》がいる。

唯でさえカルデア陣営にギルガメツシュ《弓》が存在する上に、この特異点は神様がうじゃうじゃいる。

おまけに現時点でケツアルコアトルにバレてる。

あの女神にバレてるんだから他の女神とも対面したら高確率でバレる。この時代に存在する神はイシュタル、エレシユキガル、ケツアルコアトル、ゴルゴーン等。

あれ？これひよつとしなくても隠すの無理ゲーじゃね？
つーか転生者キラー過ぎない？この面子。

ヤバい。今更ながら逃げたくなってきた。

もういつそのこと藤丸に丸投げして俺はサボるか？
そしたらこんなことでウダウダ悩まなくていいし

そうこう考えながらしばらくの距離を北上していると遠方から無数の鎖が飛んで来た。

それを見たヘラクレスが俺を直ぐ様突き飛ばす。

俺が再び目をやるとヘラクレスは鎖に貫かれていた。

それを見た俺は直ぐ様敵の正体を把握する。

「君がカルデアの二人目のマスターだね？悪いけれどここで死んで貰おう」

そう言うのは緑色のロングヘアーが特徴の青年エルキドゥ

ケツアルコアトルに続いてエルキドゥと遭遇してしまうような自分の不運さを呪いつつも俺はキアラに念話で指示を出す。

《目の前の敵を撃退しろ。但しここで殺すな。》

キアラは俺の指示に不可解な表情を浮かべながらもエルキドゥに向かっていく。

続いてジャンヌとクローフリーンにはキアラのサポートをするよう頼む。

ヘラクレスの救出は後回しだ。

取り敢えずこのことをロマンに伝えて応援を要請する。

今はエルキドゥを撃退することを優先しなければ

そう考えた俺はいつでも対応出来るようにゲイツリバイブライドウオッチ擬きを取り出す。

だが、そうは問屋が卸さなかった。

ゲイツリバイブライドウオッチ擬きに鎖が巻き付き、瞬く間にエルキドゥの手に渡る。

「これが君の力の元か。これはこちらで有効活用させて貰うよ。」

自分でも血相が変わるのがわかった。神造兵器が擬きとは言え、ゲイツリバイブの力を取り込んだらどうなる？

そんなのは馬鹿でもわかる。非常にマズい。

ゲイツリバイブの強みを要約するとパワーと防御に特化した剛烈とスピードに特化した疾風を状況に応じて使い分けることだ。

俺は思わず声をあげた。

「キアラ！そいつを今すぐ殺せ！」

《ゲイツリバイブ！剛烈！》

ゲイツリバイブライドウオツチ擬きを身体に取り込んだ

エルキドウはキアラ達に襲い掛かる。

「何でお前がその使い方を知ってる？」

「それは使い方を聞いたからさ。君らが先程戦ってた彼女からね。」

ケツアルコアトルか……………

恐らくあの女神は俺があのおオツチを起動させ、ゲイツリバイブ擬きになるまでの一連の所作を見ていたのだろう。そう辺りをつけた俺はどう撤退するか考えていた。

だが、そんな間にもゲイツリバイブ擬き(エルキドウ)は猛威を奮っていた。

キアラの攻撃やクーフリーンの槍捌きをもともせず、逆に殴り付け、あしらう。

「まさか僕が更に強くなれるなんてね。感謝するよ、第二のカルデアのマスター。君の愚行のおかげで僕は更なる力を手にいれた。」

殺したい。今すぐ目の前の奴を殺したい。神に造られた泥人形風情が調子に乗りやがって。お前なんぞハイパームテキ擬きにかかれば余裕だ。

今すぐお前をぶちのめしてやる。

頭に血が登った俺は直ぐ様目の前の敵を処分するためハイパームテキライドウオッチ擬きを取りだそうとするも、その手は第三者によつて止められた。

「一旦落ち着こう。怒りに囚われて戦つて勝てる相手じゃないことは君ならわかる筈だ。」

隣を見ると世界最高峰のろくでなしであるマーリンがいた。そしてその背後には藤丸とそれを率いるサーヴァントがいた。

「深川さん、大丈夫？どこか怪我はない？」

俺を心配して藤丸が声をかけてくれる。

彼女に問題ないことを伝えると安堵の表情を浮かべた。本当に分かりやすい。

「良かった〜マーリンから深川さんが危ないって聞いたからとつても心配したんだよ？」

.....

「マスター、感動の再会は後にしてくださいまし。今は目の前の敵をどうにかするのが優先です。」

藤丸のことやマーリンに諭されたおかげで幾ばくか頭が冷静になる。だが、それでも目の前の泥人形を叩きのめしたいという思いは健在だった。

あの人形とクソ女神は今度会ったらぶつ飛ばす。

そんな思いを胸の奥にしまいこんで俺らはマーリンのおかげもあつて撤退することに成功した。

あれから何とかウルクへと辿り着いた俺らは直ぐ様ギルガメツシユ（術）がいる王宮へと向かった。

まさかマーリンに助けられるとは思ってもなかったが。

どんだけろくでなしとかクズとか言われてようが俺はコイツのおかげで助かったのだからこちらが一方的に嫌悪するのもアレだし。

引き続き警戒はするけども、内心マーリンに対する好感度が少し上昇した。

「嫌、ホント危なかったね。あのままいけば間違いないなく全滅していた。神造兵器に君のその力の1つが加われればその脅威は計り知れない。でも、奪われたのがあれで良かった。これが時間停止やブラツクホールを操る方ならば詰んでいたよ。」

おい。

《どういふことだい?!マーリン?》

「あれ？知らなかったのかい？彼、下手な神霊よりも強い力を持つて
るよ？時間停止、ブラックホールの生成、限定的な未来予知などこの
特異点の神霊もびっくりするレベルの力を人間が有している。何、詳
しいことは彼自身が話してくれるさ。」

……………やっぱりクズはクズだったよ。

EX7 厄事は忘れた頃にやってくる

ヤバい。ヤバすぎる。

マーリンの爆弾発言のせいで一気に場の空気が凍りついた。

どうする？この場で口封じに全員黙らせるか？……無理だな。

マーリンの他に玉藻の前やカルナもいるし。ギルガメツシユがないことが幸いだな。

遅かれ早かれバレるとは思ってたけどまさかこんな大勢の場合で暴露されるとは……

マーリンの奴を見直してた前回の俺をぶん殴ってやりたい。

つかこれ正直にゲロツた方がいいのか？

仮にバラすとしても何て言うんだ？

お前ら全員ゲームのキャラクターでこの世界は虚構です！

神様から力をもらって転生したら死亡フラグが跋扈するゲームの世界でした！

神様もびつくりなチートを持ってると特に誰かを救おうとか思いません！むしろ自分のために使います！

今回の異変も正直既知のことだけど俺は知らぬ存ぜぬで通すね！お前らのことは正直微塵も信用してない俺だけどこれからも宜しくね！ってバラすのか？

………却下だな。そんなこと言ったらリンチどころじゃ済まない。

どうする？何て言う？俺が正直に言ったらコイツらはどうする？

十中八九排除だな。こんな危険な奴が隣にいるならすぐに消すね。俺なら。

指パツチン使うか？いや、指パツチンはまだ早い。

あれは最終手段だ。本当にどうしようもないときに使う

とは言えどこまで話すか。俺の本当の能力がバレるのも時間の問題だな。

時間停止やブラックホールを生成することが出来ることを認めるのは確定路線としてこの世界が虚構であることは伏せといた方がいいな。

このことを打ち明けて藤丸が人理を救うのを放棄されたらたまらない。

コイツには世界を救うという重責を引き続き背負って貰わないと困る。

まあいつまでも黙ってもアレだからそろそろ喋るか。

「……………マーリンの言うとおり俺は時を止めたり、ブラックホールを生成することが出来る。条件付きだけどな。黙ってたのは悪かったよ。」

《どうして話してくれなかったんだい？それに君がその力をフルに使えばこの特異点なんてあっという間に攻略出来るんじゃないのか？》

「…………俺は元々この世界の人間じゃないからな。この世界の出来事はこの世界の住人で解決してほしかったんだよ。上から目線で申し訳ないけど。今まで黙ってたのは喋ったら色々と面倒なことになると思ってたからだ。」

「俺が最初にアンタらに時間停止などのことを喋ったら万が一駄目でも彼がいるから大丈夫と慢心するだろ？」

今までアンタらは未来を取り戻すために必死になって来たはずだ。

それを俺の能力のせいで崩したくなかったんだよ。」

《………君が僕らに黙ってた理由はわかった。

ならその力はどこで手にいれたんだい？只の人間がそれほど力を手に入れることなんて本来ならあり得ない。返答によっては君に對してしかるべき処置を取らなければならなくなる。》

「……あの緑髪の奴に奪われたアイテムを覚えているか？」

《………それがどうかしたのかい？》

「俺はそれに類するアイテムを持っている。これだよ。」

そうやって彼が懐から出したのはエボルブラックホールフォームライドウォッチ擬きとクロノスライドウォッチ擬き

「これを起動させて、体内に組み込む。そうすればそれぞれの能力を得られる。」

《カルデアで召還された時にはそんな物は持つてなかった。ということとはそれはマイルームで籠ってた時に作成したのかい？》

「その通り。俺としてもいきなり訳もわからずに襲われて死亡なんてオチは嫌なんでね。だから色々準備をさせて貰った。」

《ならそのアイテムはどうやって作成したんだ？》

「………魔力で作ったよ。それにある術をかけて。因みにその術については秘密だ。1つ言っておくと俺は黒幕サイドの人間ではない。もつと言うならば今回の黒幕とは敵対する立場にある。最もアンタらが俺を排除したいのならすばいい。戦力になる者を排除して黒幕に勝てるど踏んでるのならね。」

まあ、その場合は可能な限り抵抗するよ。もしかしたらこの星が無

くなるかもしれないけど。それは仕方ない。」

「勘違いしないで欲しいのは俺は別にこの力を使って世界を滅ぼそうとかそんな考えは持ってない。どちらかと言うと俺は平穩に暮らしたいのさ。」

そのためには今回の黒幕は俺としても邪魔以外の何者でもない。アンタらは人理を修復したい。そのためには今回の黒幕を倒す。

わかっていると思うが俺とアンタらの利害は一致しているのさ。それでも排除を選ぶのなら俺は何も言わない。

強すぎる力を持つ者が現れたら排除したくなるのが人というものだからね。排除か、協力か。どちらが賢明な判断かはアンタならわかる筈だ。」

《……………》

「……………私はこのまま協力してくれた方がいいと思う。」

お、いいぞ藤丸。言っただれ言っただれ

「確かに隠し事があったのはショックだけどよく考えるとそれもしょうがないと思う。」

いきなり訳もわからず召還されたら混乱するし、警戒するのも仕方ない。

それに深川さんがその気になれば私らのことを簡単に手をかけられた筈。

だから深川さんに取って今のところ私たちは警戒こそすれど抹殺の対象にはなっていないと思うな。

それにもし深川さんと言うことが真実ならこれはとても大きな戦力になるんじゃないかな。

私たちは人類の未来を取り戻すためにこれまで幾度となく危機を乗り越えて来た。

けれど中には一つ間違えれば私らが全滅してた場面もあった。

そこに深川さんの力が合わされば私たちはより安定して旅をすることが出来る。」

それに今回の黒幕と対決するなら戦力は少しでも多い方がいいし。だから私は深川さんには協力してもらった方がいいと思うな。」

流石カルデア最後のマスター藤丸。話が分かる人はホントにありがたい。世の中には人の話をまともに聞くことも出来ない頭チンパンジーの奴らもいるからね。

「……………私も先輩の意見には賛成です。深川さんは隠し事をしていたのは事実ですが、それは私たちのことを思つての部分も少なからずあると思います。」

実際あの能力が初めからあるとわかっていた場合は、私たちは油断していたでしょう。

それに彼が協力してくれるという言葉には嘘はないかと。

今ここで深川さんの協力を得るのはこれから先より強い敵が現れた時の助けになると思います。

仮に協力が得られなくても排除だけは絶対に避けるべきです。今回の黒幕に加えて先程の能力を有している彼を同時に相手どるというのは余りにも無謀極まりないと私は思います。」

そうそう、時間停止にブラックホール生成だぞ？こつちには神をも屠れる力が存在するんだから只でさえこんな状況で敵対するなんて馬鹿のやること。流石出来る後輩は言うことが違う。

ご褒美にこの特異点が無事攻略できたら君には特製アイテムをやるろう。

《……………立香ちゃん達の意見はわかった。だけど結論を出すのにもう少し時がかかる。深川君、1日待って欲しい。それまでに返答は必ず出す。》

現在カルデアは緊急会議を開いていた。議題はもちろん深川のことだ。会議に集まったのはロマンやダヴィンチなどの主なカルデア職員はもちろん藤丸立香に従うサーヴァントもその場に同席していた。

「どうするんだい？ロマン。彼のこと。私はマシユの言うとおり排除するのは愚策だと思う。かと言って全面的に信頼するのはまだ早い。それに彼はその術以外にもまだ隠してる。」

「確かにレオナルドの言うこともわかる。超小型の監視カメラが拾った音声によれば彼は神から力を授かったみたいだね。あの女神が言うことが真実だとするならの話だけど。」

時間停止やブラックホール生成はその1つだろう。にしてもそれだけの力を授けることができる神様はそう多くない。候補をあげるとすればクロノスじゃないかな。

クロノスだとすれば時間停止の力を手にしてるのも納得がいく。クロノスは時を司る神だからね。ただその場合はブラックホールが不明なんだ。ブラックホールを自在に操る神様なんて聞いたことがない。」

「それは本人に聞くしかない。私らがいくら考えた所でそれは推測の域を出ないのだから。それにキングウに奪われたあのゲイツリバイブとかいうアイテム。あれの対策もしないといけない。そのために彼の協力はあった方がいい。」

「あの……発言宜しいでしょうか。」

「恐る恐る手を上げたのはムニエル。彼はカルデアの技術職員の人であった。」

「何だい？ムニエル君。」

「ゲイツリバイブ？っていうのにキングウがなった時その姿を見た時に思ったんですけど……」

「うん、なんだい？」

「………何か仮面ライダーみたいな見た目をしてるなって思っ」

「仮面ライダー？確かに日本の特撮番組だね。僕も仮面ライダーは見たことあるけれどあんな見た目の仮面ライダーなんて見たことないよっ。」

「それはそうなんですけど……なんか顔にひらがなでらいだーって書かれてるので仮面ライダーみたいだなって」

「……言われてみれば確かに顔にらいだーって平仮名が降られてあるね。でもまさか、こんな顔に平仮名を振るなんてダサさの塊みたいなものが仮面ライダーって……」

「

「パーカーを来てる仮面ライダーもいるぐらいだしそれもあり得るのではないかね？」

そう発言したのはカルデアのオカン、エミヤ。

「私も仮面ライダーは見るが年々シルエットがなんというか微妙になってる。ダブルやオーズはまだいいが、フォーゼのシルエットは見ようによってはイカに見えなくもない。鎧武はフルーツという斬新過ぎるものをシルエットに取り入れた。

私の主観だが今挙げたものらは総じてダサイ。年々ダサくなって仮面ライダーのシルエットだ。

顔に平仮名が振ってるライダーがいてもおかしくはない。」

「その仮面ライダーとやらだとするとおかしいわね。今の話を聞く限り仮面ライダーというのは虚構の存在。虚構の存在が現実になるなんて本来ならあり得ないことじゃなくて？」

エミヤらの意見に疑問を持つメデア。虚構の存在が現実に表示するというのは彼女からすれば到底信じ難いことだった。

そしてそれに追従するかのようにロマンも反対意見を述べる。

「それに仮面ライダーだとするとベルトやドライバーがないのはおかしい。仮面ライダーというのは変身するために様々な条件はあれど、全部共通してるのはベルトやドライバーが存在するということだ。それがなければ変身出来る筈がない。」

「あのアイテムがベルト等の役割を担っているのではないかね？あの男の言うには機械を起動させて、身体に組み込めばその力を得られるのだろう。現にエルキドゥがそれを証明している。」

「仮面ライダーかどうかはともかく、彼の協力を得るか否かそれを決

めよう。私らが考えても推測の域を出ない彼が仮面ライダーかどうかは本人に聞こう。」

ダヴィンチの言葉で本題に戻り、その会議は夜遅くまで及んだ。

その頃マーリンの爆弾発言からしばらく経過した彼らは無事ウルクへ北上することが出来た。

因みにウルクへ到着したのは夕暮れ時である。

そこでマーリンは深川らに明朝、ギルガメッシュ（術）に面会することを伝えた。

そこから解散となった彼らは各々割り当てられた部屋にて待機していた。

そこで深川は1人思索する。

（明日ギルガメッシュ（術）と対面か……たぶん弓の方もいるよな……多分、いや確実に向こうは俺の全てを把握してる。本当に面倒極まらない。正直に全部ゲロるのは確定だが、どういう反応を取るかが問題だな。

それにエルキドゥのこともある。

あの泥人形は擬きとはいえゲイツリバイブの力を取り込んでいる。アイツはケツアルコアトルから聞いたらしいから使い方を知ってるんだろう。

俺がケツアルコアトルの前で使ったのは剛烈のみ。

疾風はクーフリーンとヘラクレスらがケツアルコアトルの相手してる時に使った。

目の前では使っていないとは言え、見られた可能性も考えておいた方がいいな。

ゲイツリバイブライドウオツチ擬きが現在アイツの手中にあるからジオウⅡ擬きで完全に破壊しないとならない。

奪還するのは最悪出来なくても、破壊だけはしなくては。

ゲイツリバイブ擬きをジオウⅡ擬きで倒すとしたら一番厄介なのは疾風だな

未来予知を上回るスピードで動けるからジオウⅡの強みが活かせない。

そしてこれから先どうなるかを整理するか。

この先エルキドゥを倒して先んじて聖杯を回収することにより、アドバンテージを得る。聖杯回収の後には三女神らを締めればいい。その後、ティアマトを倒す。

………厳しいな。ティアマトは確かゴルゴーンを倒したら復活する。

ということはティアマト戦は避けられない。

ティアマトはこの世界の人間じゃ倒せないし、死の概念がないから実質無敵だ。……山の翁による協力もいるな。

で、加えてラフムらに対処しなきゃならない。

ラフムの総数は1億。地表に這い出たのは10万

更にケイオスタイドに飲み込まれたらゲームセット。

……………え？何これ？ 無理ゲーの極みじゃね？

え？これどうやって勝つの？

改めて考えるとヤバいな。これよくカルデア勝てたな。

出し惜しみをして生き残れる状況じゃなくね？

でも、余りにもぶつ壊れの奴を使うとゲーティアに目をつけられるし……

使うのはエボルブラックホールフォームかムテキのどちらかだな。
取り敢えずエルキドゥを倒す。

アイツはゲイツリバイブ擬きを使ってるがそれに副作用が存在することまでは知らない。今頃副作用で苦しんでるだろう)

そこへノックの音が響き渡る。

深川は入るよう促すとそこにいたのは殺生院キアラ
それを見た深川は内心疎ましく感じるも要件を聞く

(キアラか……空気読めよ……今忙しいんだよな)

「どうした？何かあったか？」

「魔力供給をしてくれませんか？」

「……………はい？何でいきなり…………」

そこで深川はある出来事を思いだす。それはケツアルコアトルとジャガーマンの両方を相手どった時にキアラが宝具を使用する前に深川と念話をしていたこと。

その時に魔力供給をするよう頼まれていたのだ。

ジャガーマンの脱落、ケツアルコアトルに能力のことを勘づかれ、エルキドウにゲイツリバイブライドウオツチ擬きを強奪されるなどの予想外のことが出て続けに起きたせいで深川は魔力供給のことなどすっかり忘れていた

「きよ、今日は疲れてるからまた今度な。大丈夫。アンタなら何とかなるよ。」

（冗談じゃねえぞ！コイツは確かにスタイルいいし、性欲の権化みたいな女だけどコイツとヤツたら何か後戻り出来なくなる気がする。

こう、コイツなしでは生きられない身体になりました的なオチが見える。

そりゃあ俺は童貞だからそういう経験はないけど初めてがコイツはちよつと……だってビーストだぞ!?

俺の童貞の初めての相手が人類悪とか何の罰ゲームだこれ！逃げないと！なんとなくわかる。

コイツとヤツたら多分他の女では満足出来なくなる。

冗談じゃない。

俺はこの異変を解決したら宇宙船でトンズラして、そこで適当に女鯖の召還に必要な触媒やらを魔力で作って召還したら宇宙船内で毎日爛れた性活を送るといふ崇高な夢があるんだ！こんな所で潰えてたまるか！）

「大丈夫です。全て私に身を委ねて下さい。」

「や、止めろ……来るな……来るなあああ！」

そしてこの部屋では夜のプロレスが朝方まで行われた

EX8 忍耐力は大事

あれからキアラと夜のプロレスを朝方まで行ってた俺は激しい睡眠不足と疲労に陥っていた。

もう、アイツヤバイ。こつちがもうギブって言っても何か回復させて来るんだもん。

俺も途中からキアラの我が儘ボディに夢中になった訳だが。

まあ、主導権は終始向こうが握ってたけど。

だって、俺キアラとやるまで童貞だったんだよ？

そんな夜のプロレスに関してペーパーの俺がキアラから主導権奪うなんて無理無理

レベル1の奴がレベル99の奴に勝てる訳ないのと同じ

快樂の獣の名は伊達じゃないわ。しかもキアラとする時の快樂がヤバイ。

あれはもう麻薬とかのレベル。てか当の本人は隣で裸で寝てるし。

どうしよう。この先誰かとやっても昇天出来なかったら………
つーか夜のプロレスヤバすぎ。こんなん知ったら色狂いになるのも無理ないわ。

この世界で生き残るといふ目標がなければ普通に夜のプロレスにどっぷりハマってたかも。

やめよう。これはカルデアに帰ってから考えよう。

つーか腰がいたくてたまらない。誰か湿布くれないかな

取り敢えず着替えて支度しないと。俺今まっぱだし

あ、通信が来た

《おはよう深川君、早速本題に入るけど結論が出た。

僕らカルデアは人理修復するために是非とも君の力を借して欲しい。改めて言おう。僕らに協力してくれないか？》

……………何とか意外だな。てっきり排除してくるかと思ったけど。…………いや、信じるのはまだ時期尚早。

これが罠である可能性も考えるべきだな。

油断させて背後から攻撃なんてこの世界では充分あり得る。この世界は俺が数知るアニメの中でもかなり民度が低い。

勿論善人がいることは否定はしないが、そうじゃない方の奴が圧倒的に多い。

取り敢えず了承の意を示しとく。

《有り難う。早速君に幾つか質問があるんだがあのゲイツリバイブとこののについて教えてくれ。》

「……………ゲイツリバイブには二種類のフォームが存在し、パワーと防御に特化した剛烈とスピードに特化した疾風がある。

剛烈は生半可な攻撃は通用せず、逆にダメージの衝撃分防御力上昇に換算され、疾風は未来予知を上回るスピードで動ける。但し、その副作用は大きい。先程の俺のそこそこの量の吐血がその証左だ。」

《聞くと中々のチートだね。因みにそれに勝てる方法はあるのかい？》

「時間停止かブラックホールを使えば勝てるだろうが、それだけじゃ意味がない。俺のライドウオッチは一度体内に組み込んだら体内に

どうしてもそのウォッチが残る。俺の場合は一度使い終われば体内から取り出して再び使う場合はもう一度体内に組み込んでるけどな。だって身体の中に異物があるままだと気持ち悪いし。

それにゲイツリバイブの力を取り込んだアイツを完全に倒すには体内にあるライドウォッチごと破壊するしかない。それを行うためにはこのウォッチを使うことが必須となる。」

《それは?》

「ジオウライドウォッチⅡ。限定的な未来予知が可能なウォッチだ。これでアイツを倒す。そうすればゲイツリバイブの力はもう使えない」

《それで勝てるのかい? 疾風とやらは未来予知を上回るスピードで動くから君の未来予知は余りに意味を為さないんじゃないか?》

「だから最初はブラックホールの力を使う。」

《……………もう君一人で何とかなるんじゃないかな?》

「無理無理。俺一人じゃ出来ることは限られて来るから」

《嫌々、それでも今の君の能力ざつと聞いた所、神様と言われても信じる位君のぶつ壊れじゃないか。》

「でも俺はこの世界でフルに能力を使うことはない。使うとしたら本当にヤバい時だ。基本は未来予知で何とかする。」

《ああ、うん……………それともう一つ君に質問だ。君は仮面ライダーなのかい?》

「違うな。俺は仮面ライダーじゃない。仮面ライダーってのは俺みたいな人間がなれるもんじゃない。」

実際無理だわ。みんなの笑顔を守るためとか誰も死なせたくないとか愛と平和のために戦うとか俺には絶対無理

俺はどちらかという自分の欲望のために使うタイプだし。後俺性格がアレだからどちらかと言うと敵側のライダーとかだな。

ティードの言うとおりで俺だけが笑顔になればいいという考え方だし。

ティードがわからない人はスーパータイムジャッカー ティードでググってね。

話を戻すけど例えば俺が仮面ライダーになって人々を助けて回つたとする。でも、いくら仮面ライダーと言えども万能じゃない。やれることには限りがある。

だから救えない命もあると思う。

その時《何でもっと早く来てくれなかったの!》とか、《何がヒーローよ!ヒーローなら私の家族も助けてよ!》とか言う奴もいると思う。

原典の人なら自責の念に囚われたりするんだろうけど俺の場合はじゃあそんな俺にはもう期待しないで自分で何とかしてね。

今後また似たようなことが起きても俺はヒーローじゃないから知らぬ存ぜぬで通すわ。

頑張ってるね。

それに原典なら目の前に苦しんでる人がいたら手を差し伸べたり、助けるために戦いに赴くけど俺の場合はまずある程度様子を見ていけそうなら行く。

で、仮に助けるにしてもこっちはお前を助けてやってるんだというのが根底にあるから文句言われると腹立つしがなり立てられたりすると、じゃああのまま死んでりや良かったじゃねえか。助けるんじゃないかな。

うん、我ながらクスだと思う。まあ、でも助けてといて文句言われ

たら誰だって腹立つししょうがないよね！

あ、そういうゲイツリバイブのことに話しているんだった

《でもゲイツリバイブとやらだって顔にらいだーと平仮名で書かれてあった。あれは仮面ライダーじゃないのかい？》

「あー、それは……まあノーコメントで。」

そーいやそうだったな……すっかり忘れてたわ

《………わかった。それと昨晚よく頑張ったね。お疲れ様》

おい待て、何でそれを知ってるんだ。

あれから身支度を終えて部屋から出た俺は藤丸らと共に

ギルガメツシュ（術）がいる部屋へと向かった。

途中藤丸とマシュが顔を赤くしながらこっちを見てたから多分昨日のアレが聞こえてたんだろうな……

正直俺からすればギルガメツシュに会うことは面倒極まりないので今すぐにも帰りたいのだが、この特異点を攻略する以上彼の協力は必須

そうこうしてる内に着いたな。

……わかってたけどやっぱり怖い。だっていざ対面すると威圧感半端ないし。

まあ想定してたダブルギルガメツシュって事態にはならなかったけどそれでも面倒だな。

心なしか目付きが結構鋭い気がする。これ返答ミスったら即死亡もありえるわ。賢王は弓のギルガメッシュと比べてある程度寛容とは言えどんな地雷があるかわからない

ホントに神経がすり減る。

あ、報告終わった？え？俺は残れ？ちよ、勘弁してよ！

賢王様と二人きりとかふざけん！待って藤丸さん！ヘルプ！

「まずは、逃げずにここに来たことは褒めてやろう。」

……逃げてどうにかなるなら逃げたいです。

「……ありがとうございます。」

「……ふん。元傍観者が人理を救う手伝いをするか。」

貴様は確か元いた世界では人理を見捨てて逃げた筈だ。何故此度は人理を救おうと思った？貴様の力を以てすれば逃げることも可能であろう？」

ほらー！やっぱりこの人俺の全容知ってるじゃん！

千里眼はやっぱり反則だわ。つーかこれどう答える？

この人に嘘をつくのは論外。

だって王の前で虚偽の回答をするとは万死に値するとか何とかで殺されそうだし。

それに嘘について誤魔化せる相手じゃない。

「このまま行けば俺の身が危険だと思ったからです。逃げるにしてもこの星に存在してる限り安寧の地などどこにもありません。宇宙船を使って脱出しようにも時間も材料も何もかもが足りないので不可能と考えました。」

正直に言いますと私は人理などどうでもいいのです。

ただ自分の身が保障されていれば。

今回の事態だって私の身がこのままでは危ういと思ったからこそ彼らカルデアに協力したのです。」

ケースバイケースだけでも大抵は正直に言うのが一番だ。

さあ、どう出る……

「……………その在り方については今はとやかに言わん。貴様の自己保身に対する姿勢だけは立派なものだ。

それに貴様には他の者にはない価値がある。それがあつ限り我は貴様をどうこうする気はない。」

お、意外にも好感触？これはワンチャンあるんじゃないや……

「だが、1つ看過出来んことがある。」

……………え？

「……………何でしょうか？」

「それは貴様のそのガントレットだ。そのガントレットは人が持つには余りにも過ぎたもの。それを今この場で破壊しろ。」

ガントレットを破壊？これは必死に俺が作成した切り札だぞ！賢王様と言えどそれは駄目やろ！

それを破壊しろだと？ふざけんな！無理に決まってるだろ！これは俺の生命線の1つだ。

「出来なければここで貴様の旅路は終わる。もう一度だけ言う。そのガントレットを今ここで破壊しろ。」

……………こ、この野郎……

「言っておくが貴様がアレを起動させ、身体に組み込むのと我が貴様

を屠るのはどちらが早いかは言わずともわかるだろう。」

………本当最悪だ。せつかく苦勞して作ったのに全部それが無駄になるじゃん。

業腹だが、ここは素直に従った方がいいな。逆らっても何もいいことはない。

「……………わかりました。破壊します。」

《ジオウⅡ》

俺は仮面ライダージオウⅡ擬きになってインフィニティガンレット擬きを破壊する。インフィニティガンレット擬きは跡形もなく粉々になった。

「……………これで宜しいですか？」

ああ、対ティアマト戦の重要な切り札が……

「充分だ。では貴様には早速やってもらうことがある。まずは、奪われた貴様のウオッチとやらの力を得たエルキドウを倒せ。元はと言えば貴様の迂闊さが招いたこと。貴様だけで何とかせよ。」

……いきなり仕事ですか。

しかもゲイツリバイブを俺一人で対処しろ？無茶ぶりにも程がありません？

ああ、本当にどうしよう。ガンレットが失くなったから指パッチン出来ない。

これティアマト戦で俺の力をふんだんに使わないと生き残れない可能性大。

本当に嫌だな……ゲーティアに目をつけられたくないんだけどな……

準備する前にキアラにちよつとだけ甘えようかな……

いやいやいや、何考えてんだ俺。キアラに魔性はあつても母性はない。

あるとすればマタ・ハリとかアイリとかブーディカとかその辺だろキアラに母性を感じるとか末期もいいところ。

ヤバい、俺疲れてんのかな……

EX9 口は災いの元

さて、俺は現在何をしてるでしょうか。

正解は大量の魔獣を捌いてます。ビルドジーニアス擬きの姿で。

こうなつた理由はね簡単に言うと

ギルガメツシュ(術)「お前強化されたエルキドウ1人でぶつ飛ばしてこい。」

俺「わかりました」

←
ギルガメツシュ(術)「おい、カルデア。お前らニツプル市民救出に行け。そしたら認めてやるから。」

←
後深川は遊撃隊に入れ。お前力はあるから魔獣をたくさん殺してこい。あ、エルキドウはお前1人でボコレ。わかった?」

←
カルデア・俺「おけ」

←
牛若丸、弁慶、ジャンヌ、クーフリーン、ヘラクレス、キアラと共に大量の魔獣を捌いてる↑今ココ

てな感じですよ。

え?なんでエボルブラックホールフォーム擬きじゃないのか?
ブラックホールを使うのは基本強敵の時かラフムの時だし

魔獣程度なら手数が多いビルドジーニアスで十分

現在俺が使ってるボトルの成分はタンク、ガトリング、ジェット、ロケット。

これらの成分を使って魔獣を駆逐しています。

エルキドゥがどこにいるかわからないんでひたすら魔獣を除去しています。

理由としては大量の魔獣を倒してけばその内来るんじゃないやね？っていう寸法です。

え？原作通りなら、アナがいる所にいるだろ？って？

それも考えたけど既にジャガーマンの脱落、ケツアルコアトルに俺のことがバレるといふことがある以上あまり原作知識はあてにならない。

だから取り敢えず魔獣を殲滅することから始める。出来ることからやってかないと色々不味いからね。

それとビルドジーニアス擬きの制限時間は何とこれ今まで最長の2時間だ。

一応一部を除いたライドウオッチ擬きの制限時間等は俺がカルデアに召還される前、宇宙船にいたときに把握してるから問題なし。

話を戻すけどビルドジーニアスってエボルブラックホールフォームにスペックでは劣ってるけど手数は豊富なんだよね。

何せ60本のフルボトルの成分を全て扱える。

他にも電磁加速即死パンチとか人体に有害な成分を中和したりとかあるけどとにかく多彩なんだわ。

だからこういう大量の雑魚が相手だとにかくやりやすい。

戦いつてのは打てる手段が多ければ多い程いい。

え？大量の雑魚ならブラックホールでやった方が効率いいだろって？……………それは言わんで下さい。

いやね、確かにブラックホールでやった方が早いよ？

でもエボルブラックホールフォーム擬きはブラックホール2発し

か撃てないんだよ。

ブラックホールフィニッシュ（縦回転蹴り等）は何回も打てるけど上空にブラックホールを出現させる奴は2回しか使えない。

だから使いどころが本当に重要なんだわ。

そんな雑魚にポンポン使っているいいもんじゃないのよ。

え？ならクロノスは？

あれはあくまでもタイマンでの時に使うから。ムテキも同じく。

それに俺はカルデアをまだ信用した訳ではない。この世界はクソだからいつ裏切られてもいいように出来るだけ手札は温存しておく。まあ、マーリンやギルガメッシュ等何名かにはバレてるみたいだが。

まあとか言いつつ新たな手札を晒してる訳ですが。ビルドジャーアスに関してはケイオスタイドの浄化に使うつもり

出来るかはわからないけどね。後は魔獣の持つ毒対策とか。毒耐性あるとはいえ、もし藤丸がヤバイ症状に陥ればこれで中和出来るしね。え？急に優しさ見せてどうしただと？

俺は元から優しいよ？何せ俺は善良な一般市民だからね。なんて冗談は置いといて実を言うと藤丸にはこんなところで死んでもらっては困るからだよ。

だってアイツが死んだら人理を救うという重責が俺に降りかかるじゃん。

いやね、俺は人理なんてどうでもいいけど無駄な期待とかさされても困るからね。

アイツにはスケープゴートになってもらう。

仮に俺が人理を救う最後のマスターなんて羽目になれば4番覚醒不可避。

俺は人理を救ってやってるんだから文句垂れんとか多分なると思う。てか確実になる。で、当然そんなことになれば職員との溝は出来るし、英霊なんて応えてくれるはずもなし。

で、俺の能力はチートだから何とか出来てしまうため、どうだ、俺はちゃんと結果を出している。英霊共がいなくても何とかなるんだ！俺は間違つてない！という考えになり、驕りが生まれる。

その時は周りを黙らせられるから優越感に浸れるだろうけど驕りや慢心は破滅を招く。で、まあ死ぬだろうな。

仮に何とか修復してもフォウが覚醒する。

万が一俺の能力をフルに利用して倒せたとしても周りから畏怖されて最終的に守護者やら英霊オールスターズやらが来て淘汰されるのがオチ。

そもそも俺今の人類にそこまで必死こいて救う程の価値があるとは思えないんだよね。

そーいやギルガメツシュ(弓)の方はどこに行つたんだろう。

まあ、いないならいないでいいけど。だつて会つたら面倒だし。

いや本当にギルガメツシュつて怖いからさ、俺あの人と極力関わりたくないのよ。

賢王はある程度寛容だけど英雄王はマジですぐキレるし 面倒臭いから相手にしたくないんだよな……

俺の中でギルガメツシュ(弓) || ジャイアンつていうのがあるから尚更ね……

どっかのスレでもあったけどギルガメツシュはドラえもん並みのチートとスネ夫ばりの財力をもったジャイアンつてのを見たときは納得したよ。

………ヤバい今何か寒気がした。まさか本人にバレた？いやいや、俺心の中で愚痴つてるだけだから。分かるわけない

つーか魔獣多すぎじゃね？俺これでも結構たくさん魔獣を殺したんだけど。どんだけいるのよ。やっぱり大元であるゴルゴーンを叩かないと駄目か……でもその場合ティアマトが復活するんだよね。叩くなら最低でもイシユタル、エレシユキガル、ケツアルコアトルを仲間にしてからにしないとマズい。

ガトリング、タンク、ジェット、ロケットという対集団戦において殲滅力が高い殺意全開の構成で行ったのにまだおるとか……

ゴキブリみたいにわんさか湧いてくるな。

まあ、対ラフム戦の予行演習と思えばいい経験にはなるけれどそれでも面倒だな。

この辺り吹っ飛ばすレベルの魔力玉をぶつけるか？

ドラゴンボールのクウラのスーパーノヴァみたいな感じで。

魔力は多分結構減るけどそれはエボルブラックホールフォーム擬きになった場合ブラックホールで大量の敵を吸い込めば俺の魔力になるし。

でもだとするとその間にキアラに行き渡る魔力が減少するんだよね……

これなら地道にエルキドウ探した方が良かったか？

でもエルキドウのいるであろう場所とか俺ゴルゴーンの本拠地地位しか知らんし

あー、本当に面倒だわ。どっかに隠れてないかな？

取り敢えず上空から俯瞰して見てみるか。

使う成分はフェニックス、ホークでいいな。

結構見渡せるな。お、いたいた。こっからそこそこ距離あるけどわかる。幸いアイツは今生身だ。これはチャンスだな。ゲイツリバイブライドウォッチ擬きを起動させ、身体に組み込む前に殺す。

使う成分はライト、ロック、マグネットにする。

まずは、ライトで視界を奪い、ロックで動きを封じ、ジーニアスフイニツシユで殺す。

電磁加速即死パンチを使わない理由はサーヴァントは即死が入りにくいから。

そして距離を取ろうとするならマグネットで引き寄せてジーニアスフイニツシユ。これでいくか。

そう決めた俺はエルキドウの元へ駆けた

一方その頃藤丸らはニツプル市民救出に赴いていた

現在の藤丸の編成は玉藻の前、カルナ、アルトリア（剣）

「深川さん大丈夫でしょうか？朝会った時凄いやつれてましたけど……」

「深川さんなら大丈夫だと思う。何せあれほどの能力を有しているから彼が負けることなんて早々ないと思うな。というかさつきから王

様見ないんだけどどこに行ったかわかる？」

「それなら……どうやらギルガメッシュ(弓)は霊体化して彼の元にいるようだ。まあ彼は性格こそアレだが、こと力は私らを凌駕している。今回の作戦でも彼のようなレベルでは下手な連携はかえって足手まといになる。」

どうやら知らぬ間に深川に取って結構面倒な人物が傍にいることになってる。がんばれ、主人公。

「お喋りはそこまでですぞ。敵が襲来ました。」

そのことばを合図に戦闘が開始した。

カルナが槍を横風ぎに振るい、玉藻の前が呪術で魔獣を殲滅し、アルトリアが次々と魔獣を斬り捨てていく。

現在の藤丸らの戦力はマシユ、レオニダス、マーリン、アナ、カルナ、玉藻の前、アルトリア。

因みにヘラクレス、ジャンヌ、クーフリーンらは牛若丸ら遊撃隊と共に行動をしている。

このメンバーならまず負けない。誰もがそう思っていた。………彼女が来るまでは。

ある程度カルデアが魔獣を一掃したところに辺りに轟音が響き渡る。その音の発生源にいたのはケツアルコアトル。

突然の敵の襲来に警戒するカルデア。

それを見たロマンは藤丸らにある情報を伝える

《金棒みたいなものを持った女性……マズい！おそらく彼女は深川君がジャングルで遭遇した女神だ！》

「女神……ということとは三女神同盟の一柱。先輩、いきなりの強敵です。どうしますか?」

「貴方たちがカルデアね。人理を救おうとするその姿には素直に称賛するわ。でも今用があるのは貴方たちじゃなくてあの男なのよね。これなら担当する場所が変わってもらった方がいいかしら?」

「深川さんをどうするつもり?」

「決まってるじゃない。排除するのよ。あれほどの力を持った人間を野放しにするわけにはいかないわ。危険度はもちろん貴方らなんかより断然上よ?」

「深川さんの元へは行かせない……カルナとアルトリアは前衛をお願い。玉藻の前やマーリンは後方支援に専念

して。マッシュは私を守って。レオニダスさんらは残りの魔獣の掃討を頼みます。」

「了解。ぐ武運を祈ります。」

その言葉を合図に戦闘は始まった。

カルナが使用する槍であるヴァサビイ・シャクティによる突きをケツアルコアトル目掛けて放つ

それをマクアウイトルでいなした後、槍の刃先を掴み、自分の元へと引き寄せた。

槍が引き寄せられたことに体勢を崩しかけるカルナだが、直ぐ様体勢を立て直す。

だが、ヴァサビイ・シャクティを取られたため、カルナは今丸腰である。だが、カルナはその眼から二筋の光線を放つ。

それを槍を回転させることで光線の被弾を防ぐ。

が、横からはアルトリアのエクスカリバーが振るわれる。その自身への剣撃をマクアウイトルで防ぐもケツアルコアトルを玉藻の前の呪術が襲う。

しかし、ケツアルコアトルはその呪術を受けてもほぼ無傷であった。

それを見たマーリンは苦い顔をする。

「不味いね。恐らく彼女は魔術に高い耐性を持っている。しかも呪術もあまり効果がないときた。ダメージ自体は通ってるみたいだが、いかんせんこれでは決定打に欠ける。

こちらの術はほとんど意味を為さないと見ていいだろう。彼女を倒すには接近戦が得意なアルトリアに任せるしかない。若しくは彼の手を借りるか。」

「その彼なら今頃キングウと戦っているでしょうね。あの男の増援を期待してるのならそれは無理よ。」

ヤバいな。やっぱりゲイツリバイブ強いわ。擬きとはいえその強さは顕在。しかも俺の想定通りコイツ疾風まで使ってるし。

ん？奇襲？失敗したよ。どうやら俺はまんまとコイツに誘きだされたらしい。

今はダイヤモンド、タートルの成分で何とかダメージを軽減してるけどこのままじゃ負けるのも時間の問題だな。

これならカブトのライドウオッチ擬きも作つときやよかつたな。疾風にクロックアップが対抗出来るかわからんけども。

仕方ない次の手を打つか。

まずはライトの成分でもう一度目眩ましをして、オクトパスの成分で拘束し、ジーニアスフィニッシュを決めるか。

疾風は確かに素早い、それは攻撃する際は相手に近づく必要がある。そこを狙う。

お、なんとか決まったな。あ、姿が剛烈になった。

よし、第一目標完了。

あのまま疾風を使い続けられてたら間違いなく負けていたし。

俺も次の手を打つか。

《ジオウⅡ》

ビルドジーニアス擬きからジオウⅡ擬きになる。

未来予知でエルキドウ（ゲイツリバイブ剛烈擬き）の攻撃をかわしつつ、こちらは攻撃を入れる。

そろそろ止めと行こう。サイキョーギレードがないからライダーキックでフィニッシュだな。

因みにジオウⅡの制限時間は20分です。

右足にエネルギーを溜めてそれをエルキドウに食らわせる。

すると、ゲイツリバイブ擬きが解除され、ゲイツリバイブライドウオッチ擬きがスパークしたのち、四散した。

取り敢えずここで当初の目標は達成したな。

「まだだ……僕はまだ負けてない。」

吐血しながらそんな言われてもね……っーかコイツ何気にゲイツ
リバイブ二回使ってからその分副作用が出てるな。

「泥人形風情が手間かけさせんなよ。さっさと死ね。」

あー、ホントスツキリする。今ここで引導を渡してやる。

EX10 一難去つてまた一難

英雄王ギルガメッシュを一言で表すとしたら傍若無人。

お前のものは俺のもの俺のもの俺のものを地でいく人物である。
しかもかなりの傲慢家

だが、それを差し引いても唸らざるをえないほどのスペックを誇つており、対英霊においてその強さはいかなく発揮され、彼の本気に対して相手に出来るのはごく僅か。

だが、性格と宝具頼りな戦法が慢心と油断を生み、格下相手にやられることもしばしばあるため慢心王とも言われる。

本人曰く、《慢心せずして何が王か》ということ。

しかし慢心王とも称される彼が本気を出すのは余程のことである。
本気を出せば、並の敵など相手にならず直ぐ様地に伏すことだろう。

更に、あらゆる平行世界の未来などまで見通せる千里眼を保持している。

王の財宝、乖離剣エアなどでは飽きたらず、千里眼まで持つなんて
どんだけスペック盛れば気が済むんだという

気もしなくはないが、それがギルガメッシュである。

そんな彼は現在1人の男を見極めている最中だった。

その男は小者で、欲望に正直な上、性格もお世辞にも良いとは言えず何よりも自己保身を優先させる男だった。

それだけならばよく彼が口にする雑種の一言で済むのだが、今回は違った。

その者は時を止め、ブラックホール操り、限定的な未来予知など神

のごとき力を持っていた。そして、何より彼は偽物を本物にするという力を持っていた。

しかもその力はこの世界ではない神から貰ったものである。おまけに元傍観者と来た。

これらの要素が合わさり、ギルガメツシュは深川に目をつけた。最初に目をつけたのは彼が転生した時のことである。

ギルガメツシュの深川に対する印象は質の悪い謙虚な小者。

深川は自分がどういう人間かわかっている。それらを把握したうえで行動する。

世界を積極的にどうこうしてやろうというタイプの人間ではないが、ことに自己の安全に関わるものには積極的になる。

そしてギルガメツシュが場合によっては深川を殺すことも視野に入れたことがこれまでに2回ある。

1回目は、転生した当初からのことである。

ギルガメツシュに取って深川は神の加護(特典のこと)を受けているながらも相応に謙虚に生きていたことについては許容していた。力はあるまで自衛のために使うというのも大きかった。

これが下手に自分の力をいたずらに振り回し、世界に影響を与えるようなことをすれば殺すつもりだった。

例 世界征服や人類皆殺し、地球の破壊等

2回目は深川がカルデアに召還された時である。

彼は深川の全容を見抜いていた。もし深川があのまま人理修復の状態を維持させるといふ目的を持ったままならば直ぐ様排除していたところだった。

深川の当初の目的を要約すると以下の通りになる。

よっしゃ、人理修復の状態を維持させるで！ゲートティア倒しても人類は生き返らないようにするんや！地球に人類が甦ると色々面倒だからな！

うわ、ギルガメッシュおるやん。無理だわこの計画
←
とこんな感じである。

そんなギルガメッシュが現在深川に対して抱いてる感情は不快感
であつた。

目の前の男をどうしてやろうかと思ひ、思考を巡らせた。

終わった。ようやく終わった。エルキドゥはもはや存在しない。
途中魔獣が襲いかかつてきたけど何とか対処できた。それに聖杯も
ゲットしたしこれで賢王様に報告出来るな。ん？これよく考えれば仕
事終わったんじゃね？

聖杯回収したからもう俺この特異点からトンスラしてもいいよね
？

やったね。これでこんな時代とはおさらばだ！テレビもクーラー
もネットもない吉幾三の俺ら東京さ行くだばりの田舎生活も卒業だ。

俺は大自然が溢れる田舎で過ごす生活なんかごめんだ。

そんな生活より近くに行けばコンビニがあり、クーラーが効いてる
部屋で柔らかい絨毯の上でテレビを見て、レンジでチンしたご飯やガ
スコンロなどで調理したご飯が食べたいしふかふかのベッドでネッ
トサーフィンしながらゴロゴロしたいんだよ。

文明の利器って最高ー！

便利で豊かな暮らしはやっぱりやめられないわ。

いやー、それにしても本当に強かったわアイツ。短期決戦じゃなければ負けてたわ。アイツがゲイツリバイブ擬きの力に拘り続けてくれて良かった。おかげでこっちが勝つことが出来た。てかめっちゃ疲れた。早くベッドで横になりたい

「おい、雑種。」

……？気のせいかな？ギルガメツシユの声が今聞こえた気がしたんだけど……

「我を無視するとはいい度胸だな。それともこういった方がいいか？元傍観者よ。」

振り替えるとそこにはすぐキレル方のギルガメツシユがいた。

………どうしよう。すげえ関わりたくない。誰か胃薬くれないかな……

何が悲しくて戦い終わって疲れた後に質の悪いジャイアンの面を見なければならんのだ。せめてジャンヌみたいな綺麗でタイプな女性の方が……へ？

「思うのは勝手だが、程々にしておけ。次はないぞ？」

横を見ると宝物庫から取り出して射出したであろう刀剣が地面に突き刺さっていた。何で考えてることわかるんだよ。エスパーが何かか？

「我を誰だと思っている。貴様の考えてることぐらい手に取るようにわかるわ。」

………千里眼にエア、しかも読心術とかどんだけぶつ壊れスベツ

クなんだよ。インチキスペックもいい加減にしろ！

「貴様に言われたくはないがな。人の身でありながら神のごとき力と視点を持つ貴様からすればこの世界に生きる者らはさぞ滑稽に見えるだろうな。」

「……………やっぱりこっちのギルガメッシュも俺のこと全部わかってるか。まあ、当然と言えば当然か。」

「ふん、大して驚いてないところを見るとこうなることは予め想定していたらしいな。まあそれほど力を持っていながら自分からこの世界に影響を及ぼすようなことをしなかったことについては褒めてやろう。」

「……………褒めてるの？もしかして認めてやる的な感じか？」

「……………でも何かこのパターン前にもあったような……………」

「無論気に入らん点の方が多いがな」

「やっぱり上げて落とすパターンじゃないですか。」

「特に貴様、エルキドゥに止めをさす前に何と言った？」

「……………ヤバイ。まさか聞かれてた？これももしかしなくてもこれ泥人形のくだり聞かれてた？」

「そうだとしたらヤバイのはちよつとどごろじゃない。」

「下手したらここで死ぬ。」

「……………泥人形風情が手間かけさせんなよさつさと死ねって言いまして。本当にすみませんでした。」

「……………」

「ちよつと……………無言は勘弁してくださいよ。無言が一番怖いんです」

から。誰か助けてくれないかな……

「……本来なら紛い物とはいえ我が友を愚弄した貴様にそれ相応の処分を下す所だが、今の貴様は違う我から必要とされてる。今の所は貴様の処遇を保留しといてやろう。」

……………お？これは何とかなるか？

「だが我は貴様を認めた訳ではない。それをよく覚えておくのだな。」

……………別にいいんだけどな……俺ギルガメツシユに認められたくて人生送ってる訳じゃないし。

俺は生き残ればそれでいいから。今回の異変が解決してこの星から脱出する準備が出来たらとつとこんな星おさらばするから。

まあ、それまではお互い持ちつ持たれつの関係で。取り敢えずドクターに報告するか。

《エルキドウの消滅を確認。お手柄だよ深川君、よくやってくれた！これで戦況は大分変わる筈だ！何せ魔獣の総司令官を倒したんだ。これで少なくとも魔獣は統率が取れなくなる。それに聖杯を回収するなんて初めてとは思えないくらいの働きぶりだ！本当によくやってくれた！》

喜んでるとこ悪いけどまだ3女神がいるんだよね。

プラスイシユタル。

ゴルゴーン、エレシユキガル、ケツアルコアトル。

エレシユキガルとケツアルコアトル、イシユタルは協力してもらうのは確定として問題はゴルゴーンだな。

クロノスライドウォッチ擬きを使えば余裕だろうけど
ゴルゴーン倒したらティアマトが復活するんだよね……

俺に取ってこの特異点で一番最悪なのはティアマトが復活し、エレ
シユキガル、イシユタル、ケツアルコアトルが敵に回ることだ。

いくら俺でもこのメンバーを一度に相手するのは無理。

クロノスならいけるかもしれないが、それはあくまで最終手段。さ
て、どうしたものか。

まあ、聖杯回収したからもうそんなこと関係ないけどな！第七特異
点完！アハハハハハ……ん？何この音？地震？……………まさか

。

「…………ふむ。久方ぶりの地上に出てみれば面白い者がおるではない
か。我が子がないのを見ると大方既に殺られたと考えるのが妥当
だな。」

…あ、これ確実に目をつけられたな。勘だけど案外馬鹿にならん。
つーかタイミング悪すぎない？

「そここの人間、貴様は何者だ？この世界の者ではないのはわかる。だ
が何故人の身でありながらそれほどの力を持っている？人間など所
詮は私の行動一つで死ぬ脆弱な生命体で、取るに足らぬ弱者だが貴様
は違う。」

いや、俺もアンタの行動一つで死ぬ人間なんですけどね……

つーかやっぱりコイツら面倒だな。

神様には何でもお見通しって奴？てか初手本気モードか。

まあ戦うにしてもジオウⅡ擬きじゃ火力が足りない。となると厳しいな

コイツには確か石化の魔眼があつたな。後は蛇の口から出される光線とか。

石化の影響を受けないのが大前提。となるともし倒すとしたら対抗策は限られる。

しかも確かコイツ再生機能があつたな。こういう手合いが相手ならそれを上回る火力をぶちこめばいい。

でもまあ今ここで倒すのはなしだな。

殺るなら最低でもイシュタルとケツアルコアトルの協力を得てからではないと。

ティアマトと戦うのにその前に女神共の説得に回ってる時間はない。

仮にそうなった場合その間ティアマトを食い止める役割は必然的に俺になるだろうな。それはいくらなんでも勘弁してほしい。

よし、このままジオウⅡ擬きでやり過ぎすか。

「この世界の人間を皆殺しにする前に貴様から先に消してやろう。貴様、名はなんという？」

「人に名前を訪ねるならまずは自分から名乗ってくださいませんかね……」

「我はティアマト。原初の神にして貴様らを屠る者だ。」

嘘乙。お前のホントの名前はゴルゴーンだろ。

ティアマトはお前みたいなのが奴じゃないし。取り敢えずジオウⅡ擬きで時間稼ぐか。

「俺はギャラージュ・コラージュ・ミラージュ。唯の小者だよ。」

え？何だその名前？つて？馬鹿正直に自分の名前乗るわけないじゃん。

因みにこの名前は秒で考えた。

一方その頃カルデアはケツアルコアトルに苦戦を強いられていた。カルナやアルトリアらが果敢に攻め、キャスター陣営が後方支援に徹するも、ケツアルコアトルにこれといったダメージを与えられずにいた。カルデアらはケツアルコアトルを倒すための決め手に欠けていた。

「ドクター、深川さんは今何をしてるの？出来れば増援が欲しいんだけど。このままじゃ……………」

《彼は今エルキドゥを倒して聖杯を回収した後ティアマトと交戦している。悪いけどしばらくそちらに行けそうにない。》

「ティアマト？」

「…………あの男キングウを倒したのね。で、ティアマトを今相手にしていると。」

すると突然ケツアルコアトルが距離を取り、戦闘の意思がないことを示す。

その様子にマシユは警戒した様子でケツアルコアトルを訪ねる。

「……………どういうつもりですか？」

「キングウが倒された今私がここに留まる理由もないもの。私が今回の作戦に参加したのはあくまでキングウがきっかけ。まあ、あの男が危険であると思ってるのには変わりはないけど。この場は退散するとしましよう。」

そう言つてケツアルコアトルはその場から退散した。

右からは巨大な尻尾による風ぎ払いの後、無数の蛇の口からの光線、地鳴らしで動きを数瞬止めたら衝撃波による攻撃、更に石化の魔眼で動きを止めて魔弾の嵐。

その後尻尾の風ぎ払いの予備動作をフェイントにし、口から光線。それらの未来をジオウⅡ擬きで予知し悉くかわしていく。

「見事なものだな。人間の身でありながら未来を予知出来るとは。その奇怪な鎧のおかげか？」

前言撤回。これやり過ぎしてどうにかなる相手じゃないわ。想像以上に不味い。

このまま持久戦になれば間違いなく負ける。俺としたことが選択を誤るとは。聖杯回収してヤキが回ったかな……

それに何かを抱えながら戦うなんて始めてだからどうしても慎重にならざるをえない。

しかもそれが聖杯ともなれば尚更だ。コイツに奪われたら現時点で勝ち目がなくなる。

エルキドゥが死んだ今コイツはこのままウルクを滅亡させる可能性が高い。

これはもうこの場で殺せるなら殺した方がいいな。

ティアマト復活するかも知れんけどでもこのままじゃね……そう考えるとエルキドゥ殺したのは失敗だったな

もう少し生かしくべきだった。

つかギルガメッシュ何してんの？少しは手伝ってくれませんか

ね……

今ここでエアとか天の鎖使わないでいつ使うんだよ。

宝の持ち腐れするぐらいなら俺に譲ってくれよ……

取り敢えずドクターや藤丸らにこのことを知らせるか。

《立香ちゃんらが今そつちに向かっている。それまでに何とか持ちこたえてくれ!》

「……貴様と戯れるのも少々飽きてきた所だ。次は本気で行こう。」

……今まで本気じゃなかったとか冗談でも笑えないんですが。これ使いたくなかったんだけどな……

でも出し惜しみして勝てる相手じゃないし。

いよいよ俺も腹を括らなければならぬか。

《クロノス》

EX11 数の暴力

仮面ライダークロノス。それは仮面ライダーエグゼイドに出てくる敵側のライダーであり、ラスボスでもある。

変身者は檀正宗。

全ての命は私が管理すると審判者気取ったり、息子をゲーム商品名で呼んだり、いい年して自分で私が世界のルールだと言っちゃ結構ヤバイ奴である。妙齢のおっさんが厨二発言してると言った方がわかりやすいか。

そんなクロノスの強みは何と言っても時間停止にある。

それを実行するための手段であるポーズ。時を止めることが出来る。

因みにポーズ《PAUSE》はゲームで言う一時停止である。

その時間停止からの必殺技がクロノスのメインの戦い方である。

そんな時間停止というどこぞの吸血鬼もビックリな能力を型月世界にて使えばどうなるか。

答えはここから先に明らかとなる。

起動音と共にクロノスライドウォッチ擬きを身体に組み込み仮面ライダークロノス擬きになる。

まずはポーズを発動させ、時間を止める。え？バグヴァイザーツヴァイがないのにどうやってポーズを発動させたか？それは対象に向かつて手を翳すことで時を止めるんだよ。

仮面ライダージオウでタイムジャッカーが時を止める動作を参考にしてくればわかると思う。

ご都合主義ですみません。

でもポーズ出来ないクロノスなんてルールのないカレーみたいなもんだからそこは勘弁してね。

まあ止められる時間のマックスは5分が限界だけど。

因みにポーズを発動できる回数は3回が限度。クロノス擬きの制限時間は30分が限界

時間経てば経つほどスペックが上昇する強みもあるけど

今の俺にコイツ相手に持久戦は愚策の極み

エルキドウとの戦いの後だからスタミナの問題もあるしな。

取り敢えずここで確実にゴルゴーンを殺すために念には念を入れてクリティカルクルセイドを10回ぶち込んどく

後時間の許す限り魔獣も殲滅しとく

そしてポーズが解除される。

「がっ……ふっ……貴様っ……!!」

……クリティカルクルセイド10回入れたのにまだ生きてるとか化物すぎんだろ………いい加減死ねよ。

《………すごい………本当に時間を止めるなんて………あのティアマト神が地に伏している………》

クロノスの前では如何なる奴らも無力それを目の前の蛇女神に思
い知らせる。

「無駄だ………私にはまだ再生機能が………何故だ………何故再生しな
い………」

「止まった時の中で傷を負った奴に再生の道はない。傷を負ったとい
う瞬間のまま永遠に止まり続ける。

お前の再生機能とやらもこれで無意味だ。」

「己………私がおんなところで………！」

「お前に最早生存価値はない。今ここで引導を渡してやる。」

止めにクリティカルクルセイドをぶちこむ。するとゴルゴーンは
怨嗟の言葉を吐きながら消滅した。

何か覚えてろ、このゴルゴーンは貴様を忘れないみたいなこと言っ
てたな。余りのもうるさいからから魔力で作ったタバコの吸殻を鼻
にぶちこんだら悶えた後すげえ睨まれた。

いやー、やっぱりクロノスは強いわ！擬きだけど。

一回やってみたかったんだよね。檀正宗みたいにカツコいい台詞
吐きながら止めさすの。

こんな力持ってたらいいい年して自分こそが世界のルールだと厨二
くさいこと宣うのもわかるよ。現に俺もイキりまくったし。

すまんねゴルゴーン。あんたの出番はもうないよ？

お疲れ様です！

え？調子に乗りすぎ？いや、だってあの化物を一方的にボコった時の優越感半端ないんだよ。時間停止だよ？

めっちゃチートだよ？実際使ってわかったけどこれ強すぎだわ。こんなんゲーティアも余裕で瞬殺出来るんじゃない？

時間停止か……俺前からこの力使ってみたかったんだよね。色んな意味で。まあでも使うのは戦闘の時だけにしよう。

もう一つの方で使うとバレたら女性陣からゴミを見る目で終始見られそう。

え？へタレ？しようがないだろ。古来より色事に現を抜かしすぎると破滅するってどっかの人も言ってたし。

何よりやるなら出来る限り合意を得ないと。意思ある人間相手に無理矢理は極力ダメ。せめて洗脳か催眠かけてからだな。

戦いの捕虜？……それならいんじゃない？

戦場で女性が捕らえられるということは大体そういうことに使われるからね。薄い本的な展開になる。

あー、そう考えると俺牛若丸の苗床墮ち防いだことになるのかな？まあ、牛若丸なんて味方にいようがいまいがそこまでさして戦局に影響はないからね。だって星3だし。

敵に出るとめっちゃうざいけど。何なのあの毎ターン宝具をバカスカ撃ってくるのか。しかもバーサーカー。

あれ、俺マジで殺意湧いたわ。敵に出た時の方が強いとかめっちゃ腹立つんだけど

話を戻すけどこの後どうするかね。俺としては今すぐこの特異点からトンスラしたい。だって聖杯回収したし。

でもこの後ティアマト復活するんだよね……

アレと戦うのはちょっと勘弁して欲しいわ……だって面倒くさいし。

一億のラフムもセットでついて来るんだよ？

もう嫌になるよ。特異点修復がこんなに大変とは思ってなかった。

《……………ゴルゴーンの消滅を確認。……………もはや何でもありだね君は。やっぱり君1人で何とかなるんじゃないかな……………》

止めるロマン。その言葉藤丸らに効く。こんなポツと出の俺が過度な称賛浴びてみる。

古参のメンバーが俺らの今までの努力は何だったんだ的な感じになるだろ。それは不味い。職員らが一丸となって人理を救うという使命のもと死に物狂いで掴み取った未来が原作なんだぞ。

これで何人かが怠けてみる。その未来が実現しないかもしれない。モチベーションは大事。はつきりわかんだね。

カルデアで内部分裂的なことが起きたら絶対詰むよ。てか現に多分職員の何人かは怠けるだろうな。仮に怠けはしなくても以前の緊張感はなくなるのは確実。

その怠慢がミスを引き起こし、ゆくゆくは深刻な事態に繋がるんだからさ。

それにカルデアには俺を元の世界に方法を模索するという重要な役割がある。それまで潰れてもらっては困る

ああ、帰ったら職員のモチベの上昇させないと。

………
こんなこと本来なら俺がやるべきことじゃないんだけどな

………
まあそれは帰ったら考えるか。今はいずれ来るであろう大量のラフムを何とかしないと……

その次はティアマト、後キアラの動向の監視、そして

打倒ティアマトのための3女神の協力の取り付け、キングハサンの協力の交渉、聖杯の死守。

……もうやだ。俺早くお家帰りたい。助けてドラえもん。どこでもドアで俺の宇宙船まで連れてってよ。

ああ、前世でカービイの画像を見てほっこりしてた頃が懐かしい。誰か俺に胃薬くれ……

《………おかしい。その時代の危機は去った筈だ。何故まだ第7特異点は存在してるんだ!》

ティアマトが復活したからだよ。まあこれでマーリンは一回消滅しただろうな。

このまま行けば大量のラフムが襲来する。まあ途中大勢の人間が死ぬだろうけどそこはしゃーないってことで。

人理を救うための礎になって下さい的な?

ん? 助けないのか? やだよ。誰がやるかそんなもん。

役にも立たない人間助けてなんのメリットあんだよ。

そんなん労力と時間の無駄だろ。助けてもよくて肉壁だな。

心が痛まないのかって? いや、全然?

あれだよ。よくニュースとかでどこどこでテロが起きて何人死んだとかあるだろ? それを見ても大概の人は憐れみこそすれど本気で心は痛まないのと同じだよ。

ん? あれ? あの黒い物体って……ラフム来るの早くね?

え？嘘？もう来たの？こつち今エルキドウ、ゴルゴーンの二連戦で疲れてるんだけど。

……ぎつと見ても最低でも数千はいるな。これクロノスじや厳しいな。対処出来なくはないけど、効率が悪い。

となると使うのはあれになるな。でもアレは切り札としては2回しか使えないからな……俺としては極力使いたくない。

《おい、キアラ。聞こえたら返事しろ。》

《マスター？どうしましたか？》

《もうすぐそつちにゴキブリ以上に醜悪な化物が襲来する。そしたらお前の宝具を使え。一応使う際には俺に一言入れろ。いいな？》

《わかりました。マスターはどうするのですか？》

《俺はコイツらをある程度相手してから行く。》

《エボルブラックホール》

よし、取り敢えず初手ブラックホールかますか。

魔力吸収のお時間じゃー！

「ドクター、深川さんは？」

《彼なら今1人で大量のラフムを捌いている。今地表に出ているラフムは全てで10万その半数が彼の元にいる。

だから彼の元にヘラクレスらを向かわせた。

彼はエルキドゥから回収した聖杯を持っている。

彼がやられるなんてことはそうそうないだろうが、万が一という場合もある。聖杯を奪われることだけは何としてでも阻止しなければならぬ。

それに他のラフムはそれぞれ違う方向に向かっていった。

後彼から伝言だ。あんまり長くは持たないから早く女神の協力を取り付けて来いとのこと。》

藤丸らはマーリンが消滅した後急ぎギルガメッシュ（術）にこれまでの事の詳細を伝え、次の指示を受けていた。それは3女神の協力の取り付けである。

ティアマトと言う強大な敵が現れた今出来る限り味方は多い方がよいとのこと。

「先輩、ギルガメッシュ王から言われたことを素早くこなしましょう。それが深川さんの助けに繋がる筈です。」

あれからどれだけ経った？もうどれだけラフムを捌いたかわからない。千を越えた辺りから数えるのをやめた。多分殺した数は万に届いてるんじゃない？

それに初手ブラックホールをかましたはいいものの敵の数が減っている気がしない。

エボルブラックホールフォーム擬きの時間が切れそうになったらクロノス擬きの時間停止を使って束の間の休息。そして次はビルドジーニアス擬きで駆逐する。

時間が切れそうになったらエボルブラックホールフォーム擬き。そのルールだ。

使ったライドウォッチ擬きは俺の体内に残る。これがエボルブラックホールフォームライドウォッチ擬きだとする。

で、エボルブラックホールフォーム擬きの制限時間は30分。25分が経過した辺りにクロノスライドウォッチ擬きを使う。

で、クロノス擬きの制限時間も30分。同じく25分経過したら今度はビルドジーニアスライドウォッチ擬きを使う。

これは1時間50分経過したら体内にあるエボルブラックホールフォームライドウォッチ擬きを取り出して再び起動させた後、身体に組み込む。

このようにAというフォームから制限時間が経過する前に新しいフォームであるBになり、その状態でAのフォームに必要なライドウォッチ擬きを身体から取り出して再び起動させ、身体に組み込むことで、また一から使えるという仕組みだ。俺はこれを応用している。

話を戻すが今すぐにも倒れて楽になりたいけれど倒れたら駄目なことがわかってるから一切気が抜けない。

何せ殺されるでもなく、喰われるでもない。作り替えられる。本当におぞましい。

いくらチートライダーのスペックがあるとは言え油断は出来ない。もう体力の限界を越えてるが、クロノスのポーズで止められる時間に何とか休憩することでそれを防いでる感じだ。

しかも心なしか俺の所へ来るラフムが異常に多い。おそらく俺が聖杯を持つてるからだろう。

取り敢えずドクターには藤丸にやるべきことを伝えてある。アイツが3女神の協力を取り付け、増援に来るまでの辛抱だ。ああ、本当に鬱だわ。

もう少し時間があれば色々準備出来ただけだな……

具体的にはラフムに作り替えられずに普通に殺された人の死体を回収して、俺の武器にしようと思ったがそれもパーだよ。

俺、今回の異変で無事生き残ったら胸が大きい綺麗な嫁さん見つけて一緒に平穏な暮らしするんだ。アハハハハハ……

EX12 力こそ全て

死体。死体。死体。深川の周りには大量のラフムの死体が転がっていた。

今や彼はただラフムを殺す幽鬼と化し、襲いかかる敵を次々と捌いていた。ボロボロの身体に鞭を打ちつつラフムを駆逐していく。

聖杯を奪われたら終わる。ティアマトは復活したが覚醒はしていない。

だからここそこまでラフム自分を狙うのだろう。全てはティアマトに聖杯を渡すために。

原作のようにティアマトのパワーアップをさせるつもりはない。そう考えることすら億劫になるほど彼は疲弊しきっていた。

彼が今なっているエボルブラックホールフォーム擬きのアーマーには至る所に傷があり、所々破損している箇所もある。

ブラックホールで大量のラフムを葬り、衝撃波を発生させて迫り来るラフムを殲滅し、それで討ち漏らした敵は

虚空にて指先で円を描いた後バスケツトボールサイズのブラックホールを生み出し、それをラフムが密集してる箇所につつける。

だが、いくらエボルブラックホールフォーム（擬き）がチートでも本人の体力まではどうこうすることは出来ない。おまけに数が無駄に多い。

そのため捌ききれず、ラフムから少くない攻撃を受けていた。

彼は最早体力の限界をとうに越えており、気力だけでどうにかしている状態だった。

彼が1人で大量のラフムの相手を引き受けたのには理由がある。

1つはラフムがそこまで強くはないこと。彼は自分の力ならばどうにか出来ると思っていた。

2つは彼は自分以外信用をしていない。

彼はカルデアはおろか自分のサーヴァントを信用していない。

……キアラならそれは妥当というツツコミはこの際置いておく。

話を戻すが、彼はこの世界がいかに残酷か知っている。自分が元いた世界よりも裏切りや残虐、おぞましいことが普通に蔓延る世界。

そんな世界で心休まることなどほとんどない。

転生した当初は fate の世界に産まれたことに対して絶望しかなかった。

彼はそのことに気づいてから生き残るのに精一杯だった。

両親の愛情だとか青春だとかそんなものを謳歌している暇はない。この世界では人の命は驚く程軽い。

凄惨なことが起きるのが当たり前前の世界。

何かしらのきっかけで聖杯戦争に巻き込まれる可能性も0ではない。

そんな世界で普通に生きてる者らを見て彼は思った。

「自分だけでも生き残る。最後に笑うのは俺だ。せいぜい今の内に束の間の幸せを味わっているがいい」

そして生き残るにあたって彼は思考の末1つの結論にたどり着いた。

「取り敢えず人は信用しない。裏切りとか面倒だし。」

全員敵だと想定する。それぐらい想定しなければ普通に死ぬ。自分には力を持つてゐるが死ぬ可能性はある。なら死なないために準備しなければ」

以上のことから彼は人を信用しない。

信用するのは金や力、利害関係といったもの。

そんな彼からすれば誰かに背中を預けるなんてとても出来ることではなかった。だからヘラクレスらの増援も断った。

見誤っていたのはその数。ラフムが自分の想定していたよりも襲来したことにより彼は苦戦を余儀なくされた。

そして、自分に襲いかかる最後のラフムを葬り去った後、エボルブラックホールフォーム擬きが解除され、彼はその場に倒れ伏せた。

《……………深川君の周辺にいた約5万のラフムの反応の消失を確認。聖杯も死守することが出来た。本当によくやってくれた。お疲れ様。》

「……………ハーツ……………ハーツ……………ハ―」

彼が返事をする事が出来ないレベルまで体力を消耗してるのを見たロマンは深川に今は少しでも休むように伝える。

「藤……………ま……………る……………の状……………きよ……………う……………は……………?」

《彼女は先ほどイシユタルの説得に成功した。次はケツアルコアトルの説得に向かう所だ。》

「……………そ……………うか……………」

《今は何故かラフムの攻撃が途絶えている。恐らく君が大量のラフムを殲滅したことに警戒しているんだろう。ティアマトは復活したけど今のところ大きな動きはない。》

《ジーニアス》

そして暫くして呼吸をある程度整えた深川はビルドジーニアス擬きになりドクターにあることを告げる。

「ロマン、聖杯だけそつちへ転送出来ないか？」

《……それは厳しいね。むしろ出来るならこちらから薦めてるよ。》

「今回は何とか守ることが出来たけどティアマトに聖杯が渡ったらほぼ詰む。」

そうなった場合勝てる確率は天文学的なもんになる。

今このメソポタミアに存在する女神らの力を以てしても勝てない。そんなレベルの奴なんだよ。」

《……それは君が言っていた前回この異変を経験したことがあるというものから得た知識かい？》

「そうだ、勝てたのは奇跡に等しい。あれと無策で真つ向から殺りあうなんて馬鹿のやることだ。前は何かかなったから今回も大丈夫なんてことはないからな。」

《君の時間停止を使えば倒せるんじゃないのか？》

「……………」

……多分倒せるだろうけどそれは駄目だろ。俺に何でもおんぶに抱っこという状況は流石に勘弁してくれ。

もちろん自分の身が危なくなったら使うけど。

この世界のことはこの世界の住人が解決してくれよ。

《……もしティアマトに聖杯が渡った場合他にどんなことが起きる？》

「今の海、あれはティアマト神の権能そのもの。触れたら最後取り込まれる。ラフム化すると言ったらわかるか？で、その海が津波となりメソポタミアを襲う。」

ノアの洪水なんて可愛く見えるレベルの惨劇を引き起こす。で、ティアマトが完全覚醒したらウルク目掛けて真っ直ぐ進む。1日もあればウルクに着くだろうな。」

《因みに前回はその覚醒したティアマトをどうやって倒したんだ？》

……これ言って大丈夫な奴か？まあ情報の共有は早い方がいいか

「……ティアマトを冥界に落として3女神ら協力のもと、フルボツコにした。」

《……聞くと頭が痛くなること間違いなしな上に君の言うとおりそれが実現したら確かに詰む。このことは立香ちゃんらは知ってるのかい？》

「知らない筈だ。言っていないからな。今のアイツが知る必要はない。女神共の説得に専念してもらわないと。」

もしこのことがアイツらの耳に入ってみろ。要らん負担になって十分な力を発揮出来ない。……なんだよ？」

言うわけないだろ。今話してることを知ってメンタルブレイクでもされたらたまったもんじゃない。アイツにはまだ壊れてもらったら困る。少なくともこの異変が終わるまでは正気でいてくれ。俺が

この星からトンズラする頃にはいくらでも壊れてくれていいんで。

《……意外にも優しい所もあるんだな君は。君が自己保身を何よりも優先するタイプの人間であることは知ってたけど君にも人を思いやる心があるんだね。》

「……それデイスってるよね？褒めてるんじゃないやなくて貶めてるよね？俺は優しいに決まってるんだろ。どこにでもいる善良な一般市民だ。」

《………善良な一般市民？それはちよつと無理があるんじゃないかな………》

「おい、アンタの所にブラックホールかますぞ。」

《ハイハイ、茶番はそこまでだ。ロマンも深川君もそのやり取りはカルドアに帰ったらいくらでもしてくれ。

取り敢えず深川君はウルクへ向かってくれるかな？

あれだけ大量のラフムを倒したとは言え今の君は体力的にも衰弱している。そこを襲われたらいくら君の能力があれども危険だ。取り敢えずそこから移動してほしい。》

あれから俺はビルドジャーニアス擬きのフェニックスとホークの成分を使ってウルクまで飛翔した。途中キアラを回収したけど。

で、今ギルガメッシュ（術）に報告している所だ。

「ご苦労だったな深川よ。単身エルキドゥだけでなくゴルゴーンを撃破し、五万のラフムを殲滅したその手腕は褒めてやろう。貴様の健闘のおかげでラフムの襲来は局所的なものこそあれどなりを潜めつつある。ティアマトも今は大きな動きがない。よって今はゆつくり休むが良い。」

「ありがとうございます。」

あー、これでやつと寝れる。布団が俺を待っている。

いざ、アヴァロンへ！

「それと貴様に1つ忠告してやろう。何、貴様の働きぶりに少し驚いてるのでな。」

「……何でしょう？」

……忠告？何だろう。正直心当たりがない。

「貴様、今のままだと破滅するぞ。」

「……………」

……………はい？

「貴様のその在り方だ。自己保身に走ることは別にいい。そのような人間は往々にしているからな。問題はそこではない。」

「……………」

え？何か急に語り出したんだけど。これ説教コース？

褒美が説教とか誰得だよ。俺Mじゃないんだけど……

「貴様は基本この世界の英霊は自身の駒としか見ていない。恐らく貴様のその力が原因だろう。自覚があるかは知らんがその力もあつて

か貴様は一部を除いて英霊を見下している。貴様のエルキドゥに対しての泥人形発言がその証左だ。

貴様がまともに向き合うのは英霊の中でも特に強大な力を誇る者らだけだ。我や違う我、花の魔術師、女神共等。断言する。

英霊に対しての認識等を改めない限り貴様には誰も応えてくれず、自分が危機に陥った時破滅するぞ。仮に応えてくれる者がいてもその者は真つ当な者ではない。それは貴様自身心当たりがあるろう?」

「……………」

「忠告は以上だ。貴様自身のその在り方について今一度見直してみるがいい。」

……………俺が破滅する?この力を持つてるのにか?

……………あり得ないと言いたい所だが、この世に絶対などない。

考えられるとすれば俺がティアマトかゲーティア、若しくはキアラとの戦いか。この三人なら確かにあり得なくもない。はたまた抑止かカルデアによるものか。

なら、そうならないように準備をすればいい話だ。

英霊等の認識を改めるとかいつてるが、改めて何になる。

改めたら上の奴らを打倒出来るのか?無理だろうが。

せめてグラウンドになってからじゃないと話にならんわ。

アイツらは確かに人生経験はあるかもしれんが、力は俺からすればゴミみたいなもんだ。中には脅威な者もいるが、大半はカスだ。

俺に文句あるなら俺以上の力を示してから言えっての。

投影?呪術?縮地?魔眼?エクスカリバー?鬼の力?ゴミだろそんなもん。

せめてブラックホール起こせるようになってから出直してどうぞ。

この世界は力が物を言う。力がなければ何も成せないし、ましてや生き残ることも出来ない。

力が重要な要素である以上それ以外はさほど重要ではない。

人柄がどんなに良くても力がなければ敵と遭遇すればあっさり死ぬ。stay nightの衛宮みたいに。

だが、力があればその確率は減る。だから生き残るためにこの力を以て準備する。

だから英霊の認識を改める必要などない。俺にははキアラという性格はクソだしヤバい奴だし信用とかしてないけど性能面での当たりがあるからまだいいが、これが佐々木小次郎とか清姫とか来てみる。☆3や☆1風情に何が出来るんだよ。

☆3以下の産廃英霊は帰ってどうぞ。まあ俺からすれば☆4や☆5のほとんどはクソみたいなものだけだ。

まあ取り敢えず今は早くベッドで寝よう。

そして、俺が目を覚ます頃にはとんでもないことが起きていた。

《……聞いてくれ。立香ちゃんが重篤状態になった。》

………は？

EX13 コミュ力は意外と重要

……今コイツ何て言った？藤丸が重篤？アイツには確かカルナやら玉藻やらがついてた筈だろ。

何してんだよ無能共が。マスターくらい守れよお前ら。仮にも☆5なんだからそれ相応の仕事しろよ。

「……………何でそうなった？」

《イシユタルの説得の後、大量のラフムが彼女らを急襲。敵のリーダーはケツアルコアトル。彼女は何故か肌が黒かった。おそらく君のいうラフム化したと思われる。カルナ達が何とか黒化したケツアルコアトルそ捌いたが、立香ちゃんはラフムの攻撃を受けて今は意識を失ってる》

「具体的にはどんな傷なんだ？切り傷とか貫かれたとかあるだろ？」

《腹の辺りを貫かれた。幸い急所は外れたが出血量がかなり多く、重篤状態だ。》

……………ホントツツツト何してんだよ！無能共が！

ふざけんなよ！アイツが死んだら人類最後のマスターという重責が俺1人にかかるだろうが！冗談じゃない！

そんなもんは勘弁だ。ああ、もう、ホントイライラする。何でこんなことになるんだよ！仕事しろよクソ共が！マシユはお前シールダーだろうが！その盾は飾りじゃないだろうが！かーっ！使えねえ！

所詮は試験管ベビーか。柄にもなくその力を認めてた俺が甘かったわ。

え？ジオウII擬きの時間巻き戻しを使えばいい？無理だよ。ジオウII擬きが出るのは未来予知であって、巻き戻しは出来ない。

つかケツアルコアトルの奴ケイオスタイドに飲み込まれてん
じゃねーか!

F O C K You! お前ふざけんなよ!?

何やかましてんだよあの脳筋! あの女神本当ふざけんな!

これだから脳味噌が筋肉で出来てるようなゴリラ女神は嫌なんだ
よ! 敵に回るくらいならさっさと自害してろよ……

ああ! ホントイライラする! 何でこうなるんだよ……

《君の力で何とか治せないかい?》

「……厳しいな。俺の能力はほぼ戦闘向きのものばかりだからな。

……藤丸は後どれぐらい持つ?」

《……今玉藻の前らが治療を施して何とか首の皮一枚繋いでる状態
だ。おそらく持って3日だろうね。それ以降は……》

「……2日で決着をつける。いつでも藤丸の治療が出来るように準備
をしてくれ。アイツを死なせる訳にはいかない。」

《……本当にすまない。君ばかりに重い仕事を任せる羽目になっ
てしまった。》

「ホントだよ。帰ったらアンタの髪の毛全部むしってやるからな。」

……これはもう手段がどうか言ってらんなくなつたな。最速で
エレシユキガルを説得し、ティアマトを倒す。

藤丸には引き続き人類の命運を俺の代わりに背負うスケープゴード

トになつてもらうという重要な役割がある。ここで死んでもらつては困る。

それにアイツが死んだら誰が世界を救うんだよ

俺？無理だろ。俺がやつたらフオウ君覚醒不可避だから却下。

大体フオウ君もフオウ君なんだよ。なーにが美しいもん見たいだよ。自分は何もせずボケつと眺めてるだけで美しいもん何か見られる訳ないだろ。つーかあれだろ？

自分の見たいもんが見られなかったら覚醒してどうせ人類滅ぼすんだろ？人類やつぱりクソだわーって。

クソなのは否定しないけどさ、要は自分の見たいもんがみられないような気に入らない結末だったら滅ぼすというクソ野郎特有の思考じゃん。

まあビーストだし。思考レベルも獣と同じ位でも仕方ないか。

しかもマーリン死すべしとか言ってるけどお前も大概だからな？それどころかマーリンより何倍も質が悪い。

つーか自分は何もしないくせに自分好みの結末じゃなかったらキレるとかやってることマジクレーマーだわ。

そんな文句あるなら最初からお前がやればよくね？って感じたのは俺だけか？自分は何もしないくせに文句だけは一丁前に言うとか一番腹立つんだけど。

こちらからお前を満足させるために人生送ってないんだよ。

害獣はさっさと死んでね！すぐでいいよ！って言いたくなる位フオウ君ってクソだからね。

まあ話を戻すけど以上のことから藤丸はまだ死んでもらつたら困る。

今更ながらなんでこんな原作ブレイクしまくるんだよ。

まあ俺が原因だけどき。

ああ、やつぱりカルデアに協力するんじゃないかった。

……前世の父さんと母さん今頃何してるかな。

「じゃあ作戦を説明します。取り敢えず後1人の女神の説得に向かいます。途中悪堕ちしたケツアルコアトルが襲来するだろうがそこは適度に相手して下さい。

で、最後の女神の説得が無理なら殺します。これで敵に回られたりしたらたまったもんじゃないですから。

だから2つのチームに別れます。

1つは最後の女神を説得に向かうチーム。もう1人はここで敵の攻勢を食い止めるチーム。説得に回るチームには俺やイシユタルさん、カルナさん。攻勢を食い止めるチームはそれ以外でお願いします。一応念のために藤丸にはアルトリアさんとギルガメッシュユさん、玉藻の前さん、弁慶さんらが護衛として着いてもらってます。」

「編成が偏りすぎじゃないかしら？敵を止めるために多くの人員を割くのはわかるけど説得に向かうメンバーをもう少し増やした方がいいと思うわよ。」

「確かにその意見もわかりますが、今回ケツアルコアトルが敵に回ったからただでさえ強い神霊に加えて大量のラフムを相手にしなければ

ばなりません。そのことを考えれば妥当だと思います。イシユタルさんもそれでよろしいですか？」

「……まあいいわ。ならさっさと行きましょう。」

つー訳でビルドジャーニアスのフェニックスとホークで高速移動してなんやかんやで冥界についた訳だが、エレシユキガルをどうする？ 説得するのは当然としてもしそれに応じない場合は殺すか？

ああ、マインドストーン擬きがあれば簡単に洗脳出来ただけだな……ガントレットと一緒に破壊したからな……ギルガメツシユ（術）の前で

まあ、無い物ねだりしてもしょうがない。途中イシユタルが値踏みするような視線を向けてきたけどもう慣れたからスルー。

まあ、神様だから俺のことは大体分かるんだろうな……

極力イシユタルの姿は視界に入れたくない。

だってイシユタルだし。後露出がヤバい上スタイルも良いから多分凝視する。で、そしたら何勝手にジロジロ見てんだとか因縁つけられてボコられそう。

……カルデアに帰ったら発散しよう。

取り敢えずエレシユキガルを力で振じ伏せたら後は言うこと聞かせればいい。逆らうなら脳か霊基に魔力の爆弾仕込むという手もあるしな。

まあどうしても協力する気がないのなら殺すけど

……とそうこうしてる内にそれらしき人物発見。
さっさと済ませるか。

「貴方がこの女神ですね？」

「……やはり来たのね。用件はわかってるわ。母さんが復活したのでしよう？それを撃退するための協力の要請。そんな所かしら？」

「……………流石にこちらの事情は把握してますか。なら話は早い。早速――」

「断るのだけわ。」

「……………今何と？」

「断ると言ったのよ。聞こえなかったのかしら？」

「……………失礼ですが状況をわかっておいでですか？」

「ええ、わかってるのだけわ。母さんが復活し、それに伴いラフムの大量発生、ケツアルコアトルも細胞強制の影響を受け敵に寝返った。そして貴方方のマスターの内1人の重傷。こんな所でしょう？」

「なら、何故――」

「だって貴方、本気で私を説得しようとしてないじゃない。」

「……………」

「私ね、これでも女神だからわかるのよ。貴方がどういう考えを持ってここに居るのか。貴方、私を説得するということには嘘はないで

しようけど本命は私を排除することでしょう?」

「……」

「大方貴方の中では説得できればラッキー、出来なければ敵になる前に消せばいいとも思ってるのでしょうか?」

その考え自体をどうこう言うつもりはないけれど、貴方には私を何としてでも味方に引き入れるために説得しようというという必死さを感じられないのかわ。」

「……どうしても駄目でしょうか?」

「貴方ではない彼女なら説得に応じたでしょうけどね。でも貴方のそのー」

「分かりました。ではー」

《クロノス》

「死んで下さい。」

エレシユキガルは落胆の色を隠せないでいた。それは彼が自身の見立てた通りの行動をしたからだ。

……やはりこうなるのね。これでもし彼なりに必死に懇願したら

力を貸してあげなくもなかったのだけれど。

でもそれも過ぎたこと。おそらく今の戦いで彼は勝利を修めるのだろう。ゴルゴーンを一方的に蹂躪した時のように。

「大義のための犠牲となって下さい。」

……彼は最早手遅れの領域に来ているわね。多分彼にはもう誰の言葉も届かない。

メソポタミアの様子を見たときに初めて彼のことを知った。初めて見たときは驚愕したけど気になって監視していく内に彼は異質な所はあれどただの臆病な人間だとわかった。

力を持つていながらもその心の根底にあるのは恐怖と死にたくないという純粹な願い。

でも彼はこのままいくと破滅する。私はこれまで多くのものを見てきた。その中で彼のように誰も人を信じず力のみを信じてる人はもれなく破滅してきた。

「貴方、今のままだっ」

私はそのまま言葉を発することはなかった
彼が虚空に手を翳したのだから。

ホント、どいつもこいつも何で俺の思い通りに動かないかね……大

人しく協力してればいいものを……

まあ、想定内の範囲だ。俺は藤丸じゃないからこうなることは予め折り込み済みだし。ケイオスタイド堕ちする前に処分しとこう。

取り敢えずクリティカルクルセイドを5回入れとくか。

「生憎と私は貴女と不毛な問答をするつもりはない。時間がないので。」

そしてポーズが解除する。

お、消滅するな。ん？……何か言おうとしてる。

……さっさと死んでくれないかな……

取り敢えず魔弾をしこたまぶちこんどくか。全く女神というものはどいつもこいつもしぶとい。

さて、ティアマトを消さないとな。

その様子を冷めた目で見ているイシユタルに俺は気付くことはなかった。

(やっぱりこうなるのね……)

それが深川という男に対する私の感想だ。

エレシユキガルは最後まで彼のことを案じて忠告しようとしたが、彼はそれに構わず止めをさした。

彼ほど質の悪い人間を私は見たことがない。力はそこらの神をも優に越えていながらその精神は小心者。

力を持った小物ほど面倒なものはない。力と精神が釣り合っていない輩は総じてろくな未来を迎えないし。

目の前の男はおそらく力こそが全てというタイプの思考の持ち主だろう。おまけに誰も信じていない。だが、言ってることはなまじ間違っていないために質が悪い。

確かに力は何をする上でも必ず必要だし、その重要性もわかる。私ら神々だって最後には力が物を言う世界。

でも、時には力以外の要素が運命を左右することもある。

だから、一応忠告はしておく。この男は見ていて危なかつしいですもの。

「……貴方もう少し周りの意見に耳を傾けた方が良いわよ？」

「……今は私の在り方より事態の解決をする方が急務です。その後ならいくらでも忠告なり受付ますので。」

……これは駄目ね。多分今更私がどうこう言ってもコイツは変わらない。藤丸と比べて可愛げがないけどまあいいわ。

今は母さんをどうするか考えましょう。

EX14 狂気の沙汰

エレシユキガルを抹殺した深川はティアマトを消すためにペルシア湾に向かっていた。

その道中深川はティアマトを倒す算段を立てていた。

ー っかどうするかね……一応策としてはクロノス擬きのポーズで5分時間を止める。その間ひたすらクリティカルクルセイドを撃ちまくるといふ脳筋極まる作戦はあるが、もしポーズが通用しない場合はどうする？

ハイパームテキ擬きを使うしかない。一応???もあるが、これは本当に不味い時だ。

エボルブラックホールフォームは短期戦向きだしな。

ティアマトを冥界に落とす作戦は使えない。俺がエレシユキガルを殺したからね。おまけにラフムも相手しなければならん。

本当に面倒だな。魔力でバハムートやリヴァイアサンは作れなくもないが、昇華を使わないとなるとどうしてもオリジナルと比べたらスペックが落ちる。

あ、FFの奴ね。因みに俺FFに関しては俄だから。ラスボスと主人公と幻獣くらいしか知らん。セフィロスとかスコールとかネオエクスデスとか。

数に対抗するには数が一番だが、生憎こちらにそんな準備する期間はない。こうしてる間にも藤丸が少しずつ死に近づいてるんだから。早くカルデアに連れ帰るためにもティアマトを速攻で消さないと。

よし、取り敢えず大量のラフムは魔力で作ったバハムート5匹に頑張ってもらおう。

幸い魔力量は山ほどある。かと言って今ここで全部使うようなことはしないけど。

ティアマトは取り敢えずあの初期形態は秒で殺す。それで終わればいいが、問題はあの本体が復活した場合。

聖杯は俺の手にあるため、原作のような復活はしないが、既に原作ブレイクしてる今、何かしらのきっかけで

復活してもおかしくない。

そうなった場合、上記の作戦が通用しないもしくはクロノス擬きのポーズをフルに使っても殺せない事態に陥った場合、他にもう1つの作戦を実行することとなる。

それは敢えてティアマトに食われる。え？狂ってる？

うん、自分でもそう思う。まずは適度にやられる。

で、そこで敢えてティアマトに捕縛される。

で、何とかティアマトの体内に侵入する。

本命はここからだ。何、方法は至ってシンプル。

体内から攻撃しまくる。……………今絶対何言ってるんだコイツと思つたらろ？

わかってるよ。自分でもちよつとこれはどうかと思う。

下手したらそのまま取り込まれるからね。

でも、しょうがない。だって俺策士みたいなタイプじゃないから。諸葛亮みたいにホイホイ画期的な策なんて浮かばないよ。

それに生半可なやり方で勝てる相手じゃない。相手はビースト。こつちも取れる手段は取る。

……………昇華や??のライドウオツチ擬きを使ってないというのに何言ってるの?というツツコミは無しでお願いします。そこら辺は自分でもわかってるんで。

話を戻すけどティアマトだって生物なんだ。首を落とせば死ぬし、

心臓を潰せば死ぬ。まああれを生物とっていいかどうかは疑問だけど。

当然血液も存在する。人間にしろ動物にしろ血液ってのは結構重要な働きをする。ティアマトにも血液はある。

………あるよね？

その血液に不純物が混ざれば身体に異常をきたすし血液がなくなればミイラみたいになる。

俺が今回ティアマトの体内に入って殺せるであろう方法は3つ。1つは心臓を潰す。

まあ、正直これが一番早い。けどそれだけだともし心臓を潰しても死なない場合不味いから他のこともやる。

そもそもティアマトはこの世界で生きてる生命体じゃ殺せないんだから必然的に異世界人である俺が殺るしかないという地獄が待ってる訳だ。

だから俺が今回体を張って殺るしかないんだけどね。

で、2つ目だが、体内からブラックホールフィンニッシュをかます。流石に体内からブラックホール撃たれて生きてる奴なんていないだろう。

3つ目はめちやくちや面倒なんだよね……

その方法はティアマトの体内にある血液全部抜く。

方法としてはエボルブラックホールフォーム擬きで極小のブラックホール可能な限りを血中に紛れ込ませる。それを延々と繰り返す。

但しこれは効果が現れるまでめちやくちや時間がかかるため、その間にウルクを滅ぼされでもしたらアウト。

だから極力体内にいる俺が内臓破壊をすることで注意を引きつつ、それと並行して血抜きを行う。

まあ大前提として俺が力で殺そうとしたら生物が存在しない空間

に連れていく方法を取らなきゃいけないんだけどな。

まあそれはエボルブラックホールフォーム擬きの亜空間を作る能力で何とかするか。

因みにオリジナルでは地面に触れただけで発動可能。

詳しいことは仮面ライダービルド38話を見てね。

え？地面はケイオスタイドまみれなのにそれは発動出来ないだろうって？それはポーズの時みたいに空中に手を翳すんだ。

まあそうなるなら必然的にティアマトとサシで戦わないといけない訳だが。

難易度ハードなんてレベルを最早越えてるが、贅沢言ってるな
い。

取り敢えずこれからの流れを纏めると、

初期形態フルボッコ

←
それで終わればよし、もし覚醒したらクロノス擬きのポーズでフルボッコ

←
それで倒せない場合は敢えてティアマトに食われるもしくは何らかの方法で体内に侵入を試みる

←
侵入して、ティアマトの心臓を潰す

←

それで死ななかつたら体内からブラックホールフィニッシュ

←
それも駄目なら内臓破壊で俺に注意を引きつつ、ティアマトの血液全部抜く

うん、これでいこう。

つー訳でそのことを要約してドクターに伝える。

《正気か!? 深川君! 君自分で何言ってるかわかっているのかい!?!》

わかっているつーの。でもそれしか思い付かないんだからしゃーないやろ。

《体内に侵入するということは君が消化されるもしくは取り込まれる可能性があるということだぞ?! そんなことになればそれはもう死ぬことより辛い凄惨なことになる! 何せ生きながら消化されるんだ。その辛さは想像を絶する!》

俺だってこんなことやりたくないよ。出来れば高みの見物と行きたいよ? でも藤丸このまま行けば死ぬじゃん。時間ないじゃん。無論俺としても長居をするつもりはない。体内に入って速攻ブラックホールかましてトンスラするわ。

《……わかった。君がそこまで言うなら君の意見を尊重する。でも危ないとわかったら直ぐ退散すること。立香ちゃんも確かに大切だけど君も僕らの大切な仲間なんだから。いいね?》

………今ケツアルコアトルの相手をしているチームはどうなっている?

《現在何とか持ちこたえてる。でも大量のラフムらのせいで徐々に押しつぶされる。》

わかった。直ぐ向かうわ。

《エボルブラックホールフォーム》

「つー訳で俺は先にワープで行ってるからイシユタルさんとカルナさんはケツアルコアトルを相手にしてるチームに急いで合流してください。」

《深川君。》

何だよ。今忙しいんだけど。

《ちゃんと帰ってくるんだよ?》

……………お前はオレのオカンか。んなこと言われなくてもこんなところで死ぬつもりはない。俺は今回の異変が終わったら適当な場所を見つけて平穏な暮らしをすると決めてるんだから。

……本当に馬鹿な奴だなロマンは。どんだけお人好しなんだか。生き残るために死を強要させようとする男を心配するなんて俺じゃなきや簡単に絆されてるなこれ。

さて、最後の掃除と行きますか。

満身創痍。今現在黒化したケツアルコアトルを相手する
チームの様相を表すとしたらこの言葉が合うだろう。

あの海がある限り黒化したケツアルコアトルを倒しても直ぐ様復
活する。

「悪いけど貴方はここで死んで貰う。全員じつくりとなぶり殺しで
あげる。四肢をもいで、眼球をくりぬき、火炙りにしてあげるわ。全
ては母さんのために。」

普段の状態からは考えられないような言動をするケツアルコアト
ル。彼女の元の善神たる振る舞いはケイオスタイドにより面影を失
くしていた。

だが、そんな彼女に灼熱の炎が襲いかかる。

それをマクアウイトルである程度防いだ後その元凶を見つめる。
そこには巨大なバハムートがその大きな翼をはためかせていた。

「妙ね……あんな生物この時代にいなかった筈……まさか。」

そんな彼女の辺りをブラックホールが現れ、周りものを吸い付く
す。泥の海も、ケツアルコアトルも大量のラフムも。

いくらケツアルコアトルといえど、不意打ちブラックホールに咄嗟
に反応出来るはずもなく、あえなく吸い込まれた。

「戦況はどんな感じ？キアラ？」

「……マスターがブラックホールを起こしてくれたおかげで何とかな
りました。」

「……何？こっちを見てるけど。」

「……マスター、相手はあの人類悪。下手に手を抜いて死ぬなんてこ

とはなされませんよう気をつけて下さい。やるなら徹底的に、ですよ？」

「……お前何か変なもんでも食った？ってツツコミたいけど今は時間がないからそれはカルデアに帰ってからです。

俺は今からティアマトボコるからケツアルコアトルの足止め宜しく。アイツ直ぐ復活するから。

一応言っておくと泥に吞まれそうになったらすぐ逃げろ。つーかあれに触れるくらいなら自害しろ。

他の人にもそう伝えといて。後あのバハムートは俺が魔力で作ったから敵じゃない。あれにラフムを相手させるから。ドクター、ティアマトはどこ？」

《そこから少し離れた海の表面にいる。くれぐれも気をつけるんだ。》

「了解。じゃあつーことで宜しく。」

《キアラ、妙なことすんなよ？やるなら今回の異変が解決してからやれ。それなら俺は何も言わんから。》

お、いたいた。早速死んでもらおう。

げ、こつち気付いた。

《A A a a a a a a a a a a a a a a!!》

ホントうるせーな。さっさと死ねよ。あ？何だ？地震？

……………おいおいまさか……

……本体が復活しやがった。おかしい。俺は聖杯を渡してないんだぞ。何で自力で復活するんだよ。

おい、ドクター！どうなってるんだよ！

…おい、ちよつと待て、お前何でこつち来んだよ。

おい、ウルクはどうした？まさか俺を排除する方が優先だとか？

《………おそらく君の持つ余りにも強大な力を前に危機を感じた彼女は君という存在を消すために自力で目覚めた。そんな所だろう。》

そんな所だろう。じゃねーよ！ふざけんな！要は俺のせいじゃねーか！

いや、落ち着け。確かにいきなり復活して俺にロックオンは想定外だが、やることは変わらない。

取り敢えずある程度は適当に相手をする。ここで殺せるなら殺すけど。

《クロノス》

取り敢えず時間を止める。……よし。時間停止はビースト相手にも通用する。

なら、勝機はある。下の泥の海に落ちないように足元に魔力で足場を作り慎重に戦う。

調子に乗ってケイオスタイド堕ちとか笑えないからな。

取り敢えず5分間クリティカルクルセイドをずっと撃ちまくる。

何度も何度も何度も。途中足の筋肉痛で嫌になるが構わず撃ちまくる。落下しないように足場に気を付けつつ。

EX15 絶望の権化

うわ、めっちゃグロいな。

ティアマトの体内ってこうなってるのか。何か至る所で、大きな袋みたいなもんが胎動してる。マジでキモいからさっさと済ませよう。

取り敢えず心臓を探す。心臓さえ潰せばこっちのもんだからな。それに魔力で作ったバハムートそう長く持たない。

てか何か地面もウゾウゾしていてキモい。これ長時間いるのは精神衛生上よろしくないな。

そうこうしてる内に心臓っぽい所へついた。

さーて、早く仕事を終わらせませるか。

そんな俺を衝撃波が襲う。突然の攻撃に反応出来ずダメージを受ける。

それは心臓から飛んできた。よくみると初期形態のティアマトみたいな奴がいる。違うのはその身体の色。

ラフム色って言ったらわかるか？

まあそう簡単にいくわけないか。取り敢えず目の前の外敵を排除する。

ラフム色のティアマトがまた何かやらかす前に秒で終わらせる。

先程は不覚を取ったけど今度はそうはいかん。

つー訳でさっさと処分しよう。

「…う、ん…………あれ？私…………」

「先輩！よかった…………目が覚めたんですね！」

「マシユ……………私…………」

「目が覚めたか立香よ。」

「あれ…………王様…状況はどうなつて…………」

「ここは治療室だ。現在は今深川が単身ティアマトに挑んでいる最中だ。他の者は敵に寝返つたケツアルコアトルとラフムの相手をしている。因みに最後の女神はもういない。深川が斃したからな。」

「……………わかった。深川さんとティアマトは今どこに？」

「奴らは今亜空間にいる。奴はティアマトを確実に仕留めるために一人で挑んでいる。言っておくが近づかない方が賢明よ。今更増援に行つたところで邪魔にしかならん。」

「……………わかった。なら敵に回つた女神をどうにかするから力を貸して。」

ヤバい。コイツら多すぎ。殺しても殺しても湧いてくる。心臓が目の前にあるのにコイツらがゴキブリのようにうじゃうじゃ湧くからブラックホールフィニッシュ撃つ暇がない。

今の亜空間はエボルブラックホールフォーム擬きによる能力。なので、このフォームが解除されれば必然的にこの空間も解除される。そしたら俺は敗ける。

コイツを力のゴリ押しで殺すにはクリアしなければならない条件がある。

- ・この世界の住人ではないこと
 - ・生命が存在しない空間に連れてそこで彼女を倒すこと
 - ・彼女を倒せるだけのチートがあること
- これが最低条件だ。
- それに加えて俺は以下の条件も満たさないといけない。

- ・早期決着（このまま行くと藤丸が死ぬため）
- ・俺自身が死亡もしくはケイオスタイド堕ちすることの防止
- ・昇華の発動禁止
- ・???を極力使わない。

もう何もかにも投げ出したくなるレベルの辛さだけどこれも生き残るためだ。

……生きるのがこんなに辛いなんて思ってたけど

そして、俺がエボルブラックホールフォームになってからもう15分が経過している。

もういつそのことここでブラックホールかますか。

うん、そうしよう。え？最初からそうしろ？

だってもしかしたら心臓は被弾を免れるかもしれないから最初に潰して起きたかったんだよ。出来れば直で潰したかった

そして俺はラフム色のティアマトもろともブラックホールにで葬り去った。

ティアマトの身体は半ば崩れ落ちているが、全ての魔力を口内に溜め、目の前の敵を消し飛ばさんとする。

その威力は星すら破壊出来る程の威力で、いくら深川といえども被弾すれば致命傷は免れない。

それに対して深川は星すら呑み込むレベルの大きさのブラックホールで対抗する。

星をも破壊する攻撃と星を呑み込むブラックホール。どちらが強いかなど問うまでもない。

一瞬の攻防の末、立っていたのは深川で地に伏しているのはティアマト。

ティアマトはこの世界全ての生命の母。この世界の住人では彼女を倒すことは決して出来ない。

だが、異世界人であり強大な力を持つ深川だからこそ今回の勝利を掴み取ることが出来た。

漸く全てが終わったことを悟った彼は疲労の余りその場に座り込んだ。

……どうにか時間内にティアマトを何とか斃すことが出来たな。

もう、特異点攻略はコリゴリだ。今回の特異点で思ったより能力を

使わされたし。

カルデアに帰ったら更に準備しないとな……

《……ティアマトの消滅を確認。本当によくやってくれた。僕らカルデア職員は君の働きを未来永劫記憶しておこう。今回の特異点の攻略の8割は君のおかげだ。帰ったら君をねぎらうためのパーティーを開こう。》

パーティーとかいいから俺に時間をくれ……

「深川さん！」

あ？……藤丸？お前傷はもう大丈夫なん？

「うん。それより色々と迷惑かけてごめんなさい。

私今回ほとんど何もできなかった。」

……気に病むくらいならもうあんな目に逢わんでくれ。

それとこれはお前に渡しとくわ。

「これって……聖杯？」

そう、いい加減聖杯のお守りも疲れたんでね。後はお前が持つてくれや。

つーか危険な目にあいそうならすぐ逃げろ。

死んだら何もかもおしまいだからな。

お前が重傷負ったって聞いた時俺すげえ心配したし。

俺はお前がいないと（人類の命運を俺が背負う羽目になるから）駄目なんだよ。

「えっ…それって……」

おい、何顔を赤らめてんだ。そういう意味じゃないからな！勘違いすんな！

《……こんな所でそういうこと言うなんて君も大胆だね。》

だから違うっつってんだろ！はっ倒すぞ！カルデア帰ったらお前ら全員しばくからな！

あれ？どこどこよ？俺カルデアに帰還した筈よね？
っーか何っこ。何か見覚えあるし………

《貴様は私が直々に消してやろう。》

振り替えると目の前にはゲーティアがいた。

EX16 禁じ手

時間神殿ソロモン。そこでは褐色の男が一人の男を消そうとしていた。

《貴様は私が直々に消してやろう。》

対するは、我らが主人公深川。

今の彼の心情は1つの思いで溢れていた。

ーこれ詰んだんじゃね？ー

褐色の男、ソロモンが目の前の障害を消そうと思ったきっかけは第7特異点での出来事がきっかけだった。

彼はエルキドゥやゴルゴーンを下し、五万のラフムを捌いた。

それだけではなく彼はあろうことかティアマトを単身追い詰め、倒したのである

そして、その倒しかたにも問題があった。時を止め、ブラックホールを起こし、未来予知をした。

だが、注目すべきはそこではない。彼が偽物を本物にする力を持っている。

―何だこの男は

カルデアにこんな男はいなかったはずだ。

何故この男はこれ程の力を持っている。

いや、経緯などさして重要なことではない。

この男は必ず我が障害となる。

その脅威さはカルデアなどと比べるまでもない。何としててもこの男を消さなければ。

それはゲーティアが生まれて初めて抱いた危機感だった。

そして今に至る。

ソロモンは最初から本気で深川を殺すためその姿を魔神王ゲーティア、ビーストIへと変貌する。

《ではさっそく消えるがいい。死ね。》

深川目掛けて特大の魔力の光線が降り注ぐ。

《エボルブラックホールフォーム》

彼はすぐさまエボルブラックホールフォームライドウオツチ擬きを起動させ、身体に組み込む。

彼は光線が当たる前にワープすることでダメージを受けることを回避していた。

お返しにブラックホールを遙か上空に解き放つ。

そこは数多の光帯が存在している場所だった。ブラックホールにより幾つもの光帯が吸収されていき、深川の魔力となる。

彼はこの無数の光帯の幾つかを自身の魔力として吸収した。

だが、それでも状況を覆すには足りない。

ゲートイアはすぐさま距離を詰め、拳による怒涛の連撃を繰り出す。

だが、ある程度ゲートイアの行動パターンを知悉していた深川はワープにより回避する。

そして深川は亜空間を作る能力で自分に取って有利なフィールドを作ろうとする。

だが、それを予知したゲートイアがはるか上空に存在する光帯の何かを極太のレーザー光線として深川目掛けて放つ。

しかしそれもワープ機能で何とか回避する。

自己に取って有利な空間を作る暇が今はないと考えた彼は次の手を打つ。

彼は右足にエネルギーを溜め、ワープによってゲートイアの背後を取る。

それに対してゲートイアは魔力解放をすることによりその肉体から衝撃波を発生させ、背後にいる深川の攻撃を防ごうとした。

が、ゲートティアの目論見に反して深川は衝撃波をその一身に受ける。通常ならそれだけでダウンしそうなものだが、彼はそんなことはお構い無しに極限までエネルギーを溜め続けた右足をゲートティアの背中に喰らわせようとする。

ゲートティアは思わぬ反撃に刹那の間驚愕するもそれを右腕で防ぎ左手の掌から魔力の光線を深川目掛けて放つ

だが、擬きと言えどもブラックホールフォーム。

ゲートティアの右腕からはブラックホールが発生し、その身を吸い込まんとする。

それを見た彼は直ぐ様右腕を切断し、ブラックホールの被害を最小限に留める。

だが、ゲートティアの光線をまともに受けた先程の衝撃もあつて彼はブラックホールフォーム擬きに小さいスパークが走る。

が、彼は小さなブラックホールを無数に生み出し、それをゲートティア目掛けて発射した。

先程のブラックホールを警戒して、全てのブラックホール弾幕から回避するゲートティア。

だが、次の瞬間空間が書き換わる。

深川が亜空間を作る能力で自分に有利な空間にしたのだ。

それに対して内心舌打ちしながらも常人には捉えられない速さで深川を仕留めるべく背後に回り、自身の持つ魔力をその拳に載せ力の限り殴打する。

だが、深川はブラックホールを拳に纏いながら逆にゲートティアを殴り飛ばした。

が、ゲーティアの殴打による衝撃の影響でエボルブラックホールフォーム擬きが解除される。

同時に空間も元に戻る。

そして彼は直ぐ様別のライドウオッチ擬きを起動させる。

《クロノス》

時の神の名を冠するライドウオッチ擬きをその身体に取り込み、その姿は独特のデザインが特徴な仮面ライダークロノス（擬き）へと変わる。

そして、彼は直ぐ様クロノスが得意とする《ポーズ》を発動させる。クロノスの特筆すべき能力であるポーズ。それは早い話時間停止。

この世界で時間停止は凄まじいアドバンテージを誇る。

この能力を前にすれば大抵の敵は成す術なく地に伏すだろう。

クロノスの戦い方は時間停止からの必殺技がメイン。

この世界では時間停止からは何者も逃れられない。

これで後はクリティカルクルセイドを出せばフィニッシュ。

彼はそう考えていた。

だが、今回は相手が悪かった。

「ふん、時を止めたか。人の身でありながらよくそんなことが出来たものだ。」

「なんだと!?!」

時を止めたにも関わらず平然と動けるゲーティアに深川は驚愕を隠せない。

彼の中でこの世界でポーズに対抗できる者はいないと考えていた。例えゲーティアと言えども抗えない、と。

なので、動揺も大きかった。

だが、こと戦いにおいて動揺は命取りとなる。

動揺により生まれた隙を見逃さず、ゲーティアは深川に殴撃する。

だが、擬きとはいえ、100t以下の攻撃は受け付けないクロノスのスペックに事なきとことを得るも、精神的動揺は計りしれない。

クロノスの強みは時間停止。その時間停止が効かないとなるとただの耐久力のあるアーマーでしかない。

一応、時間経過すればするほどスペックが上昇するという強みはあるものの、不死身であるゲーティアに対して持久戦を挑むというのは余りにもハイリスクなことだった。

深川は戦いのプロではない。

彼は今までその超越的な力でゴリ押しをして、戦いに勝利してきた。

なので、技術的なものは稚拙なままで、根本的に戦いの何たるかはわかっていない。

フェイントをかけること位しか彼は理解していない。

なので、技術的な強さは皆無と言っていい。

ハイパームテキ（擬き）で例えてみよう。

ハイパームテキのスペックはパンチ力、キック力共に128t、ジャンプ力は一跳び128m、走力は100mを0.128秒で走る。

常時2倍のバフがかかっているため、パンチ力、キック力、ジャンプ力は2倍になり、走力のタイムは半分になる。

そして、あらゆる攻撃が一切通用せず、制限時間も存在しないとい

う強みを持っている。

これの擬きの場合は制限時間は存在すること以外オリジナルと一緒である。

事実、深川の持っているライドウォッチ擬きのほとんどがチート能力を有している。

クロノスは時間停止

エボルブラックホールフォームはブラックホールの生成

ハイパームテキは常時無敵

ジオウIIは未来予知

ゲイツリバイブは未来予知を上回るスピード

ビルドジーニアスは人体にとって有害になる物の浄化

これら全てが擬きとは言え、その特殊能力は健在である

擬きなので制限時間が存在するという制約はあれどチートなのは変わりはない。

そして一部を除けばどれも使えば最後、戦いに勝利するレベルの能力である。

そこに戦闘的な技術や駆け引きが介在する余地はない。

事実今まで彼はそれで対処出来ていた。

これらの能力を有していれば戦闘的な技術などなくてもどうにかなると思うのも無理はないだろう。

だが、もしその特殊能力が通用しない事態に陥ったら？

決まっている。深川に取って絶望的な状況になる。

だからこそポーズの最中で確実にその命を断ち、止まった時の中で命を落とした者は再生出来ないという強みを活かすつもりだったが、それも成功する確率が激減した。

「何故、ポーズの中で動ける？」

「時間神殿ソロモン。ここは私の領域。貴様のポーズとやらも私には無意味だ。」

ポーズの中で動けることに動揺した深川だが、ポーズ自体は無効化された訳ではない。正常にポーズは発動している

止まった時の中でゲーティアを絶命させるという目論見は変わらない。

彼はゲーティアにダメージを与えるため接近戦に持ち込もうとするもそれを見たゲーティアは無数の魔力の弾丸を同時に放つ。

その兆候を感じ取った深川は直ぐ様距離を取る。

そうこうしてる内にポーズが解除される。

クロノスでは勝ち目はないと考えた深川は他の手段を考える。

ージオウⅡ、未来予知は出来ても、火力が足りないー

ーゲイツリバイブ、この戦いにおいて副作用による隙は致命的なので却下ー

ービルドジーニアス、考えるまでもなく論外ー

彼は最終手段である???を使うことにした。

それはこのアイテムを使えば彼が恐れてる人物がこの世界に来る可能性がある。

しかもこのアイテムは作成したが、一度も使ってない。なので、制限時間は何分か、どれぐらいまで対応してるかなどは把握していなかった。

通常ならそんな不安を抱えたまま使わないが、今はそんなことを言ってる場合ではない。

このままでは死ぬ。それは彼が一番よくわかってることだった。今を乗り越えねば後もない。

彼はこの戦いで持てる力を全て使い何としてでも生き残るためにマゼンダ色のライドウオツチ擬きを使う。

《ディディディケイド！》

騒々しい音声がこだまするライドウオツチ擬きを身体に組み込む。

その姿は世界の破壊者として名高い仮面ライダーディケイド（擬き）。

彼は続けて黄金色のライドウオツチ擬きを起動させる。

《ムテキゲーマー》

そしてそれを身体に組み込んだ。今の彼は仮面ライダーディケイドハイパームテキフォーム擬き。

（本家で言うディケイドに変身した後、フォームライドでハイパームテキになったのと同じ状況）

「これで最後だ。俺が生き残るために死ぬ。」

さらに2人の分身を生み出した後、透明化した。そして目にも止まらぬ速さで高速移動し、計3人のハイパームテキ擬きがゲートエアに襲い掛かった。

EX17 終焉の一撃

「ふん、無駄な足掻きを。何度やろうとも同じこと。」

懲りずに向かってくる深川を鼻で笑うも直ぐ様その認識を改めることになる。

背後に衝撃が走る。それにふらつくゲートイア。

次に右からの衝撃。その次は後ろから。

次々と自分に襲いかかる攻撃に反応出来ないゲートイア。

デイケイド擬きのインビジブルとクロックアップによりゲートイアは反応することか極めて困難だった。

次々と自分を襲い来る攻撃に対して苛立ちを隠せないでいた彼は宝具を発動しようとした時だった。

右腕に強い衝撃が走った。そこに目をやると右腕が失くなっていった。

が、直ぐ様再生する。

今の深川は仮面ライダーデイケイド擬き

ここで仮面ライダーデイケイドについて簡単に説明しておく。

仮面ライダーデイケイド。それはクウガくキバまでの主役ライダーの力を全て扱えるというチートの権化

基本的な戦闘スタイルはドライバーに任意のライダーカードを差し込み、そのライダーになる。

例 龍騎のカード場合は龍騎になる。

また、デイケイド自身もインビジブル、イリユージョン、ブラスト、

など多彩な手段をもっている。

インビジブルは透明化、イリユージョンは分身、ブラストは銃撃である。

先程も説明した通り、クウガくキバまでの主役ライダーの全ての力を扱えるので、イリユージョン+インビジブル+クロックアップの鬼畜コンボも可能。

そして、デイケイドには激情態と言うものがあり、これは任意のライダーカードを差し込まずにそのライダーの力を使える。

更に、不死身のアンデッドなどその世界の仮面ライダーでしか倒せない敵もデイケイドは普通に倒せる

また、最終フォームはクウガくキバまでの最終フォームの力を全て扱えるコンプリートフォーム。

これだけでもぶつ壊れだが、現在はダブルくジオウまでの力を使うことを可能としており、只でさえチートなのが更にチートになった。

その余りのチートぶりから何か不可解なことが起きててもまあデイケイドだからあり得るとファンの間で評されるほど

これが仮面ライダーデイケイドである。

話を戻すが、

それに対しゲータィアは宝具を発動させようとした。

だが、それよりも早く深川らはハイパームテキ擬きの強みの一つである、ワープ機能を用いてゲータィアに接近する。

ハイパームテキ擬き（分身1）はハイパーライドヘアー（黄金のドレッドヘアーのこと）でゲータィアを拘束した後、地面に叩きつける。

だが、ゲートティアも只ではやられない。その巨体を地面に叩きつけながらもハイパームテキ擬き（分身1）に対して魔力の光線を胸部の眼球から放出する

だが、ハイパームテキは無敵貫通を除き、あらゆる攻撃が一切効かない。それによりこの攻撃は無傷でおわる。

体勢を立て直したゲートティアをハイパームテキ擬き（分身1）が極限まで黄金のエネルギーを溜めた右足からの蹴り上げをお見舞いする。

それはハイパームテキの必殺技であるハイパークリテイカルスパークキング。要約するとヤバすぎる威力を持った攻撃が連続で襲いかかる。（多段攻撃のため。）

それをもろに受けたゲートティアはその巨体を空に浮かせながらハイパークリテイカルスパークキング（多段機能ヒット付き）による衝撃を浴び続けていた。

そして、空中から落下してくるゲートティアをハイパームテキ擬き（分身2）がタイミングを見計らって横蹴りのハイパークリテイカルスパークキング（多段ヒット機能付き）を食らわせる。

二度目のハイパークリテイカルスパークキングによりその身体をバウンドさせながらもゲートティアは何とか体勢を立て直す。

が、眼前を見上げるとそこにはハイパームテキ擬き（深川）おり、ゲートティアの胸にハイパークリテイカルスパークキング（多段ヒット機能付き）をお見舞いする。

三度目のハイパークリテイカルスパークキングによりゲートティアは更なる大ダメージを負う。

彼が業を煮やし目の前の敵を殲滅せんと全ての魔力を使おうとするも、それよりも早くクロックアップで高速移動し、三人のハイパームテキ（擬き）が同時にハイパークリティカルスパークキングをゲートティアに浴びせる。

未曾有のダメージ量に不死身でありながら死の危険を感じるゲートティア。

「不味い！直感でわかる。今のこの男は不死身である私を殺せる。このままでは私が死ぬ！何か、何か手を打たなければ！宝具は不可。撃つ前にあの高速移動で妨害される。なら、呪いは？不可。先程から呪いにする術をかけてるが効果は現れない。どうする！どうすればこの男を倒せる!?!」

今のゲートティアはこれまでにないほどの焦燥と恐怖を感じていた。そんな思いが頭を駆け巡るも無慈悲にもハイパークリティカルスパークキングによるダメージはゲートティアの身体を蝕んでいった。

端から見ればオーバキルにも程があるが深川は容赦しない。深川はオーバキル位が丁度いいと考えている。

普通ならこれだけの攻撃を食らえばそこで終わりそうなものだが、そこは腐っても魔神王。

彼は6度に渡るハイパークリティカルスパークキングをくらいながらも生きていた。

だが、その身体は既に満身創痍であった。ゲートティアに取って不死身であっても自分が再生が追いつかないレベルでのダメージを負うなど初めてのことだった。

端から見ればどちらが優勢なのかは一目瞭然。

「敗者にふさわしいエンディングを見せてやる……」

深川はゲートティアに引導を渡すためにハイパークリティカルス

パーキングを繰り出そうとする。

だが、次の瞬間、深川の身体にスパークが走り、
仮面ライダーデイケイドハイパームテキフォーム擬きが解除され
た。

余りにも突然のことに理解が追いつかない深川は狼狽え始める。

「何故だ……まだ3分も経過してないのに……」

「……………終わりだな。貴様はよくやった。」

「ふざけんな！ならもう一度！」

そして、別のライドウォッチ擬きで時間を稼ごうと腕を動かそうと
した瞬間、彼の右腕はゲートティアの熱線により消し飛んでいた。

ー痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛いー

彼はあまりの痛さに地に伏しながらものたうち回る。

それもそのはず彼はこれまでそのライダー擬きのスペックにより
このような痛みを経験することがなかった。

彼はその痛みによりライドウォッチ擬きを起動させるどころではな
くなくなっていた。

その様子を見下ろしながらゲーティアは魔力を装填し始める。

「い、嫌だ……俺は……死にたくない……俺は……俺はまだ死にたくない！こんな……こんなところで！」

何をしようとしたか粗方察した深川は怯えの表情を隠せないでおり、目に見えて取り乱し始めた。

「カルデアは……カルデアの奴らは何をしてる！この俺が殺されかけてるんだぞ！」

「誰も来ない」

「英霊は……サーヴァント共はどうした！お前らは何のために！人間を守るためだろうが！ギルガメツシュ！マーリン！見てるんだろ！早く助ける！」

「誰も応えない」

「誰も……誰も来ないのか？誰でもいい！早く……」

早く俺の壁になれよ！俺の代わりに死ねよ！

そうだ！キアラは……キアラはどうした！

アイツなら……アイツならきつと！」

「あやつは来ない。」

「貴様の元には誰も来ない。誰も応えない。貴様は誰一人として本当の意味で信頼せず、自分の駒と考えている。そんな奴の元に来るわけ

がない」

「何でだ……何で俺が死ななきゃならないんだよ！本来ならロマンが死ぬ筈だろ！俺を助けて早く死ねよ！死んでくれよ！俺が生きために死ねよ！」

涙ながら来る筈もない者らに助けを求める深川をつまらないものを見るかのような目をするゲーティア

「……………せめてもの慈悲だ。单身ここまで追い詰めたことに敬意を表して私の宝具で終わらせてやろう。」

「……………止めろ……………止めろ！」

深川はゲーティアが何をしようとするのか察して静止するよう声を張り上げるが、ゲーティアがそれをまともに取り合う筈もなく宝具を発動させる。

「誕生の時きたれり、其は全てを修めるもの（アルス・アルマデル・サロモニス）」

「……………何でだよ……………何で……………何でこんなことになるんだよ！俺は……………俺はただ無事に生き延びて平穏な暮らしがしたかったただけなのに……………」

その言葉を最期に深川は光帯に吞まれて消えた。

EX18 悔恨

人理修復はなされた。カルデア一同は世界を救えたことに元の日常を取り戻せたことに歓喜した。

ある者は嬉しさのあまり涙を流し、ある者は喜びに震えた。

カルデアでは祝勝会として連日パーティーが開かれ、今までの張りつめた空気が嘘のように弛緩し、喜びの雰囲気が流れていた。

中には沈痛な面持ちの職員もいたが多くの職員は喜びに震えていた。

だが、そんな空気とは対照的にカルデアマスターである藤丸立香は自室にて陰鬱な表情をしていた。

どうにもパーティーなどやってられる気分ではなかったからだ。

なのに皆、次々とカルデアのマスターである藤丸立香を褒め称える。よくやった。君のおかげで世界は救われたと。

次々と浴びせられる称賛に藤丸はその場では表面上は何気ない表情をしながらも内心穏やかではなかった。

（私のおかげ？違う。私は何も出来なかった。

ゲーティアをあそこまで追い詰めたのは単身1人で戦っていた深川さんのおかげ。第7特異点だってそう。

私はほとんど何も出来ず、挙げ句に怪我を負う始末。

そのせいで深川さんに大変な思いをさせた。

あの特異点があそこまで何気なく進んだのは全部深川さんが頑張ってくれたから。それに本来ならゲーティアとの戦いは熾烈を極める筈。何せ今回の異変の黒幕。

その力は計り知れない。

でも私らがゲーティアと相手した時拍子抜けした。

数多の英霊が来てくれたとは言えそれだけで勝てる程甘くはないと思ってた。なのに勝てた。

それは深川さんがゲーティアに拉致されながらもたった1人で戦ってくれたからこそ、私らはカルデアから犠牲者を出さず勝利を納められた。」

（なのに、どうしてこの人たちはそんなに手放しで喜べるの？あの人がいなかったら私達はもっと酷い結果になってたかもしれないのに。……でも私に彼らを糾弾する資格はない。だって元はと言えば私が――）

「……先輩、今宜しいですか？」

「マシユ……」

「……………深川さんのことですよね。」

「……私何も出来なかった。今回の結果は全部深川さんがいたからこうなったの。皆は私のことを褒め称えるけど私はそんな人間じゃない。平穏な暮らしがしたかっただけの人間を殺した最低の人間。」

「……………先輩。」

「深川さんが言った。この世界の出来事はこの世界の住人が解決してくれって。私その場ではわかってたのに結局わかってなかった！」

「……………」

「全部、全部深川さんに頼りきりだった！」

第7特異点のことも、ゲーティアの戦いだって！」

本当はもつと私が頑張らないといけないのに深川さんに任せつきりで…………それで結局深川さんが死んでしまつて…………」

「……………」

「それでね私、さつきカルデアの職員さんから誉められた時こう思つたんだ。何でそんなに喜べるの？つて。」

「……………」

「でも私に彼らを糾弾する資格なんてない。」

元はと言えば私のせいなんだから……………私が深川さんを召還しなければ……………私があつとすっかりしてれば……………深川さんを巻き込まなければこんなことにはならなかった。」

「……………」

「私、自分自身が許せない。私は罰を受ける義務がある。」

「…………先輩が1人で抱え込む必要はありません。」

これは私達全員の罪です。この世界の出来事に偶然とはいえ巻き

込んで結果死なせておきながら何の罰も受けてない私達の。

平穏な暮らしがしたかっただけのごくありふれた人を殺した私達の背負うべき業です。」

それから二人は互いに一言も発することなく時間が過ぎていった。

《…何でだよ……何で……何でこんなことになるんだよ！俺は……俺はただ無事に生き延びて平穏な暮らしがしたかっただけなのに……》

彼につけた小型監視カメラが拾った最後の音声。その音声はカルデアの管制室のとある機械に届けられそこから彼の悲痛な叫びが聞こえる。

その音声を再生したロマンはとても素直に喜べるような気分ではなかった。

カルデアの食堂では職員らによる喧騒が響いている。

深川のこととは彼自身の事情もあり、極力秘匿することにした。

知ってるのは藤丸、マシユ、サーヴァント、ロマン、ダヴィンチ、一部のカルデア職員だけ。

他の職員は彼のことを知らない。とはいえああもはしやがれると少しくるものがロマンにはあった。

―何でだよ！本来ならロマンが死ぬ筈だろ！―

（彼のあの言葉はつまりそういうことなんだろう。）

本来の歴史ではおそらく自分が死ぬ運命にあった。

それが彼というイレギュラーによりねじ曲がりあのような結果になった。）

自分のせいで彼が死んでしまった。そのことにロマンは自責の念を抱いていた。

―平穏な暮らしがしたかった―

（その強大な力とは裏腹に彼の望みはとても細やかなものだった。）

生きて平穏な暮らしがしたいというごくありふれた願いを自分たちは踏みにじった。

思えば僕らは結局彼の力ばかりに目が行き、彼の内面に踏み込んだことななかった。

僕らは彼のことを何一つわかってなかった。

彼が本当はとても臆病なことも、特異点で壊れていたことも。神にも等しい存在などではなく、どこにでもいるごくありふれた人間であるというのも。

―君は大切な仲間なんだから―

第7特異点で自分が彼に吐いた言葉だが、改めて思い返すと何と薄っぺらいことか。

仲間と言いつつ、その実彼のことを何一つ理解していなかったのだから。

もし彼が自分に復讐することがあれば……
その時は甘んじて受け入れよう
それが僕の受けなければならぬ罰なのだから。」

自分の愚かさに自嘲の笑みを浮かべつつロマンはそのまま管制室
を後にした。

「ここから先は蛇足です。それでも良い方はこのまま進んでくだ
さい。」

以下 一部より抜粋

「思い知るがいい……俺の味わった痛みを」

《ゴツドマキシマム》

「ごめんね、マシユ……これが私の受けるべき罰なの」

「先輩！」

「どいつもこいつももうざいんだよ！存在しない奴らがでしゃばりやがってー！」

《不味い！あの槍1つ1つが対星宝具並の威力だ！あんなもの撃たれて地表に激突でもすればこの星が吹っ飛ぶ！》

「君の怒りは僕が全て受け止めよう。」

「…………キサマラサエ…………キサマラサエイナケレバあ！」

小心者が復讐の鬼となり、カルデアに逆襲する話です。
需要があれば投稿する予定です。

Revenge The first end

長かった。本当に長かった。ゲートティアに俺が消されてから久しい

その間俺はずっと準備してきた。全てはカルデアに復讐するために。邪魔なフオウは既に消した

アイツらが異聞帯を攻略してる間にも俺は奴らを消すための準備をしてきた。

アイツらが俺を召還さえしなければ俺はあんなことにならずにすんだ。

本来なら死ぬべきはロマンの筈なのに俺が死んだ。

結果、ロマンは生き残りのうのうと人生を謳歌している。

許さない……許さない……絶対に許さない！

俺が死ぬ原因を作ったときながらのうのうと生きるなどふざけてるにも程がある。

俺はただ平穩に暮らしたかったただけなのに。そんなささやかな願いすらも踏みにじって。

俺は誰々は私の心の中に生きてるなどという妄言は受け付けない。そんなのは詭弁だ。

どう取り繕うとお前らが掴み取った平穩は俺の命を犠牲にして得たもの。いわば俺のおかげで掴みとったもの。

なら、俺が壊しても文句はないはずだ。

待っているカルデア。お前らに地獄を見せてやる。

最後の異聞帯を攻略したカルデアはギリシユタリアを捕縛し、異世の神と決着をつけるために一端シャドウボーダーに帰還しており、現在は司令室で現状を報告している所だった。

現在のカルデアの戦力はアルトリア、ギルガメツシユ、玉藻の前、謎のヒロインX、アキレウス、ニトクリス。

「先輩、終わりましたね。」

「マスター、この男はどうしますか？」

「……取り敢えず独房に入れとくよ。聞きたいこともいっぱいあるしね。という訳で後はお願いねアルトリア」

「フハハハハ……」

「……何がおかしいの？ギリシユタリア。」

「私の負けだカルデアのマスター。それは認めよう。だが、お前達はあの男には絶対に勝てない。彼に比べれば私など吹けば飛ぶ塵芥のようなものだ。」

辺りに轟音が響き渡り、シャドウボーダー内を緊急アラームが鳴る。それは外敵からの襲撃を意味するもので、直ぐ様発生源に向かう立香たち。

「懐かしい顔ぶれだね。」

そこには1人の男がいた。その男は黒いコートに身を包み、黒のサングラスをかけていた。

今回の襲撃の元凶であるとあたりをつけたアルトリアは剣を構え、マスターの前に立ち塞がる。

ギルガメッシュはいつでも王の財宝で目の前の男を仕留められるよう待機する。

それ以外の者らも臨戦態勢に入った。

その男は黒いコートに身を包み、黒のサングラスをかけていた。

「貴方は何者ですか？マスターに危害を加えるというのなら容赦はしません。」

「……………相変わらず童顔のままだな藤丸。マッシュも久しぶり。寿命の方は大丈夫か？」

「……………嘘、だって貴方は……………」

「……………まさか！」

その男がサングラスを取り、顔が露となる。その男は藤丸らが良く知ってる男であり、彼女らに取って忘れるに忘れられない人。深川悟だった。

「……………久しぶりだな藤丸。」

《……………どうして…君はあの時確かゲーティアに……………》

「お、ドクターもいるのか。まあ確かに死んだよ？でも異星の神のおかげで俺はこうして蘇ることが出来た。

いやー、あの時は辛かったなー。誰も助けてくれないからさ。俺一人で頑張るしかなかったよ。」

「……………さい。」

「ん？」

「……………ごめんなさい……………ごめんなさい…私のせいで…本当に、本当にごめんなさい……………」

深川を目の当たりした藤丸はその目に涙を浮かべながらも謝る。まるで自分の罪を懺悔する罪人のように謝る藤丸を深川は優しく見つめる。

「……………別に構わない。お前もあれから色々あつて大変だったんだろう？亜種特異点、異間帯の攻略。ここまでよく頑張ったね。」

彼は頑張った子供を褒めるかのような優しい声で諭す。

「それに俺は気にしてないよ。だって、」

流暢に喋りながらも深川は懐から1つのライドウオツチ擬きを取り出し

《ゴッドマキシマムゲーム》

最高神の力を起動させ、

「お前ら全員ここで死ぬんだからさ。」

今まで見たこともない優しい笑みでそう言い放った。

「……………」

藤丸の悲痛な表情を無視して仮面ライダーゲームムゴッドマキシマムゲーム擬きとなった彼は上空に手を翳す。

すると、空の遥か彼方から小さな隕石が複数、藤丸ら目掛けて複数飛来した。

小規模とはいえ隕石は隕石。万が一人間に被弾すれば唯では済まない。

アルトリアは飛来する隕石をエクスカリバーで消し飛ばしギルガメッシュは王の財宝で隕石を破壊した。

「……………目的は復讐ですか？」

「うん。よくわかってるじゃん藤丸。」

「……………皆下がって。」

「……………それは出来ませんマスター。貴方が彼のことと心で心を痛めていたのも自責の念を抱き、罰を受けたがっていたのも知っています。それでも貴方を彼の元へ行かせる訳には行きません。」

「……………別にお前がこちらに来る必要はないよ。だってほら、上を見てごらん?」

カルデアが目をやると突如現れたのは天地を覆い尽くさんばかりの巨大な身体の妖蛇。

その頭は全てで8つあり、それぞれ頭が天に向かって咆哮する。

「……………これはまさか……………ヤマタノオロチ?」

「ダイナスティークロニクル。世界を滅亡させるほどの力を持った敵と戦国と三國の偉人が力を合わせて生き残りをかけて戦うゲームだ。コイツらがお前らの命を絶つ。」

ティアマトにも勝るとも劣らない身体の大きさを誇る妖蛇の頭1つはその口から炎を纏った岩石を吐き出す。また、別の妖蛇は火炎放射を吐き出す。

(ここからは便宜上妖蛇の頭をそれぞれ番号をつける。

例 妖蛇1 妖蛇2など)

その岩石が地面に激突したことで爆散し、辺りに衝撃波を発生させる。その衝撃波に紛れて灰色の身体をした兵士が襲いかかる。

「さて、お前らはあの蛇に吞まれるかはたまたま生きてまま焼かれるか。それとも雑兵に無惨に殺されるか。実に楽しみだ。」

妖蛇3は口から大量の瘴気を吐き出す。

妖蛇の吐き出す瘴気は並みの者が吸い込めばたちまち死に至る。吸ったが最後、全身に毒が回り、それとは別に細胞が急速に壊死していくからだ。

辺りに瘴気が充満し、思うように力を出すことが出来ない英霊たち。

その影響を顕著に受けたのは藤丸立香

藤丸は自身に備わってる毒耐性により幾ばくか緩和されるが、その身体の所々は瘴気により汚染され、綺麗な肌は黒ずんでいき、大量の吐血をしている。

「た、助けてくれ！……あ……あ……うわあ、あ、あああツツ！……」

「や、やめてくれ……頼む……あ、っ」

妖蛇4の焰を纏った岩石によりほとんど大破したシャドウボーダーから命からがら逃げ延びたカルデア職員らを

妖蛇が捕食していく。

ある者は火炎にその身を焼かれ、ある者は瘴気に身体を蝕まれ、朽ち果てていった。

一瞬のうちに阿鼻叫喚の地獄へと化した様子に深川はその仮面の下から歪んだ笑みを浮かべる。

こうしている間にも藤丸は吐血し続けており、かなりの血溜まりがあることからどれだけ酷い状態なのかが窺える。

一先ず撤退するために英霊達が宝具を撃つが、妖蛇にこれといったダメージは与えられずそれどころか逆に妖蛇の攻撃を何とか防ぐのに精一杯だった。

「改めて紹介しよう。俺の名前は深川悟。お前らを根絶やしにする者だ。世界を取り戻したいのなら俺を殺すことだ。

まあせいぜい足掻いてくれ。出来るもんならな。ハハハハ……」

「先輩！しっかりとして下さい！」

「コヒユツ……エッ……」

吐血が止まらない藤丸を冷たく見下ろす深川。

「俺はお前らが許せない。俺が死ぬこととなった原因を作ったお前らがのうのうと生きるなどなんの冗談だよ。

とは言えお前自身は俺に会うなり開口一番に謝罪した。その誠実に免じて一撃で死なせてやるよ。」

「マスター！」

「ゴ……ンナ……イ」

「……次会う時はあの世で会おう。俺はお前のことそれなりに認めたぜ。」

「……………」

藤丸は自身に訪れる結末を予期して静かに目を閉じる。彼女はそのまま彼に殺されるつもりだった。

「じゃあな。」

Revenge 2 限界を迎えた心

目が覚めると見知らぬ空間にいた。自分はその時ゲーティアに消された筈。何で生きてる？そんな疑問を感じてると辺りに声が響いた。

―君を生き返らせたのは私だ―

誰だアンタ。

―私は異星の神。君の元いた世界ではそれなりに知られていたと思うのだがね―

……俺を生き返らせてくれたことには感謝する。だけど何が狙いだ？

―私は地球を掌握し、手中に収めたい。そのための手伝いをして貰う。そしてカルデアに復讐するチャンスを与えよう。

カルデアに復讐……ね。無理だ。アイツらにどんだけのサーヴァントがついてると思う？俺が挑んでも返り討ちにあうだけだ。制限時間を迎えてな。……つーかいよいよ別に。

………俺、もう疲れたんだ。

―………―

この世界に生を受けて絶望して、それでも死にたくないから必死に足掻いて準備した。周りがありふれた日常を送り、両親の愛情を受け、健やかに育つのを見て何度も泣きたくなった。

それでも最後に勝って笑うのは自分だと言い聞かせ、何とか頑張ってきた。

心許せる友や愛する人もいない。そんな人生でも構わなかった。生き残れるならね。

―……………―

でもさ……………結局俺は死んだ。

……………俺、何のために頑張ったんだ？

―……………―

両親の愛情も、ありふれた日常も何もかも捨ててまで準備した。死にたくないから。でも結局俺は死んだ訳だろ？

だからさ……………もういいんだ。悔しくないと言えば嘘になるしアイツらに対しては少なからずムカつくからぶっ飛ばしたいという気持ちもある。

でもさ……………それ以上に疲れたんだ。

……………俺、もう頑張らたくないよ。休ませてよ。

……………なんてな。まあ確かにアイツらムカつくしぶっ飛ばすのは賛成だわ。ロマンが生きるとかホント絶許だわ。

つーか一般人にどんだけヤバいことやらせてたか今になってわかるとはね。

で、俺はアイツらぶっ飛ばせばいいのか？

ー……………そうだ。そしたら君の望みも叶えてやろうそのために君に少しばかり力を与えよう。ー

「じゃあな。」

彼女に引導を渡すために魔弾を繰り出そうとする深川。
だが、それは叶わなかった。

突如彼の身を一筋の赤い閃光が襲ったからだ。

が、ゴツドマキシマム擬きにダメージはおろか傷1つない。

「……………誰かと思えばお前か。正義の味方。」

「……………今のを食らって無傷とはな。……………まあわかっていたことだが。」

「……大方俺の力を危険視してわざわざ出張ってきたつてところか？」

「その通りだ。唯今回は私1人ではない。」

そう、エミヤの後ろにはかつて時間神殿ソロモンにて集結した全ての英霊がいた。

そして妖蛇は断末魔をあげながら消えていった。

「……なるほど。俺のことを排除すべき危険因子と判断したか。だがそれがどうした。こちとら地球など簡単に消せる力を持つてるんだよ。まあ全てが終わればこの星を俺の力で再構築すればいいだけのことだ。

それにたかが一惑星の尖兵風情が最高神たる力を持つ俺に叶うとでも?」

《……これは……馬鹿な!集結した全員がグランドクラス!?こんなこと本来ならあり得ない!》

「そう、本来ならな。だが、星の援護があれば別だ。

深川悟。貴様のかつての望みはここにいる英霊全員が理解している。そして今回の動機もな。だが、貴様は強くなりすぎた。

星が全力を上げて殺そうと決断する程に。」

「……………」

「赦してもらおうとは思わん。そんなことを望む資格は我々にない。

貴様が内心我々をどう思おうが一般人であるお前に大役を押し付け、死なせておきながらこうしてお前に刃を向けている時点だな。

貴様がこの戦いで勝利したら後は好きにするがいい。」

「……………」

「問答はここら辺で終いでしょう。行くぞ深川。」

「…………来い。全員まとめてひねり潰してやる。」

今ここに最後の戦いの火蓋が切つて落とされた。

1人、また1人と襲いかかる英霊たち

そんな中、キングハサンが深川目掛けて大剣を振り下ろす。

「…………チツ亡霊はさっさと成仏しろ。」

だがそれよりも早く深川はキングハサンの顔面に拳をめり込ませそのまま殴り飛ばした。

殴り飛ばされた彼はそのまま遙か彼方まで身体をバウンドさせながら飛んでいった。

が、キングハサンが彼方へと飛んだ直後、無数の武器が深川目掛けて襲う。

それを深川は紫の気体を武器目掛けて浴びせる。すると武器は瞬く間に腐蝕し、見るも無惨な形になっていた。

が、その背後を2つの影が襲う。

アルトリアオルタとランスロットがそれぞれの剣を渾身の力を込めて振り下ろすもゴッドマキシマム擬きは僅か火花を散らすだけで終わる。

「ナマクラの剣で勝てる訳ないだろ馬鹿共が。」

二人の腕を掴み地面に叩きつけた後、利き腕をもぐ。

そして無数の魔弾を撃つ。そこには大きなクレーターが出来ていた。

「なら、私の槍を受けてみる。」

一瞬の内に数えるのも億劫になるほどの刺突を繰り返すスカサハ。

「影の国で隠居でもしているクソババア。」

それらを軽く受け流しながら胴体の目から光線を放つ。それを彼女はジャンプして回避したうえ、踵落としを深川の頭部に決める。いくらゴッドマキシマム擬きでも衝撃をゼロに出来る訳ではない。

予想外のダメージにふらつき、膝をつく深川。

それを好機と見た英霊達は一斉に宝具を放つ。

激昂した深川は彼らをなぶり殺そうとするもそこへ無数の光矢が深川めがけて降り注ぐ。

それらを深川は鬱陶しそうに腕を横に凧ぐとその腕から発せられた衝撃波で光矢が霧散した。

「……イシユタルか。」

「……貴方の望みをわかってやれずにいたことは今でも申し訳なく思うわ。けど私らは貴方を消さなければならぬ。………本当にごめんなさい。」

「……お前が消える駄女神。」

そう言いつつ、コズミッククロニクルを起動させ彼は隕石を降らし続ける。

それを悲痛な表情でグガランナで蹴散らしつつ、深川へ絶えず攻撃をする。

エミヤはで熾天覆う七つの円環（ローアイアス）を発動させ、イシユタルらの受けるダメージを少しでも軽減する。

深川は攻撃をしながら1つの妙案を思い付いた。

彼は自分に刃向かう者らに更なる絶望を与えるため、次の手を打つ。

すると妙な面をした巨大な鳥が現れる。全身が黒く染まっており、その尾には巨大な斧がついている。

それは遙か上空に広大な魔法陣を複数出現させ、そこからは巨大な

槍が顔を覗かせる。

「スターアライズクロニクル。数多の仲間と共に絆を深め、力を合わせて最後には神を打倒するゲーム。今出したのはそのラスボス。神の前に滅びろ。」

「不味い！あの槍1つ1つが対星宝具並の威力だ！あんなもの撃たれて地表に激突でもすればこの星が吹っ飛ぶ！いくら何でも地球を吹っ飛ばされたら全てが終わる！なんとしてでも防ぐんだ！」

その言葉を告げるダヴィンチの顔は今までにないほどの焦りを含んでいた。

対して深川はその仮面の下はこれ以上ないほど歪んだ笑みを浮かべていた。

「フハハハハハ！滅びろ……滅びろ……邪魔するものは全て滅びてしまえ！」

その言葉を契機に天から幾つもの巨槍がカルデア目掛けて降り注ぐ。

「エレシユキガル！」

「わかつてるのかわ！」

エレシユキガルはイシュタルに言われるまでもなく空間の幾つかに大きな穴を開けて冥界へと繋ぐ。

槍が地表に激突する前に冥界へ送ることにより星の破壊を防いだ。

だが、その巨鳥は複数のハート型の下半身を斧を変化させ、地面に何度も叩き付けることで衝撃波を発生させる。

その斧を叩きつけた場所には巨大なクレーターが出来、どこからともなく青い形をした何かを出現させ、所構わず青色のレーザー光線を放つ。

そしてそれは赤に変わり、四方八方に光線を放ち始めた。

不規則に放たれた光線の被弾を防ぐために各々が回避するも中には避けきれず被弾した者もいた。

ある英霊は一瞬で蒸発し、ある英霊はその胸を風穴を開けながら屍を晒した。

またある英霊は半身を光線により右半身が消失し、左半身だけになつたものもいた。

この戦いにより大地は抉れ、あるいは消し飛び、地球は戦いの余波で限界を迎えつつあった。

「アハハハハ……消えろ……全て消えろ！ 邪魔する奴は全て消えろ！ 人類も！ サーヴァントも！ 地球も！ 邪魔をするなら全て消してやる！ ハハハハハ……」

その惨状を見て高笑いする深川に一つの声が響く。

「そこまでだ。」

「……あ？」

「今回の事態は元はと言えば僕のせいだ。僕があの時死んでいればこんなことにならなかつた。」

「……だから深川君、君の怒りは全て僕が受け止める。君の痛みも悲しみも全て余すことなく受け入れよう。」

「……今さら善人ぶってんじゃねえよ。お前が……お前が！あの時死んでれば俺は平穏な暮らしを送れたんだからな！」

「……………」

「俺の望みのため、異星の神のため殺してやる。消えろ、ソロモン。」

※A 『壁に耳あり障子に目あり』

「おっぱいっていいよね。正直さ今すぐにも飛び込みたい。そうは思わないか？ムニエル。」

その日、深川はムニエルと飲んでた。二人がこうして飲む程のきっかけは共に書類仕事をこなしていたときのことだった。

隣の部屋から藤丸とマシユの矯声が響き、やるせない怒りに達した二人はやってらんねえ！とばかりにその晩語りあった。

それがきっかけで意気投合し、二人の時間か会うときにこうしてたまに飲んでる。

「どうした急に？確かにわからなくもないけどさ。」

「こっつて結構綺麗な女性多いじゃん？で、中には露出が高い格好してる人もいるじゃん。なんかこうムラムラしない？」

「あー……」

「ムニエルってさどれぐらいのペースで発散してるの？」

「週4だな。っーかお前は？」

「俺は週3。因みに胸が大きくて綺麗な女で発散してる。まあ、俺は昨日マシユとヤツたよ。」

「そうか。………ん？今お前何て言った？」

「いやだからマシユとヤツたよ。」

「……………え？冗談だよね？藤丸君の女だよ？なのにヤツたの？」

「ムラムラしたんだからしようがないじゃないか。」

「何やってんのお前!?嫌、ホント何やってんの!？」

「めっちゃ締まり良かった。」

「聞きたくないよそんなこと！お前……………このこと藤丸君は知ってんの?!」

「嫌、知らない筈。だって言っていないし。」

「そうか……………それは良かった。ホントは良くないけど。お前マジでやらかしたな……………ホント殺されるぞ。」

「嫌、ないだろ。俺別に悪いことしてないし」

「反省の色なしとかお前マジかよ……………」

「だって俺、藤丸のマシユに手を出していないし。」

「……………え？どういうこと？お前マシユとヤツたんだろ？」

「ヤツたよ？俺が魔力で作成したマシユと。」

「……………何だよ驚かせんなよホント。俺、親友が藤丸君やサーヴァントにボコボコにされてる所見たくないからな？」

「アハハハ、俺がそんなことやらかすかよ。大体藤丸君の女は俺らに

取っては地雷だからな。手を出したら最後ボコボコにされるから。そんな薄い本の間男みたいな真似はしないよ。寝取りプレイは好きだけど。」

「……因みに魔力で作ったって言ってたけどそれは他の女性も出来るの？」

「出来るよ？大抵のものならね。何ならこの後作ってやろうか？クオリティは保証するよ？」

「お願いします深川様！」

「ウハハハハ！崇めろ！讃えろ！そして俺の書類仕事の5割を手伝え！そしたら作ってやろう。」

「わかりました！………？今誰かいなかった？」

「気のせいだろ。今何時だと思ってるんだよ。深夜2時だぜ？皆寝てるって。」

「それもそうだな！アハハハ……」

後日俺は呼び出された。

※A 『深川、書類仕事に追われる』

オッス！オラ深川！カルデアに何故か召還されてなんやかんやで

協力にすることになったけどどうやら俺にはレイシフト適性がないらしい。

やったね！天は俺に味方した！前線に立たされなくて本当に良かった。いやー、役に立てなくてごめんね！

本当は手伝ってやりたいけどレイシフト適性がないんじゃないかな。いやー、すまんね！（笑）

ぐだ男、マシユ、君らの力にはなれません！頑張つてキャメロットを攻略してね！

つかこんな一般人の俺が前線何かに経ったら絶対病むわ。だって俺力はあるけどメンタルは普通だし。

で、その内死ぬだろうね。てか行ってくつて選択はマジで馬鹿だから、ホント。

じゃあそんな俺は何やってるかって？

それはね雑用だよ。といっても主に書類仕事だけど。

もうさ、とにかく多いのよ。

色々と報告書とか必要な素材をリストアップしたり大変なんだよ

ゲームみたいに再臨に必要な素材やらスキルマに必要な素材なや

らを各英霊ごとにピックアップしたりさ……

もうさ fate 世界に転生してまで大量の書類に追われたくないよ。めちやくちや多いし。賢王も言つてたけどさカルデアって個人の技量に依存してる節があるのよ。

まあ何が言いたいかというと慢性的な人手不足。そうになると自ずと1人あたりの仕事が増える訳だ。

いや、ホントもう大変だわ。まさかいきなり書類の山を2つ捌けと言われるとはね。しかも心なしか職員が皆ピリピリしてるし。やっぱりこんな状態が続いてるからストレスが溜まってるとんだろうな……

で、俺さ更に今ムカつくことがあるんだわ。

それはね……

『先輩！……先輩！』

『マシユ、マシユ！……』

コイツら隣の部屋でめっちゃ盛ってるのよ。しかもこの部屋にまで聞こえるレベルで。つかそこ代われ藤丸。

こっちは大量の書類に追われて疲れてんのにさ……隣でアンアンやられてみる。

マジでムカつくから。いや、ホントに。

もうさ、本気でぶっ殺してやろうかと何度思ったか。

カルデアごとブラックホールに吸い込んでやりたい

そりやあ確かにさ前線で命張ってた彼からすれば次の特異点攻略までの一時の安らぎの時間なんかも知れんけどさ……

やっぱりムカつくもんはムカつく訳よ。

やるにしてももう少し周りの配慮をしてくんないかな……

っーかマシユの奴どんだけ感じてんだよ。声がこっちまで聞こえるとか相当だぞ。対魔忍みたいに感度が倍になる術でも掛けられたか？それとも藤丸が上手いだけか知らんけども。

おかげで書類が思うように進まない。

誰かアイツら黙らせてくんないかな……

あ、ダヴィンチから呼び出した。はー、ホント面倒だわ。

翌日

今日も相変わらず俺は書類をこなしていた。朝起きて飯食う前に書類をこなす。

食堂でチンタラ食ってる暇はない。ただでさえ多いのだから。少しでも捌かないと。

きりのいいところで朝食を取り、少しの休憩を挟んだら書類。自分の与えられた仕事の多さに辟易する。

《あああっ！》

……また隣の部屋から喘ぎ声が聞こえる。
どんだけヤツてんだよ。性欲お化けかお前は。

隣の藤丸に一抹の嫉妬を覚えつつ、今日も俺は書類をこなす。

翌々日

昨日漸く書類の6割が終わったと思っただらなんか増えてた。
どうやら俺が寝てる間に誰かが置いていったらしい。

今日も書類漬けになることを覚悟しつつ、目の前の書類を捌く

書類生活5日目

いい加減書類を見るのもうんざりしてきた。捌いても捌いても一向に減らない書類。

こんな仕事を割り振った元凶を必ずブラックホールファイニッシュ
することを誓いつつ、今日も俺は書類を

燃やし尽くす。

書類生活 8 日目

ゲーティアアアア……早くカルデアに来てくれエエエ……

この書類の無限地獄から解放してくれエ……

そんな思いを乗せ俺は隣の部屋にブラックホールフィニッシュ！

書類生活 10 日目

書類の山にブラックホールフィニッシュ！

書類生活 15 日目

注意しに来た奴らやサーヴァントにブラックホールフィニッシュ
！

書類生活 18 日目

ギルガメッシュにブラックホールフィニッシュ！

書類生活 25 日目

目が覚めたらここ一週間の記憶がない。何かとんでもないことを
やらかした気がするけど記憶がないからノーカンで。

「……さて、俺はこれからポケモンの厳選するので忙しいからこの辺で失礼するよ。」

「ちよ、待てよ！おい、待てってばー！」

※A 『深川、地球外生命体を召還する』

「それじゃあサーヴァントを召還してくれ。因みに10回回せるからね。」

「わかった。」

愛の霊薬、黒腱、緑の薬、 e t c ……

お？何か光ってる。これは期待出来るんじゃない？

「お前さんが俺を呼んだ奴か。よろしくなマスター？」

現れたのは白のアーマーを主体とし、腰のローブが特徴で、ブラツクホールを簡単に起こせる者。

仮面ライダービルドのラスボスにして本気を出せば地球そのものが失くなってたと言われるぐらいヤバイ奴。

地球外生命体エボルトだった。

そしてこれに対して深川の感想は……

「あ、地球終わったわ。」

※a 『笑えないんもんを見た』

「今年も、今年も鼻についたぞく……ん？扉が開けっ放しだな。ちやんと閉めなさいよ……」

『あつ、あつ！』

「……また盛ってんのかアイツらは。ホント隙あらばやってるよな……どれどれ藤丸はどんな感じで……え？」

『ああつ！』

「え？待って？マシユが今跨がってるの藤丸じゃなくね？」

『私、もう……』

「いや、私もう……じゃねえだろ。え？これってもしかしくなくてもそういうこと？まさかNTR？これどうすんの？藤丸発狂間違いなしだよ。」

『ああつ！』

『藤丸のとどっちがいいんだ?!』

『コマオトさんの方がいいです！コマオトさんの○○○でいっぱいし

て下さい!』

「うわ……これガチの奴じゃん。うん……よし寝よう。俺は何も見なかった。自室に帰ってポケモンやる。」

※ a 『アテレコ』

あれからサーヴァントとして召された僕は色んなことをしてきた。嫌、正確には守護者か。

生前の理想と実際の現実との違いに僕は深く絶望しながらも汚れ仕事をこなしていた。

ああ、誰かが僕を呼んでいる。今度はどんな仕事なんだろう。

そんな思いをしながら召還に応えた。

なのに……

「あ、キリツグさん。今のライドヘイセイバーのアテレコ終わったら次はジクウドライバーのアテレコね。っーことで宜しく〜」

何で僕はこんなことしてるんだろう……

「じゃ、次はジクウドライバーね。」

何故僕はアテレコなんてことしてるんだ……

「ジクウドライバー……」

「ああ、駄目駄目。もっと腹から声だす感じで。頼むよ。アンタの力が必要なんだから。」

意味がわからない。召還に応じて軽く自己紹介を済ませたら急にアテレコすることになるなんて。

こんな年でハイテンションなトーンでハイ！という声を出す羽目になるとは思わなかった。

しかもそれを何回も出せという指令に僕は珍しく混乱していた。

何よりその……恥ずかしい。

「ジクウドライバー！」

「そうそう！そんな感じで頼むよ！次はフィニッシュタイムね。」

早くこれ終わらないかな……柄にもなくそんなことを思う僕だった。

Rest 2 白にも黒にもなる。

※A 『無垢な子供は染まりやすい』

人理編纂を解決してから早数年。

藤丸立香（男）とマシユは結婚し1人の女の子が産まれた。

二人はその娘の名前を藤丸綾香と名付け溺愛した。

これまで二人は様々な修羅場が経験してきた。中には目を背けたくなるような地獄も存在した。

そんな二人が漸く手にすることが出来た人並みの幸せ。

今この家族は言葉では表せないほどの幸福感に包まれていた。

「パパ、ママ、アタシパパたちがどんな仕事してるか見てみたい！
カルデアに連れてって！」

「ごめんね。いくら綾香の頼みでもそれは難しいかな？」

「パパ……駄目？」

「う……しょうがないなあ……」

そしてなんやかんやでカルデアへ。

「ここがカルデア？すごい！」

「あ、こちら！綾香！走ったら転びますよ！……全く……しょうがない娘なんですから」

「アハハ……そんな所もかわいいじゃないか。俺たちが大切に育ててきた愛娘なんだ。少しくらい好きにさせてあげよう。」

「そうですね。貴方。」

「マッシュ……」

「パパー、ママー、早くー！ー！」

「はーい。今いきますからね。」

「ここがしよくどうさん？」

「そうだよ。ここでパパたちは色んなおいしいものを食べてたんだ。」

「ママの料理よりも？」

「……………ママの料理の方が何倍もおいしいよ？」

「何故そこで間が空くんですか貴方？」

「そ、そんなことないよ？」

そしてしばらく見学した後

「ママー、パパー、見て欲しいものがあるの。」

「いいよ。見せて？」

「グーチョキパーで、グーチョキパーで、でもそんなのかんけいねえ！でもそんなのかんけいねえ！ハイ、オッパッピー！」

空気が凍った。何だこれは。いや、正確には知ってはいるが娘の教育上よろしくないため教えていなかった。

バラエティ番組などのお笑い芸人を見せるにはまだ早い。

娘には綺麗に育って欲しいからそういうことから遠ざけてきた。なのに、今日の前の愛する娘がしてるのは何だ？

小島よしおの真似じゃないか。

周りを見ると微笑ましそうにしていたサーヴァントたちも凍っている。

「だいじょぶ、だいじょぶ、だいじょぶ、だいじょぶ、だいじょぶ」

しかもそれを嬉々としてやるのだから笑えない。

誰だ。誰が娘にこんなものを教えた。黒ひげか？

「あ、綾香……？それは誰に教えてもらったのかな？」

「ふかわのおにーさん！しょうらいやくにたつんだって！」

アイツぶっ飛ばす。そう決意した二人は深川の元へと駆けた。

※A 『エボルト、ポケモンを始める。』

「よお、深川。お前今何してんだ？」

「……エボルトか。ポケモンだよ。ポケモン」

「ポケモン？何だそれは？」

「ポケモンつーのはな……くくくくくくというもんだ。お前もやってみる？」

「生憎俺はそんなもんにハマる程暇じゃないんだよ。」

「へえくく」

「……何だ？何か文句でもあるのか？」

「……まあ、星狩り族がたかが人間ごときの趣味にハマる訳ないもんな。あーあ、桐生戦兎や万丈龍我ならなんやかんや受けてくれただろうな。まあ、ハザードレベルが2しかない俺に負けたら恥ずかしいもんね。」

「……いいだろう。やってやる。」

「エボルトオ！お前……お前！トゲキツスは駄目だろ！運ゲーとかふざけんな！」

「案外楽しいもんだなポケモンってのは。特に相手の絶望する顔がたまらなく良い。」

「お前え！」

※A 『深川、ガチギレする』

「くそう……エボルトの奴酷すぎんだろ。陰キャ戦法とかマジクソだわ。アイツ後半笑ってたし。害悪は滅びるべき。はつきりわかんだね。まあ、あとで厳選しよう。」

深川は3DSでポケモンをしながら廊下を歩いていた。それが悲劇をもたらすとも知らずに……

「ナーサリー！走ったら転ぶよー！」

「わかってるわジャック！あつ！」

ドン！↑ナーサリーが深川にぶつかった

ヒュルル↑3DSが宙を舞う音

バキヤ！↑3DSとソフトが地面に激突したことで粉碎

「（。ㇿ）」 ↑何が起こったかわからない深川

「いつそのこと世界中のゴミとかをお前のブラックホールに吸い込ませればゴミ問題解決するんじゃないかね?」

「えー、それは何かやだわ。俺は基本的に力は自分のために使うタイプだし。」

「……話変わるけどさ最近お前ジャンヌさんのことよく見てるよね。まさか惚れたとか?」

「……いやー……」

「え?お前マジで?マジでホの字?」

「うーん。どうだろう正確には一夜の過ちを過ごしたい的な?あの清楚な感じを汚したくない?」

「ああわかるわ。こうギャップがあるよね。」

「そうそう。普段は清楚なのにベッドの上では乱れまくるとか最高じゃね?」

「あれは?マリーアントワネットは?」

「………ないな。俺幼児体型は守備範囲外なんだ。俺は断崖絶壁には興味がない。双丘には興味があるけどさ。」

「お前それ本人の前でいうなよ?」

「わかってるってムニエル。俺この独房から出たらマシユに手を出すんだ……」

「死亡フラグを自らたてるのやめようぜ?」

※D 『もし深川がアナザライダーになったら。』

「Y, Y, Yモバ〜イル。お得な1480こみこみ1480。節約好きYモバ〜イル。……ん？何か時間止まってね？」

「お前が深川か。貴様にはあることをやってもらおう。」

「……げえっ！スウオルツ！何でお前がいるんだよ！やだよ？俺アナザライダーとかやだよ？だって魔王に倒されるのがオチだもん！」

「……お前の意見は求めん。」

「あばばばばー！」

どーも。アナザージオウになった深川です。ホントやってらんないわ。何でアナザージオウごときで魔王一行に勝てると思うのか？
頭大丈夫？

もう、どうせ勝てないんだから好きに生きよう。せつかくだ！この力を思う存分使ってやる！

「ジオウ！アナザーライダーが出た。直ぐに向かうぞ。」

「わかった。行くよゲイツ！」

ウホホホーイ！未来予知最高ー！

只今俺はパチンコで連勝中！

何かパチンコ店入ったら皆逃げつつたけど気にしない気にしない。
よし、一段落したな。じゃ、再び未来予知じゃー！

「そこまでだ！アナザーラ……イ……ダ……ー！」

「……………」

「……………何でパチンコ打ってんの？」

「……………」

「……………」

「……………え？ちよつとゲイツ？あれアナザージオウだよな？何でパチンコ打ってんの？」

「……知るかそんなこと。というか俗世に染まり過ぎてないかアレ？足を組みながら肘突いてパチンコしてるとか……」

チツチツチツチツチツ

「……しかもコイツ未来予知しながらパチンコしてるぞ。」

「……セコツ……取り敢えず今の内に仕留めよう。今パチンコに夢中だし。」

「……気は進まんがいいだろう。」

そしてなんやかんやでアナザージオウが倒された。

Rest 3 悪魔の誘惑

B 『ドン引き』

『それでは会議はこの辺で終了する。最後に今回の議題であるロシアを攻略したカルデアのマスターの対策についてある者から意見を聞いていこうと思う。深川。』

「……ホントにこの場で言うの？あくまで実行すんのお前らなんだから俺が意見してもな……」

『構わない。所見でいいから頼むよ。』

「先ずは環境だな。こう、具体的にはその世界に来た瞬間死ぬレベルの世界にする。空気に毒素があるとか重力が半端ないとか。重力100倍位まで設定出来ればいいね。」

まあ、これが無理なら俺は先ずは冥界を掌握するね。色々と便利だし。

で、藤丸（女）か英霊の家族や友達、恋人などその人に取って大切な人を蘇生させる。もちろん完全な蘇生じゃない。

精神は自由にさせるが身体の主導権はこちらが握る。後はその身体に爆弾を仕込んでおく。まあ爆弾仕込むのは心臓でも脳でもいいけど。

具体的に言うとカルデアのマスターの両親を生き返らせて、感動の再会というところで体内に仕込んだ爆弾を起動。

で、それが回避されてで直ぐに対処しようとしたら

大丈夫だよ！お前なら出来るさ。何、簡単なことだ。君らが今まで倒して来たように目の前の敵を排除すればいい。実に単純明快じゃないか。

さあ、自分の仲間にも命令するんだ。目の前の愛する両親を殺せと。なあに、心配することはない。

彼らは既に死んでるんだ。その死体に君らの十八番の宝具をぶちこんでやればいい。そうすれば全部解決じゃないか。

何を躊躇う必要がある。世界を救うんだろう？なら目の前の敵を排除しなきゃ。それとも君らのその思いは嘘なのかな？ん？的ない感じで煽る。精神攻撃は基本だし。

それでカルデアのマスターもろともドカンという訳だ。

あ、後はオルガマリ―所長を生き返らせるのもいいな。

生き返らせた後はこちら側に墮として彼女をカルデアと戦闘をしてもらう。

で、その際に煽りも入れる。

俺を倒したかつたらまずは彼女を倒さないかね。

……1ついい方法を教えてあげよう。彼女は今この現状を打破するための要だ。彼女を倒せば俺も、彼女も、おしまいだ。

いいアイデアだろう？又ハハハハハハ………

やれるもんなら、やってみな。ウハハハハ………的な感じで。

で、倒そうとしたら、

へえ、彼女を倒すんだ？レフにより爆殺され、霊体となった時はカ
ルデアスに吸い込まれ、そこでは無限にも等しい地獄を味わった彼女
はせつかく人の身体を手に入れて生きているのもう一度殺すんだ
？

かーっ！流石人理を救う機関はやることが違うわー！

あーあ、可哀想になー！彼女また死ななきやいけないなんてなー！

まあ、君らは世界を救うんだもんね！ただ誰かに認められたかった
だけの女性の願いなんて君らからすればゴミみたいにもんか！そ
りやあそうだ！

世界を救うのにいちいち個人の事情なんて構ってらんないよね！
わかる、わかるよー！みたいなの？

あ、後は幼い子供なんかの身体に狂化の術をかけて爆弾積ませて自
爆特攻させるってのもいいな。

こう、純真無垢な子供を殺めなければ先には進めない現実に絶望す
れば尚良いよね。

……………何だよ？」

『……………それは……………』 ↑キリシユタリア

『お前……………マジか……………』 ↑ベリル

『貴方いくら何でもそれは……………』 ↑オフエリア

『……私らが言うのもあれだけどそれはちよつと引くわね。』↑ペペロ
ンチーノ

『……………』↑コイツやべえみたいな目のヒナコ

「……………貴方元一般人らしいですけど絶対こちら側の人間ですよ？」

「はあ？俺なんか可愛いもんだ。俺なんかよりエグい人はいるからね？つーかコヤンスカヤ。俺は断じてお前ら側の人間ではない。俺みたいに優しさに溢れる人間はいないよ？」

『『『それはない。』』』』

「シバくぞお前ら。」

※A 『深川、開き直る。』

「働け〜馬車馬の如く〜有休ゼロ会社の奴隷マン。ハイパー社畜〜
リーマン〜。ハイパー社畜り〜マン」

「深川さん、皆さんがお呼びです。」

「……………あ、おはようマシユ。」

「……………おはようございます。取り敢えず会議室にまで来て下さい。」

「……………何だろう？まあいいか。」

「皆さん、深川さんを連れて来ました。」

「あぁご苦労様。深川君を呼び出してくれてありがとう。さて、深川君何故呼び出されたかわかるかい？」

「……………全くわかりません。」

「……………君、ブラックホール出したろ？」

「……………あ。」

「そして、あろうことかナーサリーをボコボコにした。」

「アハハ……………」

「これは笑い事じゃないよ深川君。ナーサリーをボコボコにしたのもそうだが、何故1職員である君がそれほどの力を持つてるんだ？」

「エボルトからもらいました。」

「エボルト？」

「俺が召還した奴です。何か生前はこことは違う地球を滅ぼせる力を持ってたらしいです。ブラックホールがその例です。」

「……………なら何故ナーサリーらをボコボコにしたんだい？」

「アイツが俺のポケモンを台無しにしたからです。」

「……ポケモン？」

「あのクソg……彼女らがぶつかって俺の3DSがその衝撃で地面に落下し破損、結果データがパーです。」

俺のガブリアスもバンギラスも色ちがいのルカリオやリザードンも全部パーですよ。ごめんなさいで済むことじゃないんでボコボコにしました。」

「……………確かに君がポケモンをやりこんでいるのは知ってる。けど子供のやったことだろう？それも故意ではないらしいじゃないか。大目に見てあげるといふことは「ないです。」……」

「子供だから何でも大目にみるとかそんなの甘えですよ。子供だろうがやってはいけないこともありますしごめんで済まないこともある。確かに俺もやり過ぎた感は否めませんが元はといえばアイツが悪い。」

「まあ、何が言いたいかというと、俺は悪くない！ってことです。今でも別に後悔とかしてませんし。」

「……………そうか。とは言え君がブラックホールを起こしたことに付いてのカルデアの損害はどうするんだ？君のブラックホールのせいで食料庫が無に帰った。どうするんだ？」

「どうすると言われましても……私はそういう食料関連のことに詳しくないんで聞かれても返答に困るといいますか……何せ私は書類捌きを専門とする職員なんで。」

「……………いや、そういうことを聞いてるんじゃないんだ。今回のこ

とに對してどう責任を取るのか?ということだよ。」

「……責、任?聞き間違いでしょうか?責任を取れと聞こえたのですけど……仮に取るにしても私は先程も言った通り書類捌きを主とする職員。責任を取ろうにも取りようがありません。始末書位なら書けますけど。なので、そのようなことを聞かれても……」

「……………そうか。ならせめて彼女に謝罪するのだけでもどうだい?」

「謝罪?誰にですか?……まさかそこにいるナーサリーさんにですか?私が彼女に謝罪する?ハハハ、ドクターもご冗談がお上手ですね。」

……………天地がひっくり返ってもありません。もう俺の元には彼らは戻ってこない。厳選に厳選を重ねたガブリアスもバンギラスも色ちがいのルカリオもも戻って来ないんですよ。」

「まあ確かに俺のせいで食料庫がパーになったというのは変えようがない事実ですし否定もしません。ですがことポケモンに関しては彼女の責任では?何でもかんでも私が悪いというのはそれは少し違うのではありませんか?」

(……………なんて言えたら良かったけどね。ここは普通に謝るか)

「……………聞いているかい?ポケモンのこともわかるが君はもう少し寛大になつた方がいい。流石にボコボコにするのはやり過ぎだ。」

「本当にすいませんでした。取り敢えず独房で反省しようと思いません。」

「……というのが俺が独房に入るまでの経緯なんだわ。」

「……お前それは正解だな。そこで下手に開き直ると状況が悪化する可能性があるからさ。やっぱり自分から反省するって言ったのは正しいよ。」

「いやー、ホントあの時マジでプツツンしたからね。冗談抜きで頭真っ白になったわ。ムニエルだつてキレルよ。」

悟空が超サイヤ人になったのもこんな感じなんだろうなって思ったよ。俺がサイヤ人なら絶対覚醒してたよ。もうお前は謝っても許さんぞこのクズヤロー！的なの？」

「お前どんだけキレたんだよ……」

「しかもこの後俺独房から解放されたら始末書書かないといけないんだよね……ホント面倒だわ。」

「……まあこれに懲りたらゲームは自室でやることだな。」

A 『美味しいものは独占したくなる。』

現在カルデアは深刻な食糧難に陥っていた。

理由は深川が以前ナーサリーが結果的に深川のポケモンのゲームデータを壊すきっかけを作り、それに激昂した彼がブラックホールを起こして食料庫がパーになったからだ。

そんな中

深川は極上の食材を食していた。

「かーっ！ やっぱり久しぶりのシャバの空気を吸いながら自室で食べるズワイガニは美味いわー！

魔力で作ってそれに昇華を掛ければ簡単に出来るし

厨房を使わずにウイザードライドウオツチ擬きを使えば

火なんて簡単に起こせる上にバレる心配もない。

周りが缶詰めやカロリーメイト食ってる中一人だけこの極上の食材を食べるとか優越感半端ないわー！

今頃アイツらはひもじい思いをしながらカロリーメイト食ってるんだらうなー。

いやー、ホント可哀想！ まあこれらを上げるつもりはないけどね
」

「おーい深川、一緒にスマブラしよう……ぜ……」

「……………モグモグ……ゴクツ」

「……………」

「……………ゲフツ」

「……………お前それ」

「シヤラツプ！ムニエル。君は何も見なかった。いいね？」

「いやでもそれズワイg」

「Be quiet！君は優しい人間だ。親友のことをチクるのか？」

「……………いや、でも流石にこれは」

「黙ってくれたら君にもズワイガニをあげようじゃないか。周りが粗末な物を食ってるなか密かに食べる高級食材は格別だぞ？」

「……………ゴクツ」

「大丈夫だ。気にする必要はない。ムニエル、お前は女にも恵まれず来る日も仕事に追われていた。これぐらいのご褒美があっただっていいじゃないか。早くしないとズワイガニがなくなるぞ？」

「お、俺は……」

「君の、ムツチャ……判断一つで、ハムツ……ズワイファニははべらへるんはぞ。ゴクツ。さあ、どうするムニエル。下らない正義感に基づき俺のことをチクるか、共にこの食材を味わうか。」

「……………」

「選べ。俺はどちらでもいい。」

「……………サイ」

「んん？聞こえないなあ？」

「俺にも！ズワイガニ下さい！」

「フハハハハ！良かろう。君にもズワイガニをやるうではないか！」

「……………美味え！……………美味えよ！」

「だろう？そうだろう？これは二人だけの秘密だ。このことを守るなら君にもっといいものをあげよう。」

「俺、今まで頑張って良かったよ……………」

Rest 4 平穏な暮らし

※A 『深川、セールス事業を始める』

オッス！オラ深川。

前回カルデアの食料庫をブラックホールフィニッシュした責任として食料庫の建て直し及び大量の食料の補充をの料金を払うことになりました。

その復興のせいで俺の個人資産が飛ぶことになりました。で、今その支払いをしないといけない。

本当にヤバすぎ。めっちゃ金かかるわ。

いやー、一億もあつたのに結構飛んだな。

どれだけ飛んだか？7000万飛んだよ？

え？何でそんな飛ぶかって？

何か建て直しやら事実の秘匿やらその他諸々でそれぐらい飛ぶらしい。詳しくは知らん。

ということまで今から俺は金儲けする。そして成功してついでに資金力があることをちらつかせてやる。

これで向こうは俺のことを無下には出来ないはず。

……たぶん、きっと。

前回の株をジオウⅡ擬きで未来予知して大儲けは避けた方がいいな。

あんまりやると目をつけられる。コイツインサイダー取引やってんじゃね？とかで検挙されたら笑えない。

あまりにも儲けすぎという理由で。

うーん。どうすればいいかな……せや！

イヤツフウウウウ！

がつぽがつぽ金が入る！やっぱり金儲けはやめらんないわ！

他の人が必死に働いてる中大して苦勞せずに大金を手にするのは何ともいえん優越感がある。

ん？何をしたか？それはね金持ちの高齡者またはその他等をターゲットとした商品の販売だよ。

これを飲めば健康になりますとかいう系の奴。

え？それ詐欺だろ？つて？

いやいやいやいや、そこが他の奴らとは違うんだよ。

俺が販売したのは何を隠そう仙豆擬き。

作り方は簡単。枝豆に昇華をかければ完成だ。

擬きとはいえ仙豆だから効果がないはずがない。

これはマジで効果があるからそこらのもんとは訳が違う。

まあ、病気を治せる訳ではないけど。

あくまで怪我や疲労を回復するもんだから。

取り敢えず片っ端から仙豆と似た形をした枝豆を買い占めまくっ

たわ。

何故かスーパーの人には変な目で見られまくったけど。

あ、上記をターゲットにした理由は単に金を持つてるからだよ。

これ貧乏人に売り付けても意味ないからね。

因みに仙豆擬きの1粒の値段は200万
それを5個セットで売る。値段は800万ね。
5個セットで買ったら1個分お得にしてある。

まあ、何個欲しいかはその客によって違うからそれにより値段も変わる。

まあ、最低でも200万だね。

え？高すぎ？妥当じゃね？飲めば腹も満たされ、しばらくは食事を取らなくて済むし大抵の傷はこれで治ることも実験済みだからむしろ安くね？

これがあればいちいち怪我や重傷で病院いなくてすむんだよ？
骨が折れたとか全身打撲とか欠損した手足の再生とかはこの仙豆擬きを飲めば一瞬とはいかなくても病院にいつてわざわざ治療するより早く治るんだよ？

おまけに体力の回復もあるし。

まあ、それが嫌なら別に買わなくてもいいよ？
別に初期費用そんなかかってないし。

え？効果はどう実験したか？ある程度出来た仙豆擬きを職員の人らに食べてもらって効果を検証したけど。

で、わかったのが以下の効果

5日は何も食べなくても問題なく活動できる。

そして俺は手足が欠損してる人や骨が折れてる人のところに言っ
てあの豆を食わせた。

で、わかったのが

一瞬ではないが5分で怪我は完治する。

体力の回復

欠損した部位の再生等

いやー、擬きとはいえ十分な性能だわ。

効果を確認するためにそれなりの費用がかかったけどまあ、それ
に
関してはしゃーない。

特にカルデア職員ね。

ブラックホール起こして食料庫パーにしたやつなんて周りからす
ればマジでふざけんなって感じだし。

だから実際これ食ってって言った時はマジでコイツ何食わせよう
としてんだ？的な感じで見られたもん。

それに藤丸君を慕ってる人からは余り快く思われてないみたいだ

し。

まあ、ヤバくなったら逃げるわ。ムニエルは相変わらず俺と接してくれてるけどね。

え？これ藤丸君やサーヴァントにあげないのかって？彼ら前線に立つからそういうのは必要だろ？つて？

あげないよ？逆になんであげなきゃいけないの？

これ全部俺のもんだし。俺のもんだから俺がどう使おうと自由じゃね？

あ、因みに今は人理修復が終わった位の時期ね。

いやー、あれは大変だったわ。カルデアに侵入した魔神柱たち。ホントに危機感覚えたわ。

え？お前戦わなかったのか？

戦う訳ないじゃん。何で一職員である俺が前線に立つんだよ。ないわー。

そういうのはサーヴァントの仕事なんで。

俺はその頃避難してたから。

え？ロマン？生きてるよ？何かなんやかんやあつて。詳しいことは知らん。

まあ、それは別の機会に語るとして。

……話を戻すけどホントは1つ100万とかでもいいけどそれだとさすがに売上減るかもしれんから却下。

セールスに向かわせるのはこっちで雇った人間にする。

時給1500円のお仕事みたいな感じでバイト募集したらすぐ集まったわ。まあ、雇う前に契約書書かせたけど。

で、概要を説明してターゲットに向かわせる。もちろん俺の能力のことは伏せる

あ、契約違反したらマジで罰することも伝えてるから。具体的にはこんな感じ

こちらの許可なく勝手に第3者に販売しない。

転売禁止。情報漏洩するな。バカッターみたいな真似すんな。貧乏人には絶対売るな。金があるやつに売れ。

反社会には売るな。

因みにアジトは新宿のとあるマンションを借りた。

え？もろヤバい奴がたむろしてそんな感じのところ？

そんなことないよ？雇ったのは普通の奴らだよ。反社会勢力なんて関わったらろくなことにならんから。

それに会社立ち上げるの面倒だし。

まあ、黒に見える白が実態のため警察なんて全く怖くない。

家宅搜索？上等だよ。来るなら来てどうぞ。逆に土下座させてやるから。こう、実は何もありませんでした。疑ってすみません的な感じで。

実際何もやましいことないから。法に触れることはしてないからね。あ、能力はバレると面倒だけど。

それに最初は売上が悪かったかど最近では売れてる。

半信半疑で買った客が効果が現れたら口コミしてくれるからね。

おかげで俺の今の総資産は30億だわ。

あ、そういや途中仙豆擬きの噂を聞きつけたらしい奴が涙ながらに懇願して売ってくれとか言うやついたな。

お願いします。両親を助けたいんです。重傷から救いたいんですとか何とか言いながら涙ながら土下座してたな。

金は？って聞くと今はないけど借金してでも払うからとか妄言垂れてたから帰らせただけ。

貧乏人に売るものはない。金が払えない奴はとっと帰ってね！すぐでいいよ！みたいなこと言ったら泣きながら帰ったな。

生憎こっちはビジネスでやってるんで。人助けのつもりでやってないから。まあセーフじゃね？

え？お前その内刺される？
ハハハ、逆に返り討ちにしてやるよ。ブラックホールフィニッシュで。

俺を殺せる奴なんてビーストの奴らとか神霊とか千里眼持ち、グランドクラス系統位しかないし。

……結構いるな。

つーかそろそろ潮時だな。十分金儲け出来たしこのビジネスはや

めるか。

あんまり有名になっても面倒だし。

あ、ムニエルにお土産買ってこ。

※b 『深川、ロシア巡りに出かける』

「カドックくん！あーそーぼー！」

「五月蠅い。そんな大声で叫ばなくても聞こえてるから。というかお前仕事はどうした？」

「え？コヤンスカヤにぶん投げて来たけど？」

「何やってんだよお前……」

「そういえばアナスタなんちゃらはいないの？」

「アナスタシアな。彼女は今外出してる。用があるなら俺が聞く。」

「じゃあさ、単刀直入に聞くけどアナスタシアとはどのぐらいのペースでやってるの？」

「お前、話のレベルが男子校レベルじゃないか……」

「だってさー、一番なんやかんやで話相手になってくれるのがお前だけなんだよ。オフエリアはなんか忙しいみたいだし、ヒナコは終始無視するし、ペペロンチーノはどっか行くし、ベリルはこの前部屋に行ったらマシユの名前を呼びながら何かやってたしキラシユタリアは今キレてるし。」

「……………何でキラシユタリアはキレてんだ？」

「何かポケモンの対戦でフルボッコにしたらめっちゃ不機嫌になった。」

「お前何やってんだよ……」

「だって対戦しようと言ってどんな奴出してくると思ったら伝説ポケモンばかり使ってるんだよ。あまりにも雑魚すぎたからボコボコにしたんだ。剣の舞い積んだガブリアスの逆鱗でいちころですよ。」

「……………もう少し手加減というものをだな……」

「そういうカドックだってこの前オフエリアをユキメノコでボコボコにしてマジで泣かせてたじゃん」

「だってあまりにも雑魚かったし……」

「まあ、そのおかげで俺はオフエリアと慰めツクスした訳だが。」

「オイ待て。今何だった？」

「……………あ。今のノーカンで。」

「待て。お前オフェリアに手を出したのか？」

「いやー、そんな訳……ちよつとベッドで慰めてただけだから。」

「……やっぱり手を出してるんじゃないか。」

「……アハハ。でもさ正直いうと手を出すつもりはなかったんだよね。だって彼女絶壁だし。こう……悲しくならない？カドツクだってアナスタシアとやる時胸を結構苛めるって聞いたけど」

「……おい。何で人の営みについてお前が知ってるんだ。」

「コヤンスカヤに聞いた。で、どうなん？」

「……まあ確かにそういうのは多かったかもしれない。そういうお前は どうしてオフェリアに手を出したんだ？」

「何かさ……彼女お堅いイメージあるじゃん？」

「……まあ否定はしない。」

「そういう人間は一度崩してこつちのものにすればズブズブハマると思うからさ……後彼女結構いい声で啼くんだよ？カドツクの所のアナスタシアだってそうじゃないの？」

「……確かに言われて見ればアナスタシアは堅いイメージがあるかもしれない。それに彼女はああ見えてSっ気があるというか……つて何言わせてんだ。」

「いや、お前が自爆したんだろ……話変わるけどお前を何かゴツイ格好した奴が探してたぞ？」

「……ああ、わかった。ありがとな。」

「さて、いるんだろアナスタシア？こっちにおいで？この前みたいにたくさん可愛がってやるから。」

「……本当にいい性格してるわね貴方。」

「アハハ……でもなんやかんやいっても俺と愛しあうのは拒まないじゃん。」

「……しようがないじゃない。もう貴方のじゃないと満たされない身体になったんだから。」

「本当に可愛いな。今日は寝かさないよ？」

「……………バカ」

「………つていう夢を見たんだ。どうしたの？カドック？青筋ヤバイよ？」

「お前アナスタシアに手を出したらぶっ殺すぞ。」

※b 『理想郷』

とある辺境の星

そこでは一人の人間が平和に暮らしていた。

「……大自然の中である昼寝も悪くないな。さて、そろそろ家に戻りますか。」

日の光がまだ辺りを照らし、木々が生い茂る森林。

川のせせらぎや小鳥のさえずりが聞こえるような環境で昼寝をしていた男、深川が目覚めます。

そして、しばらく歩くと一つの軒家につく。

深川が家の中に入ると一つの影が彼の元に飛び込んでくる。

「ワウツ！」

「おー、元気にしてたかシエパン。」

それはホワイトシェパード擬き。深川は一人で暮らしていたところに孤独さを感じて魔力でシェパードを作った。そして、それに昇華をかけた。その結果、本物に近いホワイトシェパードが生まれた。

「今日の昼飯はお前の大好きなアップルパイだぞ。」

それに対して嬉しそうに深川の周りを駆け巡るシエパン。その様子を見た深川は思わず顔が綻び、抱き抱えた後白い毛を優しく撫で回す。

のどかな星。そこには深川とシエパン以外の生命は存在していないため外敵もない。

「ワウツワウツワウツ！」

「……ん？散歩したいのか？全く、しようがないな……じゃあ行きますか。くれぐれも迷子にならないようにな？」

「ワウツ！」

「本当にここまで長かったな……」

彼はこれまで散々な目にあってきた。

死亡フラグが跋扈する世界に生を受け、その世界で生き残るために地球を捨てて逃げるも、いつの間にかカルデアに召還され、人理修復に協力することとなった。

ゴルゴーンやティアマトなどの化物を倒したら今度はゲーティア。何とか生き残り、地球を脱出して数々の星を巡ってきた。中にはエイリアンやおぞましい化物もいたが、何とか乗り越えて旅をしていく内にこの星に巡り会え、今の暮らしを手にいれた。

そんな彼が漸く手に入れた平穏な暮らし。今彼は間違いなく人生で一番の幸せを迎えていた。

深川が今までのことを振り返っているとシエパンが彼の足元にすり寄る。

「ワウツワウツ！」

「はいはい、今行くから急かすなって。」

「全く……お前は本当に元気だなあ。まさか散歩でこんなに歩くとは思わなかったよ。」

「クウウウ……」

「そんなへこむなよ。別に責めてる訳じゃないからさ。お前との散歩を苦痛に思ったことなんてないから安心しろって。な？」

「ワウツ！」

「アハハ、急に飛び付くなよ。本当に可愛いなお前。どうする？このまま昼寝でもするか？」

「ワンツ！」

暖かい風が吹くなか昼寝をする深川とシエパン。

そんな彼の寝顔はこれ以上ないほど穏やかだった。

Rest 5 俺は悪くねえ!

C 『女性には優しくしよう』

「……グスツ……スンツ……私……スンツ……やっぱり……需要
ないのかしら……」

「そんなことないですよ。オフエリアさんは綺麗ですよ？ね？芥さん
？」

「……ええ、そうね。貴女は十分綺麗。あのバカの言うことなんて気
にしないでいいの。」

むせび泣いてるオフエリアを慰めているコヤンスカヤとヒナコ。
コヤンスカヤはオフエリアの背中を擦り、少しでも落ち着くようにし
ており、ヒナコは彼女に慰めの言葉をかけつつ、深川に対してゴミを
見るかのような目をむける。

オフエリアがここまで泣いてる原因は深川とのあるやり取りに
あった。

時は数時間前まで遡る。それは深川が北欧の異聞帯に遊びに行っ
た時のことである。

へー、オフエリアって魔眼持ちなんだ。すごいじゃん。
あれか？私の目を見たら死ぬとかそんな感じ？

……そこまで強くないわよ。まあ、それなりには強いわよ。

ああ、だから眼帯してるのか。魔眼を隠すために。

……ん？てことはオフエリアっていつもその眼帯してるってこと
だよ。ずっと着けてるの？

……ええ、そうね。

……寝てる時もずっと？

……それが何？

……目の下がすごい蒸れてそう。

なんかこう……眼帯外したらむわっと臭気が漂いそうな感じがす
る。

もしそうならちゃんとケアした方がいいよ？こう色々忙しいの
はわかるけど。今時眼帯の下から臭気がする女性なんて需要ない
よ？

このことが原因で冒頭に至る。

そしてその事を聞かされた男性陣の反応は

「……悪いことは言わない。謝った方がいい深川。流石に女性に対してその発言は私もどうかと思うぞ。」

「……同感だな。これはマジで謝った方がいいぜ。」

オフエリアがこんなマジ泣きしてるとこなんて初めて見るしあのコヤンスカヤでさえフオローに回るなんて相当だぞ?」

「……流石に俺もどうかと思うぞ。」

この現状に流石にギリシユタリアら男性陣も深川に謝罪を促すが、深川の返答は謝罪ではなかった。

「お、俺が悪いってのか……?お、俺は悪くねえぞ!だって……だってこんなことになるなんて思ってたんだ!それに普段オフエリアはいつも同じ眼帯つけてるからそう考えるのは何も不思議じゃねえ!」

大体、お前らがそのことに関して予め説明してればこんなことにはならなかったんだ!俺ばつか責めるな!」

「貴方、流石にそれは非常識ですよ?一般人とか事前の説明がどうとは関係なく。女性は繊細なんですから発言には気をつけて下さい。悪いことをしたら謝るのは基本ですよ?」

「……貴方ってこの前の発想もそうだけど性格も酷いわね。」

どこぞの親善大使を彷彿とさせる物言いをする深川に対してこれ以上ない正論で返すコヤンスカヤ。そしてついでに深川のことも軽く非難するヒナコ

「う、うるせえコヤンスカヤ！お前が常識を語るな！謝ればいいんだろ！謝れば！」

四方八方からの非難の眼差しに流石の深川も応え、現在体育座りになつてるオフエリアの前にしゃがみこんで優しく語りかける。

「あー、その……オフエリア。」

「グスツ……グスツ……なによ……どうせ私なんか……」

「………本当にごめん。お前は綺麗だしスタイルもまあいいほうだ。だからそんな泣かないでくれ。泣いてるより笑ってくれた方が俺は好きだからさ。」

「……グスツ……じゃあどうして……あんなこと言うの……？」

歯が浮くようなセリフをつらつらと並べる深川。これがニコポナデポ持ちの主人公ならここでオフエリアは完堕ちしてただろう。

「いや何かそう思ったから。」

だが、深川はどこまでも深川だった。

「……………グスツ…ウツ…ア、ア、ア、ア！」

止めの一撃に堰を切ったかのように涙が溢れ出すオフエリア。

「……………最低ですね。貴方、オフエリアさんに何か恨みでもあるんですの？」

「これだから人間は……………」

この後深川は数時間に渡ってコヤンスカヤとヒナコから説教されたそうなの。

B 『親しき仲にも礼儀あり』

とある一室ではこれまでにないほど重い空気が漂っていた。
その部屋にいるのはロマンと深川。今、この二人はあることで揉めていた。

「ロマン、お前さ……………俺言ったよね？」

「……………」

「人の大切なものを奪うようなことはやめろってさ。」

「すまない……」

詰問するかのような口調で喋る深川にただ謝罪の言葉を並べることしか出来ないロマン。そのことに対して深川の怒りのボルテージが少しずつ上昇する。

「俺さ……最近結構大変な目にあっただけどそれを何とかお前らの力を借りて乗り越えられた。ゲーティアのこととかね。それは感謝してるよ。でもさ……何でこんなことするかね……」

「……………」

そう、深川はゲーティアに拉致され、そのまま戦闘になり、ゲーティアを後一步まで追い詰めるも制限時間の関係で窮地に陥った。そこにカルデアが深川を救出し、力を合わせてゲーティアを倒すことで深川は危機を回避することができた。

このことを受けて深川はカルデアに対して心を少しずつ開き、今ではロマンとは深い交流をしている。

そんな彼がここまでロマンに対して怒ってるのには理由があった。

「何で人のもんに出すかね……何で、何で……」

「何で俺の最高級メロンを食べるんだよ!？」

「お前ふざけんなよ!?!あれ俺がめっちゃ楽しみにしてんだぞ！」

「百歩譲って一口だけならまだいいよ??でもさ普通全部食うやつがいるか！」

「……とても美味しかった。この世のものとは思えないぐらい甘かったよ。」

「ぶっ飛ばすぞお前!マジで顔面にブラックホールかましてやろうか!？」

「すまない……本当は全部食べるつもりはなかったんだ。一口だけもらおうと……ただ魔が差してしまって……気がつけば全部食べていた。」

「尚悪いわ!あれめっちゃ高いメロンなんだぞ！」

「こう……甘味の誘惑には勝てず……僕としたことが……」

「カッコつけてるけどお前めっちゃしようもないこといつてるのわかる?!」

「僕だって……僕だって甘いものを食べて至福の一時を味わいたいんだ！」

君のメロンを食べてしまうのもしよう☒?がないじゃいか！」

「えな○か○きの真似すんな！開き直るとかお前ホント……」

「お詫びと言ってはなんだけど君の書類仕事減らしとくよ。」

「いや、お詫びにすらなっていないからな!?!この上まだ書類をやれと?!しかも免除ではなく減らす?鬼か!!俺は忘れんからな!疲れたところに2つほどの山がある書類を捌けと言われたこと!」

「だって君書類を捌くスピードが異常に早いじゃないか。2つの山の書類を30分で捌くし。だからそれだけ君に頼らざるを得なくて……」

「……あれは俺がゲイツリバイブ擬きの力を使ったから……書類のこととはまあいい。それよりメロンだよ!メロン返せ!」

「返したいのは山々だけど生憎メロンは僕の胃の中で溶けてるから無理だ。ごめんね?」

「もういいし!藤丸に言いつけてやるわ!藤丸く!」

d 『深川、大事なもんを盗まれる。』
とある世界。そこで深川は平和に暮らしていた。

深川はスペースストーン擬きの力を使って平行世界に移動した。

そこは正義の味方がご飯を作ってそれを色んな人が美味しく食べる世界。

だがある日、そんな平和な世界で深川はあるトラブルに巻き込まれていた。

「これがスナップするだけで絶大な効果をもたらすインフィニティガントレットの擬きか。中々いいお宝だね。」

「…お、お前は…海東大樹！何でこんな所にいる!?!てか返せ！デイケイドにチクるぞお前！」

「君にそんなことが出来るのかい？生憎彼は君の用事でわざわざここに来るほど暇じゃない。」

「うっせバーカ！お前窃盗罪で訴えるぞ！返せ！人のものを盗んだらいけないというのは子供でもわかる常識だぞ！」

そう言いつつ深川はライドウオッチ擬きを起動させ、

『エボルブラックホールフォーム』

「そっちがそう来るならしようがない。」

それに対して海東はネオディエンドライバーを構える

『カメンライド』

「変身」

『ディエンド！』

エボルブラックホールフォーム擬きとなった深川はディエンド目掛けて迫り来る。

「いきなりエボルトの力か。なら、これならどうだい？」

『カメンライド！メテオ！』

『カメンライド！クローズ！』

仮面ライダーディエンドとなった海東は二枚のライダーカードをディエンドライバーに装填した。

「さ、どうぞ。」

ネオディエンドライバーの銃口から放たれ実体化した仮面ライダーメテオと仮面ライダークローズが深川に襲いかかる。

クローズがその拳でブラックホールフォーム擬きの胸のアーマ―を殴り付け、メテオが背後から蹴りを放つ。

『アタックライド！インビジブル』

そしてそうこうしてる内にディエンドは姿を消した。

「あの、ヤンホモ野郎………！」

それと同時にクローズとメテオが消え、深川の悔しさを含んだ叫び声が届きました。

b 『過去の所業はついてまわる。』

とある会議室そこでは重苦しい空気が流れていた。そんな中ある男が切り出す。

『現在カルデアが北欧の異聞帯に侵攻している。既にワルキューレらは撃破され、その勢いは留まることを知らない。このままではオフエリアが負けるのも時間の問題だ。そこで諸君らにはカルデアを確実に仕留めるための足止めをしてもらいたい。だがそれにあたって、何か具体的な案が欲しい。』

『もういつそのこと深川がまとめて殺ればよくねえか？それならサクツと終わるだろ。』

「めんどいからパス。俺今リンボとジエンガしてるから。」

だが、我らが主人公深川はリンボとジエンガすることに夢中でまともに取り合おうとしない。

『……………貴方復讐するんじゃないの？』

「いやー、復讐もあれだけどき。やっぱり自堕落な生活が一番だよ。ここでグータラするの最高だし。お前らのとこの異聞帯に遊びに行ったらご飯出てくるし。」

そんな様子を見たヒナコは呆れの表情を浮かべるも特に深川はそれを気にすることなくジエンガを続けている。

『……ニート思考の深川はさておきペロンチーノ、なんかいい案はないか?』

最早深川のニートの考えは今に始まったことではないためこの男はそういうものだと考えるようになったキラシユタリア。

彼は当初深川のことを認めていた。单身ティアマトを撃破したその手腕は見事という他なかった。

そんな男が自陣営に入ると聞いた時は歓喜に溢れた。が、実際はどうだ。

あれだけの力を持ちながら特に何をするまでもなく、ただぶらぶら異聞帯を満喫する日々。

食っては出掛けて、帰ったら寝る。

そんな様子を見たキラシユタリアは自分の中での深川に対するイメージが音をたてて崩れていくのかわかった。

『……やっぱり深川ちゃんに行ってもらうのが一番じゃないかしら?それに貴方この前オフェリアちゃんを泣かせたのだからその責任として助けに行つてあげたら?』

「げ。そうくる？……俺オフェリアの異聞帯行くと尋麻疹が出る病気に今掛かってるからちよつと……」

思わぬ展開に少し焦り何とか適当に理由をつけて行かないようにする深川だが……

『決まりだな。』↑キリシユタリア

『決まりだな。』↑ベリル

『決まりね。』↑ペペロンチーノ

『同じく』↑ヒナコ

満場一致で深川がオフェリアのもとに向かうこととなった。

「お前ら俺の扱い酷くない？」

Rest 6 怠惰

『炬燵は悪い文明』

ゴミ、ゴミ、ゴミ。目のつく所にはゴミがちらかつていた。みかんの皮、ティッシュ、抜けた髪の毛、埃など多岐にわたる。

そんな一室では二人の男女が炬燵に入っていた。

「オフエリアくみかん取って〜」

「しようがないわね……ほら、これでいい?」

「あぎす。サンキューオフエリア。流石の魔眼持ちは違うね。」

「魔眼関係ないと思うのだけど……それはそうと貴方いつもこんな自堕落な生活してるの?」

「まあね。炬燵入りながら食べるみかんってめっちゃ美味しいよ?あ、ポテチの空袋捨てるからそこのゴミ箱取って。」

「それ位自分で取りなさいよ全く………というか貴方よくこんな部屋で生活出来るわね。」

「人間やっぱり適応力だよ。環境に適応すりや大抵のところでは生きていけるんだから。」

「この環境には適応したら不味いと思うのだけど……」

……まあ、いいわ。深川、貴方ここを掃除するから炬燵から出なさい。私も出るから。」

「えくやだく。俺出たくないわ。」

「いいから出なさい!! 貴方このままじゃ身も心も自堕落になるんだから!」

「やくだ〜ね〜! やくだ〜ね〜! 絶対絶対絶対絶対出ないもんね〜」

「お前ら何してるんだよ……」

そこへやってきたのはカドック。

彼はロシアの異聞帯陥落の際に深川が回収したことなよりことなきをえていた。

だが、アナスタシアを喪い失意に暮れていた彼は暫く部屋に引きこもった。

それ以降彼は毎日自堕落な生活をしている。

「おー、カドック聞いてよ。オフエリアが炬燵から出るとか抜かすんだよ。」

「オフエリア、こいつは真性の駄目人間だから矯正するだけ無駄だぞ。こいつはだらけることが生き甲斐みたいなもんだからな。」

「そうだ! そうだ! もつと言ってやれカドック!!」

「……………ニートを極めてるこいつは余程のことがないと動かない。それにこいつはやる時やるから普段の生活は好きにさせてやればいいんじゃないか。」

「そうだぞオフェリア。俺はニートなんだ。ニートに説教してどうするんだよ。」

「……………貴方自分で言っつて悲しくならないの？」

「だって事実だし。」

「……………まあ、貴方がいいならいいけど。」

「あ、深川さん貴方こんなところにいましたの？」

「ウワツ、コヤンスカヤ……………何の用？」

「……………私を見るなり露骨に嫌な顔するのやめてくれませんか？まあ、それよりお仕事です。ラスプーチンさんがギリシヤの異聞帯で反乱分子を相手に苦戦してるらしいのでその増援に行つて下さいな。」

「面倒くせえ……………俺今突発性胃腸炎だからパス。」

「ハイハイ、馬鹿なこと言わないでさっさと行きますよ。」

「やめろ、俺はもつとゴロゴロするんだ！助けてくれカドツク！俺ら親友だろ?!?!」

「……………お前の分も俺がゴロゴロしてやるから安心して逝つてこい。」

「このクソ野郎オオオ!!!」

結局コヤンスカヤに連れられて仕事に向かう深川だった。

b 『欲望に忠実な人間』

この世界に生を受けて早数十年。俺はたくさんの厄介事に巻き込まれて来た。

生き返ったと思ったら仕事、仕事。

特に各反乱分子の鎮圧が面倒極まりない。
明け暮れる戦いの日々はもううんざりだ。

俺はしんどいからもっと休みたい。

だからさ……俺は今母性溢れるおっぱいが大きい女性に甘えたいんだよ。

「つー訳で良玉さんとの居場所教えてくれる？芥？」

「…………お前疲れてるのよ。今日は客室に泊まっていから休んどきなさい。私は何も聞かなかったことにするから。」

あれから深川はコヤンスカヤから依頼された仕事を終わらせた後
虞美人が担当する中国の異聞帯に訪れていた。

何度もこの異聞帯に訪れたことある深川はそこで偶然秦良玉に出
会い、一目惚れした。

それ以降彼女に懇意になることがこの異聞帯訪れる目的としてい

る。

「俺はね、あの胸に飛び込みたいんだ。許されるならルパンダイブしたいよ。そしてあの人に甘やかされたい。頭を撫でられて抱きしめられたい。」

「……………キモッ」

「俺は一目見ただけでわかったよ。あの人は男をダメにする。人の世話を焼くことが好きなお姉さん系女子だということが。これはね天のお告げだよ。神はこう言っている。」

深川よ、今こそあの女に甘えるべきだと。だから良玉さんに会わせてくんない?」

「…………お前のようなダメ人間が更に甘やかされたらもつとダメになると思うんだけど。」

「大丈夫、その時俺は超ダメ人間になるだけだ。そしてゆくゆくはあの人のヒモになるんだ!」

「…………威張って言うことじゃないわよ。というかお前にはプライドつてもんがないの?」

「プライド?何それ?美味しいの?そんなもんクソだクソ。それより頼み事聞いてくれる?」

「…………条件があるわ。それを飲んでくれたら良いわよ。」

「…………どういふ条件?」

「カルデアを潰しなさい。そしたら私が口利きしてやるわ。」

「……………」

「ま、無理よね。お前オフエリアとカドック救出の時とカルデアには二度接触したけど攻撃らしい攻撃してないし。この前のオフエリアのことも面倒くさいとか言ってたしね。」

潰さない理由は古巣に未練があるのか単に面倒なだけか知らないけど。わかつたら早く客室に帰り「OK。完膚なきまで潰してくるわ。」な……………さ……………い……………」

『ゴツドマキシマム』

「……………え？ちよつと……………お前本気？古巣よね？未練とかないの？」

「過去は過去、今は今だろ。それにカルデア潰せば俺はあの人にたくさん甘えられるんだ。なら潰さない理由はない。それにカルデアを潰すことはクリプターの目的の1つでもある。芥もそれで良いだろ？」

「……………ああ、うん……………」

「じゃあ行ってくるわ。」

深川の予想以上の切り替えの早さと自身の欲望に対する忠実さに引きながらもこれからカルデアの運命を想像した彼女は心の中で合掌した。

d 『責任なんか取りたくない』

「ウール、今大丈夫？」

「何だよ……僕今 f g o イベントの周回で忙しいんだけど。まあいい、何の用？」

深川はひよんなことからウールと交遊関係を深めており、今では定期的に会って一緒に時間を過ごすほど仲が良好になっていた。

彼自身タイムジャッカー内での立場もあり、こういった何気ない日常を誰かと過ごすといったことがとても新鮮に感じられたため内心深川に感謝している。

「実はさ……俺が出会い系アプリしてた時の話なんだけどさ……いつも通り綺麗な女の子と夜のプロレスしたいからその女の子と待ち合わせしてたんだよ。」

「……それで？」

「俺その時はわからなくて何かこの女の子どっかで見たことあるな」

程度だったんだよ。でもやった後よく顔見るとお前んとこのオーラ
ちやんだったのよ。」

「……………え？」

「そんなときはああいう気が強そうな女の子を苛めるのが楽しいし身体
の相性もあつてさ、連絡先交換してその後もちよくちよく会つてやつ
たんだよ。」

でさ、それで終わったら良かったんだけどさ……………俺いつかはわから
んけどゴムするの忘れてたみたいでさ……………生でしちやつたらしいの
よ。」

「あ……………（察し）」

「……………そしたら何か昨日連絡来てさ……………デキてみたいなんだよ。」

「……………おめでどう？」

「おめでどうじゃないよ!!俺。パパになりたくないよ!まだ色んな女の
子と遊びたいしもつとフリーダムに生きたいんだよ!」

「……………うわあ」

「頼むよウール!!時間巻き戻してよ!!タイムジャッカーなんだからそ
れぐらい出来るだろ?!!!!?!!」

「……オーラは何て言ってるの?」

「わかんないよ。あの子デキたとしか言っていないからさ……一応墮ろしてくんない?とは言うつもりだけどでもそしたら何か後が怖いし……」

「……じゃあ責任取るしかないんじゃない?」

「嫌だよ、絶対嫌だよ!!そしたら他の女の子と遊べなくなるじゃないか!!俺はもつと色んな女の子と遊びたいから時間巻き戻してよウルえもん!!」

……そうだ!!エボルトの力使ってブラックホール起こして地球を危機に晒せばそれどころじゃなくなるよね!!もしくはパンドラボックスで世界融合するかだよ!!」

「……お前つてき、たまにこっちがドン引きするぐらいクズなこと言うよね。君のそんな動機で巻き込まれる人が可哀想だろ。」

「うるさい!!お前からタイムジャッカーが言うな!

そうだ、魔王がいるじゃないか!!あの魔王に時間を巻き戻させるんだよ!!

そうしないと問題が解決出来ない事態にしてさ!!ヤバい、俺天才だよ!!早速アナザーライダーを生み出さないと!!」

「……はあ………深川、取り敢えず落ち着いて聞いて。ちよつと厳しいこと言うからさ……」

「……うん?」

「僕らタイムジャッカーが言うのもなんだけどさオーラのこと考えた？オーラの気持ちとかさ。」

「考えてもわかんないからこうなってるんだろ。俺はエスパーじゃないから言わないとわかんないよ。察してとかそんなもん無理だって。」

「……オーラとはどれぐらいのペースでやったの？」

「週3か週4。」

「……いつ頃から？」

「先月から。」

「……お前もまんざらではないんじゃないか。」

「しよがないだろ。髪を下ろすとあの子もつと可愛いくなるんだからさ……何か興奮するんだよ。」

「でも責任取るのは嫌だと？」

「うん！」

「……お前その内刺されるよ？冗談抜きで。」

「頼むよウル!! 一生のお願いだから助けてくれ！」

「……手はなくてもいいけどリスクはあるよ?」

「ホントか!!」

「これホントは他の奴に渡す予定だったんだけど……」

「……何これ?」

「アナザージオウIIウオツチ。これで歴史を改変できるよ。」

「ありがとうウール!! やっぱりお前最高の親友だよ!! 持つべきは友達だなー! 早速使おうわ!!」

「あ、おい!! それには副作用が……」

『ジオウIIウ……』

「……まあなるなようになるか。」

『フハハハハ……これで俺は責任を取らずに済む。人生のリセマラのお時間じゃー!!!』

しかし彼の前に立ちあがるのは魔王一行だけではなかった。

IF 面倒事からは逃げられない。

しっかりしなさい遠坂凜。今日はサーヴァントを召喚する大事な日。万が一にでもミスする訳にはいかないのよ。」

彼女の名前は遠坂凜。

地水火風空の5つの属性を極めて高いレベルで扱うことが可能な五大元素使いと呼ばれる超一級の魔術師であり、魔術回路はメイン40にサブがそれぞれ30という桁違いの魔力量を持つなど他の魔術師とは一線を画している。

その日彼女は聖杯戦争を勝ち抜くために必要なサーヴァントを召喚しようとしていた。

彼女に取ってとにかく一番来てほしいのは最優と言われるのセイバーで、そのクラスのサーヴァントを呼ぶために詠唱を唱え始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

告げる。

汝なんじの身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理ことわりに従うならば応えよ。

誓いを此処ここに。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷しく者。

汝 三大の言霊を纏う七天
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

本来ならこれでサーヴァントを呼べ、エミヤが召喚されるのだが、出てきたのはポテチを食うストレートヘアーの男だった。

「コンソメポテチは食ってて飽きないな。あゝ旨いんじゃない？……ここどこよ？」

「……………え？」

「……………何で俺こんなところにいんの？俺あの星でのんびり暮らしてたはずだよ？てかお前……………」

「……………あ、貴方と呼んだのは他でもない私よ。さて、貴方は何のクラスなのかしら？」

わかる。わかってしまった。彼女は魔術師として一流だ。そして観察眼も優れている。

目の前の男を見た時直ぐ様判断してある結論へとたどり着いてしまったのだ。

—もしかしてこの男サーヴァントじゃなくね？—
無理もない。召喚したらコンソメポテチを食ってる男が出てきた

のだから。

それでも彼女は一縷の望みをかけて声を震わせながらも目の前の男に訪ねる。

見る限りセイバーでないことは確実。かといってランサーでもない。というか武人の類いではない。

もしそうなら覇気やオーラといったものが身体から滲み出るはずだから。だが、目の前の男はそういう武人の独特の所作や滲み出るオーラなどは微塵もなく、今でも呑気にポテチを食っている。

もしかしたらアサシンかキャスター辺りかもしれない。世の中には意外性というものもあるのだから。

その期待を込めて彼女は目の前の男にクラスは何か質問する。

「お願い！どうかサーヴァントであってくれ！この際クラスは問わないから！」

そんな切実な思いを込めながら質問するも帰って来たのはあまりにも無情な答えだった。

「俺、サーヴァントとかじゃなくて普通の人間よ？」

辺りの空気を静寂が包んだ。

サーヴァントでもないただの人間。

彼女は目の前の男の言ってることが理解出来なかった。いや、理解したくなかったのだ。

「人、間？」

「そう、人間。れっきとしたヒューマンだよ。

Do you understand?」

聖杯戦争のために召喚したのが人間？この日のために苦労したのに呼び出されたのが人間？

あまりにも酷い現実に目眩を覚えた彼女は思わず顔に手を当てる。

そんな中パリパリパリというポテチを咀嚼する音が部屋に響き渡る。

「……………終わった。私の聖杯戦争は今ここで終わったわ。お父様、どうやら私は駄目みたいです。召喚したのがまさかサーヴァントですらない只の人間なんてどう勝てばいいと言うのよ……………」

「ああ……………ハイ、そういうことね。俺また呼び出されたのね。自堕落な暮らししてたのにホントクソだわ。

シエパンの奴どうしてるかな……………つーか俺キレていいよね？

この世界どんだ俺を面倒事に巻き込みたいんだよ。

マジでこの世界滅ぼした方がいいのかな……………でもそれすると抑止力やら千里眼持ちがしゃしゃるからなく。」

最早彼女はあまりのショックで深川の言葉など耳に入らないほど茫然自失となっていた。

その様子を見た深川はどこか不満な様子で目の前にいる彼女に話しかける。

「……………まあいいや。それよりお手洗いどこ？ポテチの油が指についてるから洗いたいんだけど。」

「……………その扉を右に曲がってすぐそこよ。」

「サンキュー。あー、手がベトベトする。」

「どうしてこうなるのよーーー!!」

深川が退室した後彼女は余りのショックに物に八つ当たりした。

あれから暫く時間が経過して彼女は落ち着きを取り戻し、軽く自己紹介を済ませた後深川に対してこれから方針を説明し、冒頭に至る。その際に凄くやつれた表情をしていたのは気のせいだと思いたい。

「どうして……どうしてサーヴァントじゃなくて人間なのよ……」

「悪かったねサーヴァントじゃなくて。じゃあそんな俺はソフアールでゴロゴロしながらポテチ食うわ。」

「大体なんなのよ……何でただの人間が召喚されるのよ……ホントありえない……ん？……ねえ深川、貴方ただの人間なのよね？」

未だにショックが抜けきらない遠坂はあの時のことを思い出しブルーンな気分になるも一つ重要なことに気づく。

「そうだよ？それが何？」

「何でただの人間がサーヴァントについて知ってるのよ？」

「あ………」

「……………」

「……………」

「ちよつとコンビニ行つてくるわ。」

自分の失言に気づいた深川は直ぐ様エスケープを決め込もうとするもそれは叶わず遠坂によつてそれは阻まれる。内心冷や汗ダラダラな深川は一刻も早くトングズラしたいが遠坂の刺すような視線がそれを許さない。

「待ちなさい。貴方何隠してるの？正直に答えなさい。」

「ワタシニホンゴワカリマセーン！ヘブライ語デオネガイシマース！

「……………私ね八極拳っていう近接戦で使える武術を会得してるの。だから力にはそれなりに自信があるの。……言いたいことわかるわよね？」

「誠心誠意回答させて頂きます。」

芯を食った質問に頭の悪いとぼけ方をしつつも彼女の脅迫紛いにより180度手の平を返す深川。それに対して呆れながらも彼女は深川に質問する。

「……………じゃあ質問1。貴方何者？」

「宇宙旅行して地球とは違う星でニートしてました。」

「……………ふざけてるの？」

「いやいや、マジだから。天地神明に誓ってもいいよ？」

「……………質問2。どうしてサーヴァントについて知ってるの？」

「過去にマスターやってたから。」

「……質問3。どういう経緯でマスターやってたの？」

「成り行きです。」

「最後の質問。アンタ、腕は立つ方？」

「まあそれなりには立つよ。お前の期待に応えられるかはわからんけど」

彼女はこのやり取りで深川が嘘をついてないことはなんとなくだがわかっていった。最初の質問の答えはとても信じ難いものだがそのことは後日必ず問い詰めることを決め、いったん胸の奥にしまっておく。

「貴方のことはわかったわ。それで……その……言い辛いんだけど……「出来れば聖杯戦争に参加してくれ？」……ええ」

（どうするかね……コイツに協力して俺に何のメリットがあるかな……金はうーん、微妙。

金は稼ごうと思えば稼げるからな……。

他のメリットは強いて言うなら彼女の身体かな？うーん我ながらゲスい。

協力する条件としていきなり身体を差し出せとか言われても悪感情しかわかないだろうな。俺としてはやるなら合意かなし崩しがいいな。無理矢理はなんかね……

あ、捕虜や敵の女は例外で。

それにここで協力拒否しても住むとこなんかないしな……食べ物は何とかなるとして。

しかもこの世界は魔術協会の連中がいるから余り大きな力は使えないな。今まではカルデア以外の人類は軒並み滅んでる状況だから使えただけども。

封印指定とかなったら不味い。そう考えると宇宙船を作つて脱出出来るチャンスは一度きり。

それが失敗したら色んな奴から目をつけられる。

うーん、ならこの世界を逆にカルデア案件にした方がいいか？特異点となればこの世界にカルデアが来るだろうから。……あんま得策じゃないか。そこで俺の藤丸が来ればいいけど違う奴らだったら不味いな。

どちらにせよ俺一人でどうこうするよりも協力してくれる奴がいた方が助かるな……まあ変な真似したら消せばいいか。」

「……無理には言わないわ。もし貴方の話が本当なら私h「別にいいよ。」……え？」

「……条件があるけどお前に協力するのは構わないよ。前もこんな感じのことあったしそれに比べれば遥かに楽だから。それと俺の衣食住の保証、そして俺自身へ深く詮索しないことこれが条件だ。」

「……わかった。協力してくれて礼を言うわ。

これから宜しくね深川。」

I F 2 散桜

「遠坂、今更だけどさお前もう一回召還しないの？」

「……何ですよ？私召還に失敗したのよ？」

「お前が召還したのはサーヴァントじゃなくて人間なんだからまた召還すれば出てくるかもしれないだろ？」

「……………あ。」

「……お前って何か抜けてるところあるよな。何？遠坂家の家訓はうっかりなの？」

「う、うるさいわね！わかってたわよ！私は別にうっかりなんかじゃ……」「ハイハイ、そうですね、遠坂さんは凄いですね」アンタねエ……………」

「それより早く召還したら？時間もないことだし」

「…わかってるわよ。」

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風（ry.）」

「サーヴァント、アーチャー召還に応じた。宜しく頼むぞマスター？」

「やったわ！深川、やったわよ！私サーヴァントを召還出来たわ！」

「良かったな遠坂。これで漸く土俵に立てたな。じゃあ俺も召還するわ。」

（アタランテか………戦力としては大丈夫だろうが断言出来る。絶対俺とは合わん。

子供とか殺したら多分キレるんじゃない？

俺も積極的に子供は殺さんけどイリヤがコイツの中でどう写るかだな……俺に取ってイリヤとか邪魔以外の何者でもないし。

イリヤ殺したらコイツキレそうだな……まあ、最悪洗脳するか神経毒流しときゃいいな。もしくは自我を奪うか。出来ればコイツはヘラクレス戦で死んでくれた方がいいな。戦力云々よりも在り方や思想の違いで内部対立が起きるのが面倒だし。）

「え？アンタも召還すんの？」

「そうだよ。俺は聖杯なんか興味ないけど戦力は多い方がいいだろう？つっても俺が召還すんのは聖杯戦争が始まった後だけだな。」

一応聖杯戦争の最中にたまたまサーヴァントを護衛として連れてくるマスターがお前に協力するという体を装うけどな。」

「……大丈夫かしらそれ。都合が良すぎない？」

「それは頃合いを見て協力するし何とかするよ。そう心配すんなって。お前は生き残ることを考えろって。な？。」

「アンタがそういうならいいけど……」

「じゃあ俺はその日まで準備するから。あ、部屋に勝手に入んなよう。」

「勝手に入るも何もここ私の家なんだけど…まあいいわ。」

拝啓、今は亡きお父様。

私はあれから色々あって聖杯戦争に参加することにしました。そこで召還したのは人間でしたが、それなりに腕が立つようなので協力関係になりました。

けどその男は召還してからというものの基本部屋に籠りっぱなしで暫く部屋から出て来たと思えば露出が凄い褐色の女性と一緒にでした。何でもあれからサーヴァントを召還したらしく

クラスはキャスターらしいです。名前は不夜城のキャスターさんと言うらしいです。

そしてこの男サーヴァントを召還したと思えばまた部屋に引きこもりました。何でもあれからまた色々準備が要るらしいです。その際に死んだような目をしてるのは気のせいでしょうか……

何でも家事やらはキャスターさんが普段の護衛はアタランテさんがしてくれるらしいです。それにキャスターさんは性能が余り良くはないらしいです。深川が目が死んでる理由が少しわかりました。

お父様、こんな面子ですが頑張って行きたいと思えます。

「遠坂、お前監督役に報告しなくていいの？」

「……いい、言われなくてもわかってるわ。お願いねアーチャー。」

「……了解したマスター。」

「……キャスター、わかっていると思うけどお前遠坂が報告を終えて家に帰るまで留守番しとけ。それと遠坂、何かヤバかったら渡した無線使ってくれ。」

相手によるけど下手に戦おうとすんなよ？わかってると思うが。」

「……アンタはどうするの？」

「俺はちよつと色々準備が必要なんだな。」

「……まあいいわ。くれぐれも変なことすんじゃないわよ？」

そして聖杯戦争が始まり……

「さくて、誰が来るのやら……」

(キアラは来んなマジで。あの人の相手は疲れるから。ある程度真つ当な奴来い！出来ればジャンヌあたりで！俺はジャンヌさんがいいんだ！若しくは沖田さんでもいいです！沖田さん、プリーズ！そしてらモチベーション上がるから！)

「……喚ばれてしまいましたか。……不夜城のキャスターです。」

「あ、ハイ……」

(……オワタ。☆5の中でも一番クソ雑魚ナメクジが来るとかマジでやってらんねえ……俺の運なさすぎじゃない？俺絶対幸運Eだよ。もうコイツここで自害させるか？……)

「あの……貴方が私のマスターですか？」

「あ……うん。そうだよ。俺が貴方のマスターだ。こんな俺だけど宜しきなキャスター？」

(はー、つつかえ。マジで笑えないんだけど。

クソ雑魚サーヴァントなんかマジで何の役に立つんだよ。王特攻だっけ？でもコイツキャスタークラスだから王特攻でかつアサシンからマウント取れる奴は不夜城のアサシンとクレオパトラぐらいだろ？ないわー。

お前何のため☆5してんの？生きてて恥ずかしくないの？って話だわ。☆5の恥晒しは帰ってどうぞ。

☆5は性能でなんぼなのにホントないわー。

しかもコイツ☆5で一番の外れ。マジでコイツの性能何なの？

マスター嘗めてるとしか思えないわ。

キャスタークラス？ポンコツの間違いだろ。とんだ貧乏くじ引かされたな。まあ最悪人間爆弾ならぬサーヴァント爆弾にすりや少しはマシになんだろ。」

そしてその夜、深川は考えごとをしながらある場所へ向かっていった。因みにこれは深川の独断で遠坂には相談していない。

(はー、あんなサーヴァントを召還するとかマジで外れだな。まあでも女で良かった。これが男だったら自害させてたわ。使えるところから家事をやらせるとか慰安目的だな。まあそれか肉壁だな。

それに俺 fate のシエヘラザードってあんま好きじゃないんだよな……見た目がタイプじゃないっか……グリムオーツのシエヘラザードの方がタイプだわ。)

(……しかもここ間違はなく stay night 時空だよな？どのルートがわからんけどあの王様もいるってことか。あ、桜ルートは勘弁してください。面倒なんです。まあでも俺にはチートのライドウオッチ擬きがあるから一先ず安心だな。油断したら死ぬけど。)

(………っーか俺どうすりゃいいんだ？宇宙船でこの星から逃げても今回みたいな事態に巻き込まれるし。俺はどう足掻いても面倒事に巻き込まれる運命にあるのかな……)

(………もういつそのこと開き直って色んなこと好き放題やるか？でもそうするとカルデア案件だよな。あれか？ちやんとこの世界に向き合わないからかな？この力を他の人のために使って幸せにしないとどんなに地球から逃げても呼ばれ続けるとかそんなんか？)

(でもそれ死ぬほど面倒くさいしやる気起きないんだよな。)

やるにしても何すればいいんだよマジで。あれか？

例えば桜を救えとかそんな感じ？無いわ。

めっちゃ面倒くさい。だってあれだろ？

身体の中に虫が入ってんだろ？幼少期に虫風呂三昧の日々を送らされてた女性にどう接しろと？

それに俺黒い何かに取り込まれたくないし。

やっぱりないわ。あの人を幸せにすんのは正義の味方さん案件ってことで。俺には手に負えないよ。)

(……それと確か遠坂ってルートの違いはあれど結構惨い死に方したのが多かったと思うんだよな……流石にそれは哀れだな……まあ助けてやろうとは思うけど面倒くせえ……うーんもう敵のマスター見つけたら即殺す方向で行こうかな？)

早く帰りたいし。この聖杯戦争をスピーディーに終わらせたい俺からしたら脅威となるのはバーサーカーかな。

セイバーは最後でいいな。王様はどうしようかな……正直関わりたくない。賢王じゃなくて英雄王だろ？襲ってきたらエルキドウ擬き作って戦わせようかな……)

(とにかく一番消さなければならんのはバーサーカーだな。マスターは多分イリヤだから殺すのは簡単だな……でもその間ヘラクレスを誰が相手にするかね……理想的なのは他の誰かが戦っているところに紛れてイリヤ暗殺だな。まあこれを一人でやるのは無謀だな。

取り敢えずまずは地雷から潰すか。)

(つー訳でやってきました！間桐邸！さて、害虫駆除を始めるとしま

すか。)

『ビルドジーニアス』

仮面ライダービルドジーニアス擬きとなった深川はジェットとロケット、エンジンの成分を利用して遙か上空に飛翔し、手の平から魔力弾を発射し、間桐邸を破壊していく。

間桐邸からは煙が立ち込め、火災が起きていた。

それでも深川構わず魔力弾を発射し続ける。それこそ某戦闘民族の王子がグミ撃ちをするかのように。

そうこうしているうちに建物から1つの人影が現れた。

それを見た深川はその人影の周りに向かってガトリングの成分を使った攻撃繰り出すが、人影の主であるメドゥーサは桜を抱えながら回避する。

メドゥーサは桜を安全な場所へ匿った後、襲撃者である彼を排除する姿勢を取るも、遙か上空にいる深川にとってメドゥーサのなど取るに足りないものとなっていた。

「桜、貴女は安全な所へ隠れて下さい。相手はおそらく空にいます。出来ればまだ安全な建物の中に隠れて下さい。」

「……ライダーはどうするの?」

「私は襲撃者を迎え撃ちます。」

「……わかった。死なないでねライダー」

「アイツら隠れて全然出てこないな。もつと建物破壊すれば出てくるかな……あんま時間かけると遠坂とかいらん奴が来そうだし早めに終わらせたいんだけど……しゃーない。あぶり出すか。」

ビルドジーニアス擬きのGNエクスペリメントシヨルダー（肩部分を覆うアーマーのこと）の万能形成装置は新たなアイテムを即席で作ることも可能。

これを利用して深川は腰にガトリング、両肩に坦克のキャノンを装備した。

（イメージとしてはガトリングはデジモンのパイルドラモンの腰に着いているもの、両肩の坦克のキャノンは仮面ライダーゾルダのギガキャノンです。詳しくはパイルドラモン ガトリング、仮面ライダーゾルダ ギガキャノンでググって下さい。）

エンジンでロケットとジェットの出力を上げて機動力を高めつつ、坦克の砲撃で障害物や遮蔽物を破壊し、あぶり出した敵を腰のガトリングで一掃するという戦法を取っている。

そのせいでメドゥーサの身体の至るところには傷があり、中には出血してる箇所もある。が、依然メドゥーサは戦う意思を見せている。

「うーん。どうしたもんか。こういう手合いは追い詰めると何するかわからないからなく。」

早期決着を狙う深川は一旦メドゥーサへの攻撃を止め、標的を間桐桜に切り替える。

建物に隠れているであろう彼女をあぶり出すため隠れていそうな場所に片っ端から砲撃を繰り返す。

その狙い通り彼女が隠れてる場所へと砲撃が来襲し、彼女はその衝撃で外へ放り出された。

「……お、いたいた。アイツそんなとこにいたのか。悪いけど死んでもらおう。」

彼女のもとへと向かった深川は確実に仕留めるため無数の弾丸と砲撃が彼女目掛けて放つ。

「桜！」

その光景を見た彼女は目隠しをしてもわかるほどに焦りを含んだ表情で彼女の側に駆け寄る。

ライダーの身を挺した働きもあって、桜の無事は守られた。が、代償はあまりにも大きく、彼女に身体には特に腹部や腕の当たりに弾丸による風穴が開いており、全身は火傷の痕が残っている。更に片腕は消失し、そこからは夥しい量の血がながれている。

深川の攻撃をその一身に受けたメドゥーサはその場に崩れ落ちる。

「ライダー！しっかりして！ライダー！」

「さく……ら……よかつ……た……あ……な……」

だが、彼女の言葉は最後まで発することなく首を跳ねられた。斬られた所からは大量の血飛沫が溢れだし、それが桜の顔についた。

「ライ……ダー……？」

「長い。お前の遺言とかどうでもいいわ。死ぬならさっさと死んでくれないかな……時間がもつたないからさ。」

そして深川は茫然自失となってる彼女に魔力の刃で胸を突き刺した後抜いた。

彼女は胸からは激しい鮮血が溢れ、やがて仰向けに倒れる。その返り血がビルドジーニアス擬きの身体に付着し

た。

倒れた場所は胸を中心として血溜まりが出来、沈み行く意識の中、桜が最期に脳裏に浮かんだのは一人の少年の姿だった。

(せ……ん……ぱ……い)

「よし、まずは一人。ま、来世は幸せになるといいな。じゃあな。」

彼女が死亡したのを確認した深川はその場から立ち去った。

I F 3 柄にもないことはするもんじやない

桜くひ○ひら舞い降り○落○て
揺れる想○のたけを○きしめたく

どうも、前回桜の命を散らした張本人である深川です。

あれから俺は桜の心臓に魔力の刃を突き刺した後、念のため首を刎ねた。

復活したら嫌だし。地雷持ちはちゃんと処理しないとね。

その後はエボル擬きになってワープで家に帰宅。

勿論遠坂が家にいないことも確認済み。渡した無線にはGPS機能もあるからアイツの位置はモロバレ。

さて、ライドウオッチ擬きを作成するか。

……ん？無線反応？

『深川、今すぐ来て！アンタの力が必要なのだ！』

……準備しようとした矢先からこれか。

「……了解。今すぐ向かう。」

こりやライドウオツチ擬きの作成は後回しかな。

場所は……学校か。てことは敵はクーフリーンかな？

となるとアタランテなら厳しいな。早く行かないと遠坂が殺されるし行きますか。

場所は学校に変わる。

そこではクーフリーンが遠坂に繰り出す槍撃をアタランテが弓での狙撃で防いでいた。

今はアタランテの援護により何とかなっているがこのままでは先にこちらの体力が尽きてしまいかねないため深川に救援を求めた。

「どこの英霊か知らんがえらく正確な狙撃をしてやがる。見つけ次第始末したい所だが、どこに隠れてるんだか。マスターを消そうにもこれじゃあ殺りづらい。どうしたもんかね……っ！」

上空から迫り来るの砲撃を回避するクーフリーン。そこに目を向けると仮面ライダービルドジーニアス（擬き）がいた。

（やはりこの程度じゃ無理か。てかコイツと殺りあうには邪魔が多い。が、その前にはまずコイツの気を引かないとな。

遠坂が殺されては意味がない。今の俺がやるべきことは遠坂の救出。そのために遠坂が逃げ切るまでコイツの相手をする事。）

『おい、遠坂。俺がコイツの相手するからお前は今のうちにアーチャーと逃げるか隠れてろ。学校を出てすぐの所にキャスターを待機させてるからソイツと合流した後にな。肉壁ぐらいにはなるはずだ。避難が出来たら無線で連絡しろ。』

『……わかった。でもちゃんと帰ってきなさい。』

『ハイハイ、わかってますよ。』

（使う成分はスパイダー、マグネット、ガトリング、ダイヤモンド、タートルでいいな。）

無線で遠坂に指示を出した深川はGNエクスペリメントシヨルダーで蜘蛛の足を模した紫の機械を生成。

（ここからは蜘蛛の足をスパイダーレッグとします。
ネーミングセンスが無いのはご容赦下さい。

スパイダーレッグは仮面ライダーキルバスがスタークに止めを刺す際の背中から生える蜘蛛の足をイメージして下さい。

それが8本あります。大きさはもちろんそれより小さいです。わからない方はy o o t o b eでキルバススパイダーフィニッシュで検索すればわかると思います)

これにより手数が8倍となり、その鋭刃それぞれが刃先に毒を含んでいるため、少しでもかすればたちまち毒が身体に浸透する。

「……ずいぶん趣味の悪い格好してるな。てめえ何者だ？それにそんなもんで俺の槍さばきに対応出来るとでも思ってたのか？」

「……御託はいいからさっさと来なよ。武人なら言葉より力で語れば？」

「……言うじゃねえか。じゃ、遠慮なく行くぜ！」

クーフリーンが間合いを詰め、深川の胸目掛けて突きを放つも、それは弾かれ、お返しに横からは3つのスパイダーレッグが脇腹を狙うもクーフリーンはそれをバックステップで回避。

その機を逃さず、深川は全てのスパイダーレッグを稼働させ、クーフリーンを仕留めにかかる。

だが、一筋縄では行かなかった。8つの毒槍が一斉に襲うもそれを全て弾くもそれに構わずスパイダーレッグを操る深川は頭、首、頸動脈、心臓、と急所を中心に狙う。

彼は急所を狙った攻撃を悉く弾きつつ、スパイダーレッグの動きを

見切らんと極限まで神経を研ぎ澄ませながらその動きを観察する。

その様子を見た深川はクーフリーンに閃光を浴びせる。

スパイダーレッグを観察することに集中していた彼に取って目眩ましは効果てきめんであった。

ライトの成分を使用した目眩ましによりできた隙を逃さず深川はスパイダーレッグの全ての足を稼働させて急所を狙う。

が、腐つても英雄。彼は視界が不明瞭な状態にも関わらずほとんどのスパイダーレッグを捌いてみせた。

しかしいくつかのスパイダーレッグは彼の皮膚を掠め、その箇所からは僅かながら出血している。

視界が明瞭になった彼はスパイダーレッグの動きをある程度見切り、深川の心臓目掛けて突きを放つ。

しかしそれをあらかじめ読んでいた深川はダイヤモンドの成分を利用したシールドで防ぎ、腰にあるガトリングでクーフリーンの胸目掛けて射出する。

直ぐ様彼が上体を捻ることにより回避する。そして事なきをえるも自身が想定していたよりも厄介な敵に認識を改める。

（こりやちと面倒だな……あの蜘蛛の足みてえなもんが8つもある上に腰についてる銃。距離を取ればあれの餌食、接近すれば腰の銃で撃

たれる。

それ以外にも先程のような絡め手の類がまだあると見ていい。少なくとも雑魚の一言で片付けていいもんじゃねえ。きちんと状況に合わせて対応出来るよう計算され尽くしてる。）

(……………やっぱり強いなこの人。さっき掠めたからそこから毒が入ったと思うけど発動にはまだまだ時間がかかる。

出来れば宝具を撃たれる前に片付けたいけどこのままでは厳しい。なら次の手を打つか。……………あ？無線？)

『こっちは終わったわ。アンタも早く撤退しなさい。』

『……………悪いけどそうもいかなかった。帰りは遅くなる。』

『……………え？ちよつと深川、アンタ何があつて』

(最初は救出が終われば撤退するつもりだったけど、予定変更。コイツはここで仕留める。

コイツは初見の戦闘でこれだから再戦闘になつたら今より勝てる確率もつと低くなる。

マスターを殺せば早いけどあのエセ神父の側には王様がいるから厳しい。何よりゲイボルグ撃たれたらまずい。

いくらジーニアスでも防げない。投げボルグならまだしも刺しボ

ルグなんてやられたら絶対に死ぬから最悪クロノスを使うことも視野に入れよう。

俺がコイツに勝てる方法は2つ。一つは毒が回って弱ったところを仕留める。

2つ目はこのまま真正面からやりあうか。

一番現実的なのは一つ目だな。その際ヒットアンドウェイ戦法になるだろうけどそれはこの際仕方ない。

となると使う成分は自ずと決まってくる。使うのはライト、消しゴム、ダイヤモンド、ターゲット、ロックでいいな。……ん？何だ？

「さつきは侮って悪かったな。お詫び本気でお前を仕留めてやるよ。」

(え？待って？待って待って？構え投げボルグじゃなくない？まさか刺しボルグ？嘘やろ!?)

お前ふざけんな！刺しボルグなんて真名唱えられたら即終わりじゃねえか！真名なんて10秒ありや言い終わるだろうしクロノスを使ってる暇はない。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！)

「刺し…誰だ！」

だが、その必殺の宝具は放たれることなく深川との戦闘をみていた人影に注意が向く。

「……命拾いしたな。お前を仕留めるのはまた今度だ。」

そしてクーフリーンは目撃者を追った。

(あつぶねー!!危うく死ぬとこだったわ。衛宮いて良かったー!!これクロノス最初から使ってたらこうはならなかったな。

やっぱり舐めプは駄目だね。柄にもなく駆け引きや小細工を主体とした戦いをしたのが駄目だったな。やっぱり俺は圧倒的スペックで相手を潰す方が合ってるわ。

てかアイツこのまま行けば殺されるんじゃないかね?まあ逆に考えれば聖杯戦争の参加者が一人減ったということだからまあいいかな。

……でもそうなるヘラクレス戦で苦労するしセイバーはいた方がいいな。アタランテだけではヘラクレスに瞬殺されるだろうし。シエヘラザード?アイツは論外。それにアイツには違う役割があるし。

駒は多いにこしたことはないから助けるか。それに俺がヘラクレスと戦うのは極力避けたい。イリヤを暗殺するという仕事があるし。仮にヘラクレスと戦うことになったらたぶんムテキやブラツクホールフォーム使うことになると思うし。

あー、面倒くせえ。でも助けるとしたらクーフリーンとまたやりあうのも視野にいれるか。)

自身の想定していたよりも事態が長引くことを予感した深川は軽く舌打ちした後彼の後を追った。

IF4 変にプライドある奴っているよね

ども、前回舐めプで死にそうになった深川です。

あれから遠坂邸に戻った俺は衛宮の様子をモニタリングしてた。
今に至るまでの経緯だけと

衛宮救出のために学校に向かう ←

衛宮が遺体となって発見されたんでお持ち帰りする ←

遠坂にザオリクさせる。 ←

生き返った衛宮を自宅に返す ←

衛宮がクローリンに再び襲われる ←

セイバー召還 ←

そのままクローリンと戦闘へ ↑今ここ

こんな感じです。

まあ、衛宮にはちよつとした細工を施しておいた。

具体的にはアイツが遺体だった時に体内にGPSを埋め込んでおいたからアイ位置とかモロバレ。

ついでに目も少しばかり変えておいた。片方だけ眼球型の小型カメラに取り替えたよ。え？元の眼球はどうしたか？

元の眼球なら抉った後潰しといたよ。

何でそんなことすんのか？いやー、俺クローリンとの戦いで思っ

たより戦いを上手く運べなかったからさ相手の情報とかもつと欲しいのよ。

で、情報を得るためにはその欲しい奴の映像みたいなのが必要なの。

もしくは直で見るか。

でもドローンとかすぐバレるしビルドジャーニアスの消しゴムのステルス機能使ってカメラの成分で観察とか考えただけでも勘のいい奴ならバレるし、その場で死亡エンドとかありえる。

そこで俺が考えたのが他人を使って偵察させること。

幸い俺には都合のいいモルモットがいるから実行出来た。

つー訳で衛宮が視覚で捉えた映像はそのまま俺が見れる訳だ。

あ、これ遠坂にバレると面倒だから秘密ね。

アイツ変なところで甘いから。

取り敢えず彼女が殺されたらアレだから渡せるもんは渡しとくか。

「つー訳でこれやるよ。」

「……なにこれ?」

「ファイズフォンX。まあ、電話と銃と時計の機能を備えたアイテムだと思ってくれ。これから先お前がまた危険な目にあうかもしれないから一応護身用として持つといて。説明書も渡しとくから後で読んでよ?」

「……………いいの？これアンタが使った方がいいんじゃない？」

「いや、お前に死なれると何か嫌だから。俺も出来る限りのことには力になるよ。まあこうしてサポートする位しか今のところ出来てないけど。」

「……………充分よ。アンタがくれたこれありがたく使わせてもらおうわ。……………それと心配してくれてありがとう。」

「いいのいいの。同じマスターだしお前には死んで欲しくないから。」

(まあ、今渡したファイズフォンX擬きには少しばかり改造してある。指紋認証式にして登録した指紋以外の奴が使うと爆発するよう施してある。)

爆発の威力は人一人を簡単に吹っ飛ばせる威力で、サーヴアントならそこそこの傷を与える。腕一本なら吹っ飛ばせるんじゃない？

それに超小型カメラを内蔵してあるからこれで他の奴による悪用を防止出来るし、もし遠坂が変な真似してもカメラでモロバレだからすぐに殺せる。

一応仮面ライダーの武器には制限時間が見つからないことはここに来る前の星で確認済みだけどそれを逆手に取られたら危ないから今回の処置を施した訳だし。

え？殺させないようにするならウォッチを渡せばいい？いやー、それはちよつとね。

俺まだ完全に信用した訳じゃないし。

ホントなら武器を渡すのにもあんまり乗り気じゃないんだけど自衛の手段が魔術しかないのはなんか不味いと思うし。)

「……………どうした遠坂？何かあった？」

「衛宮君大丈夫かしら。彼変なことに巻き込まれてないといいけど。」

「……………そうだな。彼、無事だといいな。」

(……………もう手遅れなのは黙つところ。)

「……………今日はいろいろあったからお前も疲れてるだろう。後は俺がやっつくから寝とけ。」

(さて、衛宮に途中で抜けられたら面倒だからあいつがこの戦争に関わるように事を進めるか。

少なくともバーサーカー戦が終わるまでは生きていないと困るし。)

場面はセイバーとランサーが戦闘を始めた所へと変わる。

衛宮が召還したセイバーは騎士王アルトリア・ペンドラゴンであり、彼女は自身のマスターを狙うクーフリーンと刃を交えていた。

そして激しく刃を交える中クーフリーンは自身の身体に違和感を感じていた。

(……………なんだ……………何かがおかしい……………先ほどから身体重くて仕方ねえ。セイバーと戦い始めてからだから特にそれが顕著だ。……………こりやおそらく毒か?)

(なら原因はなんだ? 目の前の奴が毒を盛った?……………違うな。勘だが

コイツはそんなこととするタイプの奴じゃねえ。とすると…アイツか。)

クーフリーンの脳裏に浮かぶのは彼が最初侮った男である深川。

「どうした、先程からだんだん動きが鈍くなって来ているぞランサー。」

「へっ、抜かせ…ここつからが本領発揮するところよ!!」

何とか虚勢を張るもその端正な顔には止めどなく汗が滴り、息が上がっている。動悸が激しく、身体が思うように動かない現状に彼は自分が深川に出し抜かれたことを知る。

(あの野郎…最初からこれを想定してやがったのか…俺としたことがまんまと一杯食わされるとはな

……………やっぱりあの場で殺しとくべきだったか…………)

そんな危機感を覚えた彼にも関わらずの視界が歪み始める。それは先ほどの深川との戦闘でスパイダーレッグが掠めた際に盛られた毒の効果ここになって顕著に現れ始めたからだ。

(クソツ……思ったより毒の効力が強い…マジでこのままじゃやべえかもな…………)

その様子を見たセイバーは怪訝な表情を浮かべながらも剣を構える。目の前の突如弱体化した敵を仕留めるかどうか刹那の間逡巡するも彼を排除する決心を固め、その剣を振るわんとしたその時、彼の首が跳ねられた。

第三者の襲来により、警戒心を引き上げるセイバーをよそに彼の首を跳ねた男深川はそんなこと気にも留めてないように振る舞う。

「おー、衛宮。無事だったか。」

「……………あんたは確か……………」

「知り合いですかマスター？」

「……………ああ。遠坂と一緒に俺を助けてくれたんだ。」

「まあ、ちよつとした知り合いみたいなもの。あれからお前が変なことに巻き込まれてないか不安になって来てみれば案の定さ。しかも見たところサーヴァントを召還

してるじゃねえか。

俺がこんなこと言うのも何だけどさ……………お前悪いことは言わないからこの戦いから手を引きな。ここじゃ今までの常識が通用しないからさ。」

「……………どういうことだ？」

「これは早い話戦争だね。要は自分の願いを叶えるためのバトルロワイアルなの。だから人も簡単に死ぬ。まあ殺るか殺られるかってこと。そんな場所にお前のような一般人を巻き込む訳にはいかない。

お前は巻き込まれただけの人間だから今ある日常を捨ててまでこの戦いに参加する必要はないと思うよ？もう一度言うよ手を引きな

「？」

「……………戦争」

「そう、戦争。どういうもんかはわかるよね？」

「……………これは戦争なんだよな？ ってことは俺みたいな無関係の人間が巻き込まれる可能性もあるってことだよな？」

「……………まあ否定は出来ないな。」

「だったら俺は戦う。これ以上俺みたいな巻き込まれる人間が出ないようにこの戦争を止める!!それに自分の願いのために殺し合うなんてそんなの間違ってる!!」

しばらくの間逡巡した衛宮が出した答えはこの戦争に身を投じるいうものだった。

「……………」

「確かに俺は戦争をしてる奴らからみたらおかしいのかも知れない。でも…この戦争でこれ以上罪もない被害者を出すわけにはいかな
「あー、ちよつといい？」……………何だよ？」

自分の決意を表明してるせいとかヒートアップする衛宮に対して待ったをかける深川。それに対して彼は明らかに不満気な顔をする。彼からすれば話の腰を折られたように感じるのだからそれも無理もないことだが。

「あー……………その……………覚悟を決めたところ悪いんだけどさ……………どうやって戦うの？」

「……………それはこれ以上犠牲者を出さないよう「あー違う違う。」……………？」
そしてそんな彼の口から出てきた質問は至極現実的なものだった。

「お前戦いの素人だよな？ 戦闘は普段サーヴァントに任せればいいとして自分が戦うことになったたらどうすんの？ そんな奴が場数踏んでる奴にどう戦うの？」

「……………」

「……………」

沈黙。先ほどまでヒートアップしてた空気はどこへやら一気にクールダウン。そして衛宮が長い沈黙の末に出した答えは

「……………えつと……………それは……………深川に鍛えてもらう!!」

「えつ。」

セイバーではなく深川に鍛えてもらうというものだった。それに対してセイバーは驚嘆の表情を浮かべ、思わず戸惑いの声が溢れ落ちる。

「ああ…うん……………そつか……………まあ今日はもう遅いし？早く寝な。」

(……………は？え？何で俺なん？そこはセイバーだろ。俺戦いを人に教えられる程上手くないよ？偉そうなこといったけどチートスペックでゴリ押ししてきただけの奴だよ?)

が、そんな深川の思考を遮り1つの甲高い声が響く

「こんばんは、シロウ。」

そこにいたのはイリヤスフィール・アイツンベルン。彼女の登場により深川は冷や汗を隠せないでいた。

(うわ、バーサーカー戦じゃん。早くない？俺学校のランサーとの戦いの疲労残ってるからダルいんだけど。まあイリヤを即殺すにも側にはヘラクレスがいるから厳しいな。戦力的にも俺のコンデイション的にも不安だしここは一度撤退か妥当か。)

『ゲイツリバイブ疾風!』

(衛宮には悪いけどここは俺だけでもトンスラさせてもらうか。つー

ことわざよならく。)

深川は状況が不利と見るやすぐさま撤退に切り替える。

衛宮を囷にしてゲイツリバイブ疾風擬きでトングズラしようとするもが、次の瞬間衝撃が深川を襲いかかり、ゲイツリバイブ疾風擬きはその身体にスパークを走らせ解除される。

(……あ？何で俺が地に伏しているんだ？何故ゲイツリバイブが解除されている。……まさか)

深川が自分をこんな目に追いやった元凶に目を向けるとそこにはヘラクレスがいた。

(まさかヘラクレスの奴擬きとはいえゲイツリバイブ疾風のスピードに反応したとでもいうのか？ジオウⅡをも凌ぐスピードを?)

「ありがとう、バーサーカー。貴方のおかげで邪魔者を無力化出来たわ。後はそこで這いつくばっている男を殺せばその男は終わりよ。」

(……は？コイツ今何ていった？俺を殺す？……ホムンクルスが？ふざけんじゃねえぞ……)

「……ハハッ」

「あら？あまりの危機に気が触れたの？」

「ハハハ……アハハハハ……」

「……深川？」

「疾風を破ったぐらいで随分いい気だな……」

重い身体に鞭を打ちつつ立ち上がった深川はイリヤを強く睨み付ける。その眼は怒りと殺意で溢れかえっていた。

そこへ騒ぎを聞き付けた遠坂とアタランテがやってくる。

「俺を殺るだど？……殺れるもんなら殺ってみろよ……調子乗んなよ
ホムンクルス風情があ!!」

『ムテキゲーマー』

「ちよつと深川!!アンタがここでキレてどうすんの!!……っでああ、
もう!アーチャー、彼を援護して!!」

「セイバー!!深川を頼む!!今のあいつは冷静じゃない!」

煌めく黄金の身体を持ちながらもその内にはドス黒い感情を秘めている深川。

アルトリアらが援護するよりも早く彼はヘラクレスを無視してイリヤを真っ先に狙う。

108tもの膂力を秘めた黄金の腕が彼女の首の骨を握り潰さんとその手を伸ばすが、ヘラクレスが身体を楯にしたことによりその手はイリヤのに届くことはなかった。

が、深川はイリヤの首の骨を潰すことが難しいと見るやすぐさまヘラクレスに狙いを変え渾身の力をこめてヘラクレスの腹を殴打する。

ヘラクレスの腹を拳を上向きに殴ったことによりその巨体を宙に浮かせ、首の根を掴んだ後力の限り引きちぎる深川。

ヘラクレスの鮮血が煌めく黄金のボディに付着するも彼はそれを気にすることなく血にまみれた手で貫手の構えを取る。

だが、ヘラクレスはすぐさま十二の試練（ゴッドハンド）により復活し、目の前の敵を排除せんとその斧剣を深川の胴体目掛けて風ぎ払う。

だが、今の彼はハイパームテキ（擬き）であるためダメージは与えられず斧剣から発せられた衝撃波だけが辺りを襲う。

そして深川は彼の肘窩に狙いを定め、ハイパーライドヘアーを絡み付かせ、斧剣を持った片腕を捻り切る。

捻り切られた腕は宙を舞い、手の平からこぼれ落ちた斧剣は深川の

手に渡る。

そして彼はショートワープ機能を使い、イリヤの元へ移動し、斧剣を彼女目掛けて振り下ろした。

IF5 人は変わる。良くも悪くも。

身の丈を優に越す斧剣がイリヤを襲う。

彼女は咄嗟の出来事で反応が追いつかず迫り来る死をただ座して待つことしか出来ない。

だが、彼女のサーヴァントであるヘラクレスがそれを許さない。

ハイパームテキと言えども衝撃まで無効に出来る訳ではなく、ヘラクレスの渾身の一撃は深川をほんの僅かではあるがノックバックさせ、斧剣の軌道を反らすことに成功した。

だが、よろきながらも深川は斧剣を直ぐ様左手に持ち替え横へと振るう。

彼女へとその凶刃が迫るがヘラクレスが立ち塞がる。

だがすぐさま横へと振るわれた斧剣をハイパーライドヘアーで掴んだ後宙に投げる。

斧剣が宙を舞い、地に落ちるまでの間深川はヘラクレスとの距離を詰め、膝蹴りを顔面に食らわせる。

そして宙から舞い落ちた斧剣をハイパーライドヘアーでキャッチした深川はその斧剣を以て僅かながらよろめいたヘラクレスの両の眼を切り裂いた。

目を潰したヘラクレスに止めをさすために斧剣を心臓目掛けて突貫させようと試みる。

だが、ギリシヤの大英雄がその程度で怯むはずもなくヘラクレスはその巨体な見合わない俊敏な動きで蹴りを深川の顎めがけて放つ。

最初の数発の蹴りにより僅かながらよろめくも続けざまに襲い来る蹴りの軌道がある程度見切った深川はヘラクレスの右足首を掴みジャイアントスイングした後、横へと投げつける。

ヘラクレスは衛宮の自宅へとその巨体をめり込ませ、彼の自宅の一部が半壊し、めり込んだヘラクレスがその身を翻し反撃に出ようとする。

しかし、それよりも早く深川は拳に黄金のオーラを纏わせ常人には捉えきれない速さでヘラクレスに何度もボディブローを食らわせ、空中に浮かべた無数の魔弾を雨を浴びせる。

そして後頭部を両拳を握った状態で力の限り殴り付けヘラクレスの頭を地面にめり込ませた。

めり込ませた地面には小さなクレーターが出来ており、辺りには亀裂が走っている。

そして止めと言わんばかりに黄金のオーラを纏わせた足でヘラクレスの頭を踏み潰した。

だが、直ぐ様復活したヘラクレスは彼に果敢に挑む。

何故ムテキである深川に絶えずヘラクレスは攻撃し続けるのか。それは一重にイリヤを守るためであった。

ヘラクレスも幾重もの攻防のやり取りで深川に大抵の攻撃が通じ

ていないのは理解している。

それでも構わず攻撃し続けるのは自分に気をそらさせ、イリヤにその矛先が向かないようにするため。

先程のヘラクレスを無視して、イリヤを直ぐ様狙ったことから彼は隙さえあればいつでも彼女を殺しにかかるかとふんでいた

そんな中、初めて回避したのが顎を狙った攻撃。そして先程のノックバツク。

彼はこれらのことから攻撃自体は効かなくとも衝撃が与え、仰け反らせることが出来ることを見抜いていた。

ヘラクレスの意図を何となく察したイリヤはすぐさまその場の離脱を試みようとしていた。深川の自分に対する異常なほどの憎悪と殺意に怯えながら。

何だ……一体何が起こってるんだ。

何か急にキレた深川は黄金のボディにドレッドヘアーが特徴の何かへと変わった後バーサーカーに挑んで行った。

首を引きちぎり、腕を捻りきるなど随分と惨い戦い方をしていたけど彼はバーサーカーをほぼ一方的に蹂躪している。

あまりの戦いに付け入る隙がないのかセイバーとアーチャーも加勢に入れずに入る。

「なるほど……そういうことですか。」

何か分かったのかセイバーに訪ねると帰ってきた答えは驚くべきものだった。

「彼の動きは怒りのせいか無駄が多い。」

戦いも我々サーヴァントからすればその技術は稚拙なもの。だが、戦いの素人という訳ではない。少なくとも場数は踏んでるようだ。」

……それだとおかしいんじゃないか？戦いに動きに無駄があると不味いのは俺でもわかる。

ある程度場数を踏んでるとはいえ、そんなハンデを抱えたまま戦況を運べるものなのか？

「相手にもよりますが、大抵の場合不可能です。ですが、彼はそれを覆す要素を持っている。」

……何だそれは？

「俄には信じがたいですがおそらく今の彼には相手の攻撃が通用しないのでしょう。」

どういうことだ？相手の攻撃が通用しない？

「士郎、覚えてますか？彼が激昂する前に起動させたものを。」

……言われてみれば何か機械のようなものを起動させてた気がする。

「……確かムテキゲーマーとか何とか言ってたわね。……まさか……」

遠坂がその時の様子を思い出したのかそこから導き出される結論に戦慄すると同時にセイバーは次の言葉を紡ぐ。

「俄には信じがたいですがおそらく先程のあれは無敵になれる機械なのでしょう。そうだとすれば彼があそこまでバーサーカーと戦えるのも納得がいく。」

……無敵になれるだって？何だよそれ……そんなの

「反則も良いところね……」

俺の心情を代弁するかのように遠坂が呟く。

確かに無敵になれるのなら戦闘技術だったりそういうものを気にしなくてすむ。

何せ無敵なのだから相手の攻撃を意に介する必要がなくなる

「彼は今までその機械の性能を主とした戦法を取ってそのやり方で勝ち続けて来たのでしよう。むろんあれだけの力です。何かしらのデメリットはあるでしょう。」

そして彼がどういう人間であるかは少しですがわかりました。」

……………そこまでわかるのか？

「ええ。私はこれまで多くの人を見てきたので。彼は周りから見下されることを極端に嫌う。いや、正確に言えば自分が下だと思ってる者から見下されるのを嫌悪するといふべきでしょう。」

先程彼が激昂した際に発したホムンクルス風情という言葉から彼はホムンクルスに対して差別的な感情を持っており、人間である自分に強い自負を持っている。」

……………それってアイツは煽り耐性が低いってこと？

「……………おそらく。自身が見下してる者からの嘲笑や侮辱などに異常なまでに激昂したことから彼はプライドが高い人間だと思われる。」

……………ならどうしてアイツは彼女がホムンクルスだって分かったんだ？

「それは本人に聞くのが一番かと。」

「それにしてもあの黄金の鎧は脅威的ね。バーサーカーの攻撃を受けてもダメージというダメージもないみたいだしまさに反則の塊みた

いなものね。」

「……そうでもない。あの男は彼女に対する怒りで気づいてないがこのままいけば不味いことになる。」

「……どういうこと？アーチャー？」

「あの男はこの戦いの前にも別のサーヴァントとも一戦交えてるのだろう？そんな状態でバーサーカーを相手にしている。体力的にも厳しい筈だ。現に動きが鈍くなっている。」

「今でこそあの黄金の鎧に守られているが、あれだけの力だ。相応のデメリットもある筈。例えば制限時間とかな。」

「それが解ければどうなることか。」

「それって………！」

「今のところはあの黄金の鎧の効果のおかげで何ともないようだがこのまま行けばあの男敗けるぞ。」

「……それってかなりヤバイじゃないか!!」

「セイバー!!深川の助太刀を頼む!!」

「アーチャー、貴方は援護をお願い!!」

一方の深川はイリヤをすぐさま殺したいのにも関わらずそれを妨害するヘラクレスに苛立ちを感じていた。

自分の思い通りにならない現状に苛立ちを隠せない深川は内心穏やかではない。

深川は力至上主義である。力こそ全て。力がなければ何も出来ない。

その考えの元これまで生きてきた。そして彼はそう言えるだけの力を持っており、貫いた物の力とは言え彼はこれまで多くの敵を下してきた。

そしてその力の優位性も十全に理解している彼はいつしか一部を除いた周りの者全てを見下すようになった。

更に原作知識という神の視点まで持っているのだから彼が驕り高ぶるのは道理と言えた。

そのことを忠告した冥界の女神も最古の王の言葉も彼には響かなかった。

正史ならこの忠告を聞かずにゲーティアとの戦いに挑み後一歩ま

で追い詰めるも、制限時間を迎え戦死するという結末だったが、この世界の彼は何の因果か制限時間を迎える前に勝ってしまった。

結果、彼を正せるものはおらず今現在に至るまでその考えは変わっていない。

そして彼はやがて自身の思い通りにならないと気が済まないほどに傲慢で稚拙になっていった。

今の彼のヘラクレスに対する心情は奇しくもかつて平成仮面ライダーの歴史を消さんとした1人の男が、常磐ソウゴと明光院ゲイツが変身する最中に時を止めた後放った言葉と同じだった。

架空の存在相手にマウントを取り、悦に入る。

そして思い通りにならなければ癩癩を起こす。

何と醜く稚拙なことか。

だが、これが今の彼だった。

彼は1人で女神を下し、大量のラフムを捌き、単身ビーストを2体撃破したという事実が彼をここまで増長させた原因の1つでもあった。故に彼は今怒りに囚われている

ーこの肉ダルマが……早くしないとあのホムンクルスを殺すことが出来なくなるだろうが。雑魚の癖に俺の前に立ち塞がるんじゃないねえよー

そんな思いが彼の冷静さを奪う。そして視野狭窄に陥る。

そのせいで彼はヘラクレスの攻撃を受けることが多くなった。

ハイパームテキ（擬き）なのでダメージはないものの、精神的ストレスが蓄積していき、動きにだんだん無駄が多くなってきた深川。

だが、腐つても人理修復を体験し、地獄が遙かマシに見えるレベルの修羅場を潜り抜けて来た彼はヘラクレスの
首に蹴撃を浴びせる。

いくらヘラクレスともいえど108トンもの蹴撃を食らっては無事では済まず、僅かの間よろめく。

それを好機と見た彼はハイパームテキの必殺技であるハイパークリティカルスパークキングを繰り出す。

かつて憐憫の獣に多大なダメージを与えたこの技はヘラクレスの残りの命のストックを瞬く間に削っていった。

今や彼の残りの命は10から3まで削らされ、その身体をかつてない衝撃が襲う。

だが、深川も度重なる戦闘の疲労、ゲイツリバイブの副作用、そして暫く平穏な暮らしをしたことにより体力が衰えたのが今になり効果を露にしてきた。

ヘラクレスが深川を仕留めようと心みるもセイバーが彼の前に立ち塞がる。

その様子を見たヘラクレスは直ぐ様その場から跳躍し、戦場から離脱した。

辺りを見ればイリヤもいつの間にか姿を眩ませている。

恐らく自分が戦ってる間に逃げたのだろう。

ーあの、ホムンクルスと肉ダルマ……次会うときは必ず殺してやるー

その瞳に憎悪にも似た怒りを宿し、その場を後にした。